

公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書 (52)

東九州自動車道建設（志布志 I C～鹿屋串良 J C T間）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

こ まき 小牧遺跡 4

(鹿屋市串良町)

縄文時代前期～弥生時代初頭編

第2分冊

(全3分冊)

2023年3月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター

総目次

【第1分冊】

巻頭図版（カラー）

序文

報告書抄録

遺跡位置図

例言

目次

第I章 発掘調査の成果	1
第1節 発掘調査の経過	1
第2節 整理・報告書作成の経過	6
第II章 遺跡の位置と環境	11
第1節 地理的環境	11
第2節 歴史的環境	11
第3節 志布志IC～鹿屋申良JCT間の遺跡	15
第III章 調査の方法と層序	21
第1節 調査の方法	21
第2節 層序	21
第3節 層序についての補足	29
第IV章 遺構および遺物の分類	31
第1節 遺構の分類	31
第2節 土器の分類	32
第3節 石材および石器の分類	36
第V章 縄文時代前期～中期の調査	41

第1節 遺構	41
第2節 遺物（土器）	51
第VI章 縄文時代後期前半の調査	71
第1節 遺構	71

【第2分冊】

第VI章 縄文時代後期前半の調査	1
第2節 遺物（土器）	1
第VII章 縄文時代後期末から弥生時代初頭の調査	109
第1節 遺構	109
第2節 遺物（土器）	120
第VIII章 縄文時代前期から弥生時代初頭の石器	155

【第3分冊】

第IX章 自然科学分析	1
第1節 概要	1
第2節 分析結果の報告	1
第X章 総括	71
第1節 縄文時代前期～中期	71
第2節 縄文時代後期前半	73
第3節 縄文時代後期末～弥生時代初頭	88
第4節 発掘調査からみえる小牧遺跡	89
補遺	94
写真図版	95
奥付	

第2分冊目次

第VI章 縄文時代後期前半の調査	1	第1節 遺構	109
第2節 遺物（土器）	1	第2節 遺物（土器）	120
第VII章 縄文時代後期末から弥生時代初頭の調査	109	第VIII章 縄文時代前期から弥生時代初頭の石器	155

挿図目次

第2-1図 縄文時代後期前半遺構配置図および土器出土状況	2	第2-6図 Va類土器	7
第2-2図 縄文時代後期前半分類別土器分布図(1)	3	第2-7図 Vb類土器	8
第2-3図 縄文時代後期前半分類別土器分布図(2)	4	第2-8図 Vc類土器	9
第2-4図 縄文時代後期前半分類別土器分布図(3)	5	第2-9図 VIa類土器(1)	10
第2-5図 IV類土器	6	第2-10図 VIa類土器(2)	11
		第2-11図 VIa類土器(3)	12

第2-12図	VIb類土器(1)	13	第2-57図	VIIIb, c類土器(胴部)(1)	58
第2-13図	VIb類土器(2)	14	第2-58図	VIIIb, c類土器(胴部)(2)	59
第2-14図	VIb類土器(3)	15	第2-59図	VIII類土器(波頂部・装飾)	60
第2-15図	VIb類土器(波頂部)	16	第2-60図	IXa類土器(1)	61
第2-16図	VIc類土器	17	第2-61図	IXa類土器(2)	62
第2-17図	VI類土器(胴部)	18	第2-62図	IXa類土器(3)	63
第2-18図	VIIa類土器(1)	19	第2-63図	IXb類土器(1)	64
第2-19図	VIIa類土器(2)	20	第2-64図	IXb類土器(2)	65
第2-20図	VIIa類土器(3)	21	第2-65図	IXb類土器(3)	67
第2-21図	VIIa類土器(4)	22	第2-66図	IXb類土器(4)	68
第2-22図	VIIa類土器(5)	23	第2-67図	IX類土器	69
第2-23図	VIIb類土器(1)	24	第2-68図	X類土器	69
第2-24図	VIIb類土器(2)	25	第2-69図	XI類土器	70
第2-25図	VIIb類土器(3)	26	第2-70図	縄文時代後期の無文土器(1)	71
第2-26図	VIIb類土器(4)	27	第2-71図	縄文時代後期の無文土器(2)	72
第2-27図	VIIb類土器(5)	28	第2-72図	縄文時代後期の無文土器(3)	73
第2-28図	VIIb類土器(6)	29	第2-73図	特殊な底部・脚	75
第2-29図	VIIa類土器(1)	30	第2-74図	特殊器種および写真	76
第2-30図	VIIa類土器(2)	31	第2-75図	底部片分布図	77
第2-31図	VIIa類土器(3)	32	第2-76図	後期前半の底部(1)	78
第2-32図	VIIa類土器(4)	33	第2-77図	後期前半の底部(2)	79
第2-33図	VIIa類土器(5)	34	第2-78図	後期前半の底部(3)	80
第2-34図	VIIa類土器(6)	35	第2-79図	後期前半の底部(4)	81
第2-35図	VIIa類土器(7)	36	第2-80図	後期前半の底部(5)	82
第2-36図	VIIa類土器(8)	37	第2-81図	後期前半の底部(6)	83
第2-37図	VIIa類土器(9)	38	第2-82図	後期前半の底部(7)	84
第2-38図	VIIa類土器(10)	39	第2-83図	後期前半の底部(8)	85
第2-39図	VIIa類土器(11)	40	第2-84図	円盤状土製加工品重量, 直径計測値	86
第2-40図	VIIa類土器(胴部)	41	第2-85図	円盤状土製加工品分布図	86
第2-41図	VIIIb類土器(1)	42	第2-86図	円盤状土製加工品(1)	87
第2-42図	VIIIb類土器(2)	43	第2-87図	円盤状土製加工品(2)	88
第2-43図	VIIIb類土器(3)	44	第2-88図	円盤状土製加工品(3)	89
第2-44図	VIIIb類土器(4)	45	第2-89図	円盤状土製加工品(4)	90
第2-45図	VIIIb類土器(5)	46	第2-90図	円盤状土製加工品(5)	91
第2-46図	VIIIb類土器(6)	47	第2-91図	円盤状土製加工品(6)	92
第2-47図	VIIIb類土器(7)	48	第2-92図	円盤状土製加工品(7)	93
第2-48図	VIIIb類土器(8)	49	第2-93図	円盤状土製加工品(8)	94
第2-49図	VIIIb類土器(9)	50	第2-94図	円盤状土製加工品(9)	95
第2-50図	VIIIb類土器(10)	51	第2-95図	円盤状土製加工品(10)	96
第2-51図	VIIIb類土器(11)	52	第2-96図	円盤状土製加工品(11)	97
第2-52図	VIIIb類土器(12)	53	第2-97図	縄文時代後期末～弥生時代初頭の遺構 配置図および遺物分布図1	110
第2-53図	VIIIb類土器(13)	54	第2-98図	縄文時代後期末～弥生時代初頭の遺構 配置図および遺物分布図2(部分拡大)	111
第2-54図	VIIIc類土器(1)	55	第2-99図	土坑59・60号と土坑59号出土遺物	112
第2-55図	VIIIc類土器(2)	56			
第2-56図	VIIIc類土器(3)	57			

第2-100図	土坑61号	113	第2-141図	石匙(2)	169
第2-101図	土坑61号出土遺物	114	第2-142図	石匙(3)	170
第2-102図	土坑62号と出土遺物	115	第2-143図	石匙(4)	171
第2-103図	集石74・75号	116	第2-144図	スクレイパー(1)	172
第2-104図	石斧埋納遺構1号と出土遺物(1)	117	第2-145図	スクレイパー(2)	173
第2-105図	石斧埋納遺構1号出土遺物(2)	118	第2-146図	スクレイパー(3)	174
第2-106図	石斧埋納遺構1号出土遺物(3)	119	第2-147図	二次加工剥片	175
第2-107図	XII類土器	121	第2-148図	使用痕剥片(1)	176
第2-108図	XIII類土器	122	第2-149図	使用痕剥片(2)	177
第2-109図	XII・XIII類土器(浅鉢形土器)	124	第2-150図	石核・原石(1)	179
第2-110図	XIV類土器	125	第2-151図	石核・原石(2)	180
第2-111図	XIV類土器(浅鉢形土器)	126	第2-152図	磨製石斧(1)	183
第2-112図	XV類土器(1)	128	第2-153図	磨製石斧(2)	184
第2-113図	XV類土器(2)	129	第2-154図	磨製石斧(3)	185
第2-114図	XV類土器(3)	130	第2-155図	磨製石斧(4)	186
第2-115図	中華鍋形土器(1)	131	第2-156図	磨製石斧(5)	187
第2-116図	中華鍋形土器(2)	132	第2-157図	磨製石斧(6)	188
第2-117図	中華鍋形土器(組織痕土器)(1)	133	第2-158図	磨製石斧(7)	189
第2-118図	中華鍋形土器(組織痕土器)(2)	135	第2-159図	磨製石斧(8)	190
第2-119図	中華鍋形土器(組織痕土器)(3)	136	第2-160図	磨製石斧(9)	191
第2-120図	中華鍋形土器(組織痕土器)(4)	137	第2-161図	磨製石斧(10)	192
第2-121図	中華鍋形土器(組織痕土器)(5)	138	第2-162図	磨製石斧(11)	193
第2-122図	中華鍋形土器(組織痕土器)(6)	139	第2-163図	磨製石斧(12)	194
第2-123図	XV類土器(浅鉢形土器)(1)	141	第2-164図	磨製石斧(13)	195
第2-124図	XV類土器(浅鉢形土器)(2)	143	第2-165図	磨製石斧(14)	196
第2-125図	XV類土器(浅鉢形土器)(3)	144	第2-166図	磨製石斧(15)	197
第2-126図	XVI類土器(1)	146	第2-167図	磨製石斧(16)	198
第2-127図	XVI類土器(2)	148	第2-168図	磨製石斧(17)	199
第2-128図	XVI類土器(3)	149	第2-169図	磨製石斧(18)	200
第2-129図	XVI類土器(4)	151	第2-170図	磨製石斧(19)	201
第2-130図	縄文時代前期～弥生時代初頭の石器 分布図(1)	156	第2-171図	磨製石斧(20)	202
第2-131図	縄文時代前期～弥生時代初頭の石器 分布図(2)	157	第2-172図	磨製石斧(21)	203
第2-132図	縄文時代前期～弥生時代初頭の石器 分布図(3)	158	第2-173図	磨製石斧(22)	204
第2-133図	縄文時代前期～弥生時代初頭の石器 分布図(4)	159	第2-174図	打製石斧(1)	207
第2-134図	石鏃(1)	161	第2-175図	打製石斧(2)	208
第2-135図	石鏃(2)	162	第2-176図	打製石斧(3)	209
第2-136図	石鏃(3)	163	第2-177図	打製石斧(4)	210
第2-137図	石鏃(4)	164	第2-178図	打製石斧(5)	211
第2-138図	石鏃(5)	165	第2-179図	打製石斧(6)	212
第2-139図	石錐	166	第2-180図	打製石斧(7)	213
第2-140図	石匙(1)	168	第2-181図	打製石斧(8)	214
			第2-182図	打製石斧(9)	215
			第2-183図	打製石斧(10)	216
			第2-184図	打製石斧(11)	217
			第2-185図	礫器(1)	218

第2-186圖	礫器(2)	219	第2-202圖	石皿(2)	237
第2-187圖	磨·敲石(1)	222	第2-203圖	石皿(3)	238
第2-188圖	磨·敲石(2)	223	第2-204圖	石皿(4)	239
第2-189圖	磨·敲石(3)	224	第2-205圖	石皿(5)	240
第2-190圖	磨·敲石(4)	225	第2-206圖	石皿(6)	241
第2-191圖	磨·敲石(5)	226	第2-207圖	石皿(7)	242
第2-192圖	磨·敲石(6)	227	第2-208圖	砥石(1)	244
第2-193圖	磨·敲石(7)	228	第2-209圖	砥石(2)	245
第2-194圖	磨·敲石(8)	229	第2-210圖	擦切石器	246
第2-195圖	磨·敲石(9)	230	第2-211圖	石錘(1)	248
第2-196圖	磨·敲石(10)	231	第2-212圖	石錘(2)	249
第2-197圖	磨·敲石(11)	232	第2-213圖	石錘(3)	250
第2-198圖	磨·敲石(12)	233	第2-214圖	石製品(1)	251
第2-199圖	磨·敲石(13)	234	第2-215圖	石製品(2)	252
第2-200圖	磨·敲石(14)	235	第2-216圖	輕石加工品(1)	253
第2-201圖	石皿(1)	236	第2-217圖	輕石加工品(2)	254

表 目 次

第2-1表	後期包含層土器觀察表1	98	第2-16表	晚期包含層出土土器觀察表1	152
第2-2表	後期包含層土器觀察表2	99	第2-17表	晚期包含層出土土器觀察表2	153
第2-3表	後期包含層土器觀察表3	100	第2-18表	晚期包含層出土土器觀察表3	154
第2-4表	後期包含層土器觀察表4	101	第2-19表	包含層石器觀察表1	255
第2-5表	後期包含層土器觀察表5	102	第2-20表	包含層石器觀察表2	256
第2-6表	後期包含層土器觀察表6	103	第2-21表	包含層石器觀察表3	257
第2-7表	土器底部觀察表1	104	第2-22表	包含層石器觀察表4	258
第2-8表	土器底部觀察表2	105	第2-23表	包含層石器觀察表5	259
第2-9表	円盤狀土製加工品觀察表1	105	第2-24表	包含層石器觀察表6	260
第2-10表	円盤狀土製加工品觀察表2	106	第2-25表	包含層石器觀察表7	261
第2-11表	円盤狀土製加工品觀察表3	107	第2-26表	包含層石器觀察表8	262
第2-12表	円盤狀土製加工品觀察表4	108	第2-27表	包含層石器觀察表9	263
第2-13表	晚期遺構内出土土器觀察表	119	第2-28表	包含層石器觀察表10	264
第2-14表	晚期遺構内出土石器觀察表	119	第2-29表	包含層石器掲載一覽表	264
第2-15表	晚期遺構觀察表	119			

第Ⅵ章 縄文時代後期前半の調査

第2節 遺物（土器）

小牧遺跡からは、Ⅳa層～Ⅳb層を中心として、縄文時代中期末頃～縄文時代後期中頃までの多量の土器がバリエーション豊かに出土した。ただし今回報告する縄文時代後期前半の土器のなかにはⅤ・Ⅵ層から出土したものも含まれる。第Ⅲ章第3節にも記載したが、特に9～16区において、アカホヤ火山灰層（Ⅴ層）以上の残存状況が後世の攪乱の影響を受けて不安定な箇所がある。複数年に渡って接合を試みたが、口縁部～胴部までを復元できた資料は少なかった。そこで本報告では、先行の研究・編年を基に、主に口縁部の形態と文様の特徴に着目し出土土器をⅣ～Ⅹ類に分類した。また、縄文時代後期前半に帰属すると判断できるが、Ⅳ～Ⅹ類への分類が難しかったものをⅪ類とした。

本遺跡から出土した土器の遺跡における各分類ごとの分布の状況を第2-2～4図に示している。後期前半の土器全般の出土状況は、西側の竪穴建物跡に沿うエリア、東側の竪穴建物跡に沿うエリア、14～16区の3か所に集中して分布する様子がみられる。このうち3～5区の南壁近くの凹みの西側縁にあたる微高地のあたりに、特に多くが集中した。各分類ごとに分布の特徴がみられるが、詳細な分析は第Ⅲ章第3節と第Ⅹ章第2節にて述べる。

器種はⅣ～Ⅵ類とⅪ類は深鉢のみが出土し、Ⅶ～Ⅹ類は深鉢に加え、鉢形や台付皿形の特殊な形態のものも少数出土した。類別の特徴を示した模式図を第1分冊第Ⅳ章に示しているので参照いただきたい。

Ⅳ類（第2-5図 538・539）

二又状の工具による細い沈線文を施す。沈線文は部分的に鋸歯状に描かれる特徴がみられる。本遺跡では口縁部外面に段を有するものと、直口する口縁部片2点と、Ⅳ類の可能性のある胴部片が1点出土した。

Ⅳ類土器は、大平式と考えられる。

538は緩い波状口縁を呈し、波頂部が小さく隆起する。器壁はやや外傾しながら直線的に立ち上がる。口唇部は平坦に形成され連続刺突文を施す。539は口縁端部を欠く。胴部との境目に段を形成する。

Ⅳ類のなかでも古手のタイプは539のように、口縁部と胴部の境目に段を形成し文様帯は口縁部にのみ施され、新しいタイプは段を形成せず文様帯がやや下方に広がる。なかでも538のように縦位の文様を描くものはより新しい傾向がみられるとの研究がある（相美2017）。

Ⅴ類

口縁部に指頭幅の太幅の凹線によって、1帯あるいは2帯構成の文様帯を形成する。凹線の幅は太く、1cm以上のものが主流である。凹線と器面との境目を丁寧にナデて仕上げるものが多い。裏面に文様が浮き出るものが多く、口唇部に指や棒状工具による刺突を巡らせたものもみられる。口縁部～胴部の器壁の厚さが均一なものも多く、平坦口縁が主であるが、口唇部に突起を有するものもみられる。ナデ調整のものと、器面に条痕が残るものが出土し、調整の違いにより前者をⅤa類、後者をⅤb類に細分した。ただし本遺跡から出土したⅤa類は、ナデ調整がやや雑で、先に施した貝殻条痕をわずかに残す傾向がみられる。

Ⅴ類は、阿高式の系統であると考えられ、なかでもⅤb類は器面に条痕を残す宮ノ前タイプ（新東1988）に該当すると考えられる。Ⅴ類の胎土には金色の雲母を含むものが多い。また、円形の刺突文を施した突帯に区画された阿高系の凹線文（三角形のモチーフ）をもつものが1点のみ出土した。これはⅤ類との時期差が小さいと捉え、Ⅴc類に分類した。

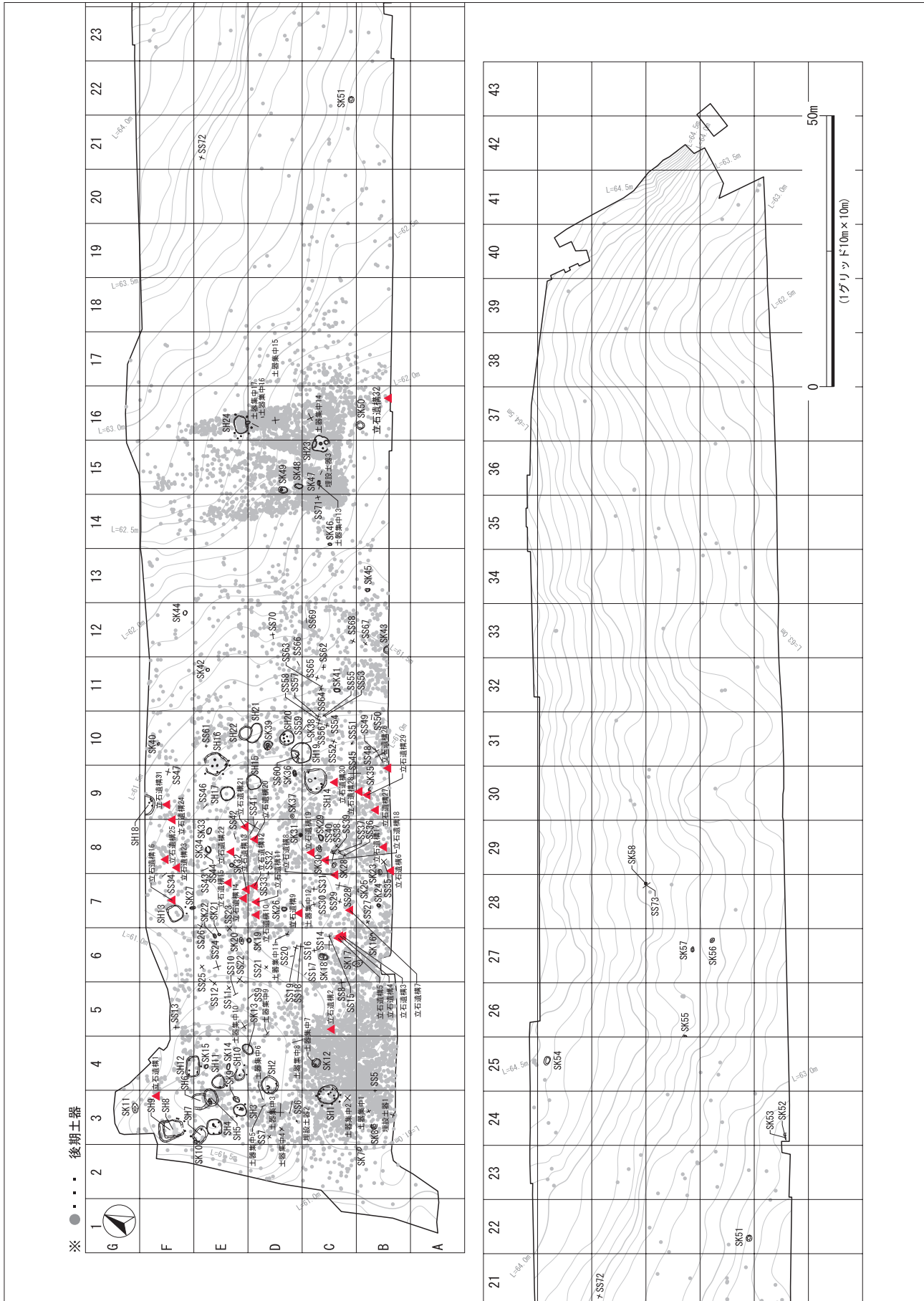
Ⅴa類（第2-6図 540・541）

口縁部が残存するものが少なく全体形は不明だが、文様帯の幅が広く、胴部下位に及ぶ傾向がみられる。掲載した2点ともに凹線幅が太く、線同士の間隔も広めである。凹線を施した後でよくナデて仕上げられ、凹線と器面との境目が滑らかである。同心円状あるいは三角形のモチーフを描く。口縁部が残存する540は、平坦口縁で口唇部に小さな突起を有する。

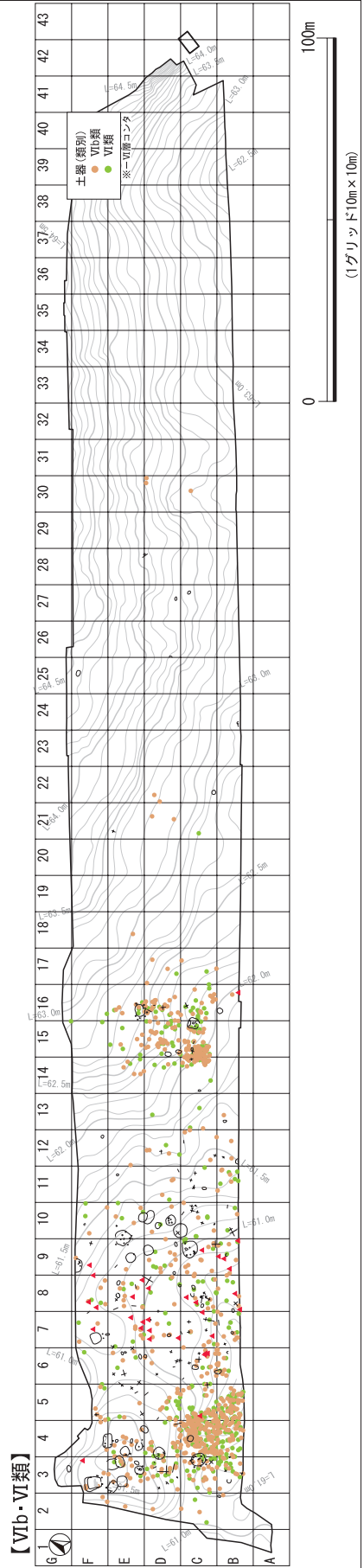
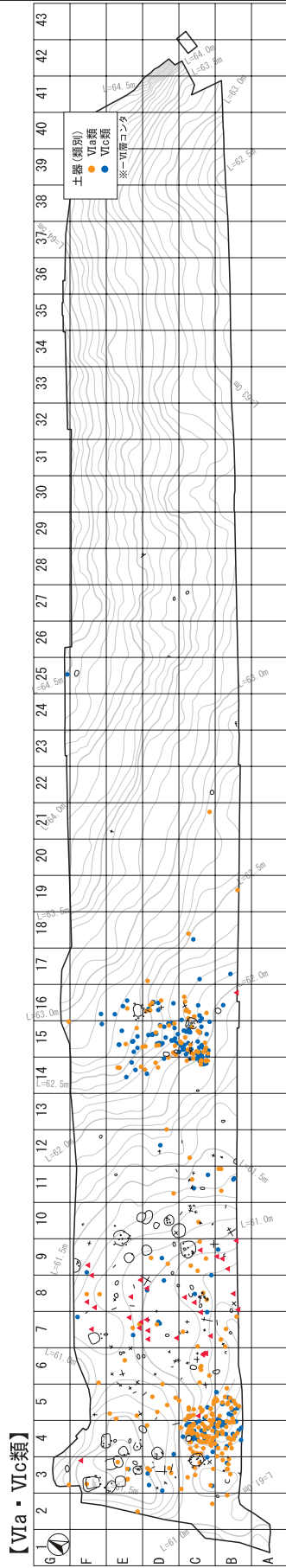
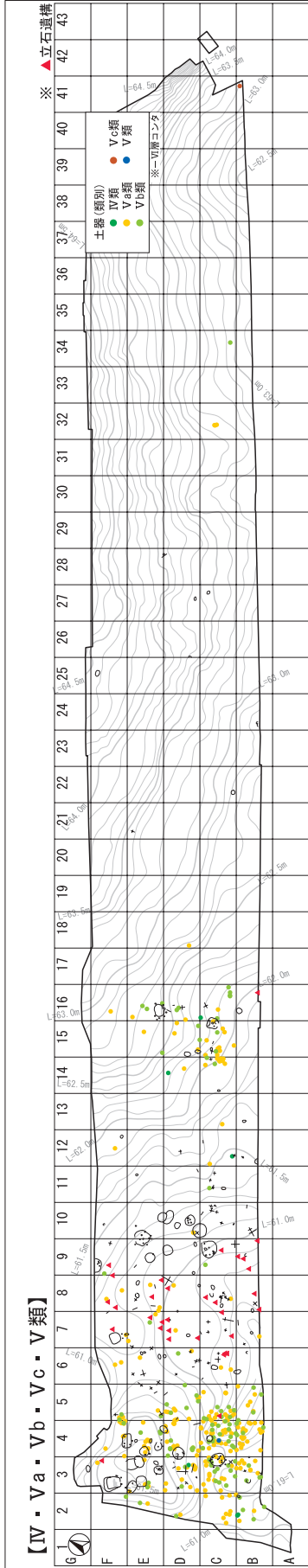
Ⅴb類（第2-7図 542～548）

出土点数は少ないが、平坦口縁で口縁部がやや外傾しながら直線的に立ち上がる傾向がみられる。凹線の幅がⅤa類より少し細くなり、凹線同士の間隔はやや密である。凹線と器面との境目はⅤa類と同様なもの（542・545）と、あまりナデられていないことからやや明瞭なもののみみられる。

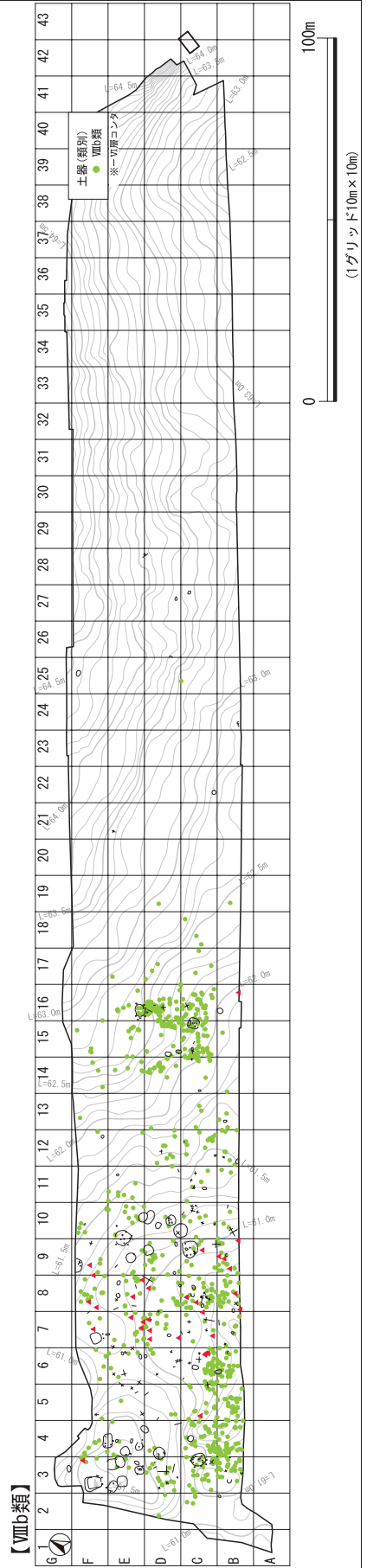
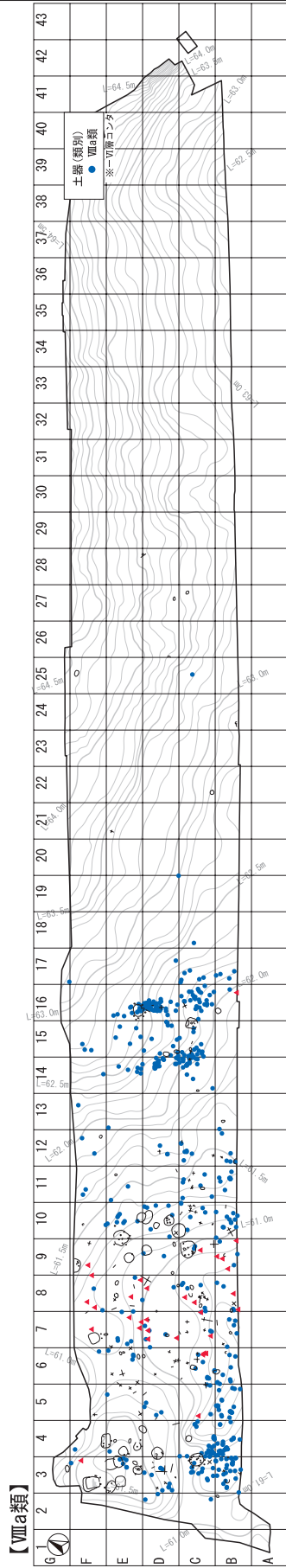
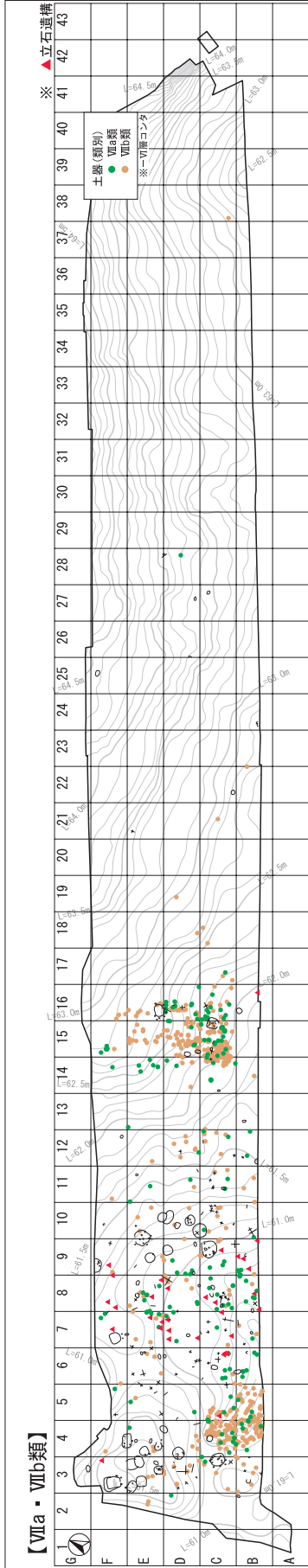
542・543は口縁部直下に2段の連点を巡らせ、その下に凹線文を描く2帯の文様帯構成である。544は口縁端部を指により連続して強く押圧することによって、波状に成形している。546は胴部最上位に縦位の高い突起を貼り付け、突起の外側を押圧する。口縁部直下に縦位の凹線を連続して施し、その下に凹点と曲線を描く。548は下胴部片で、縦位の凹線文が底部近くまで施される。



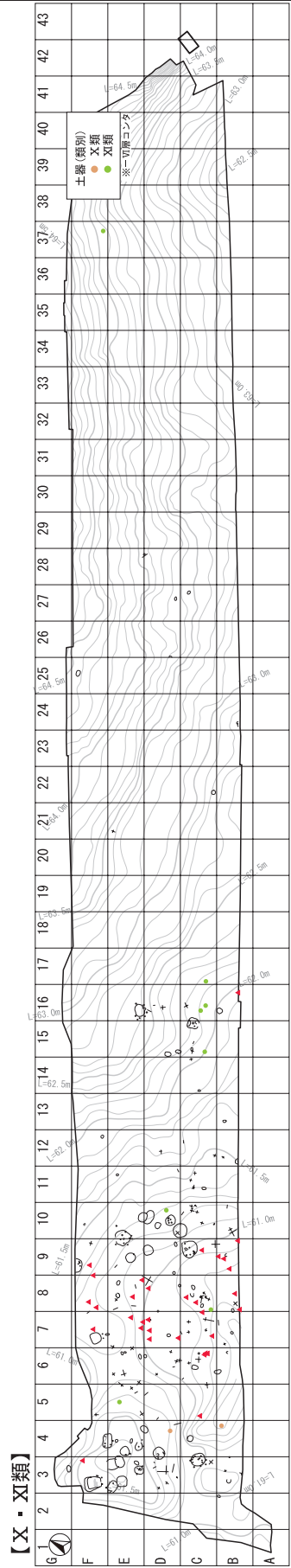
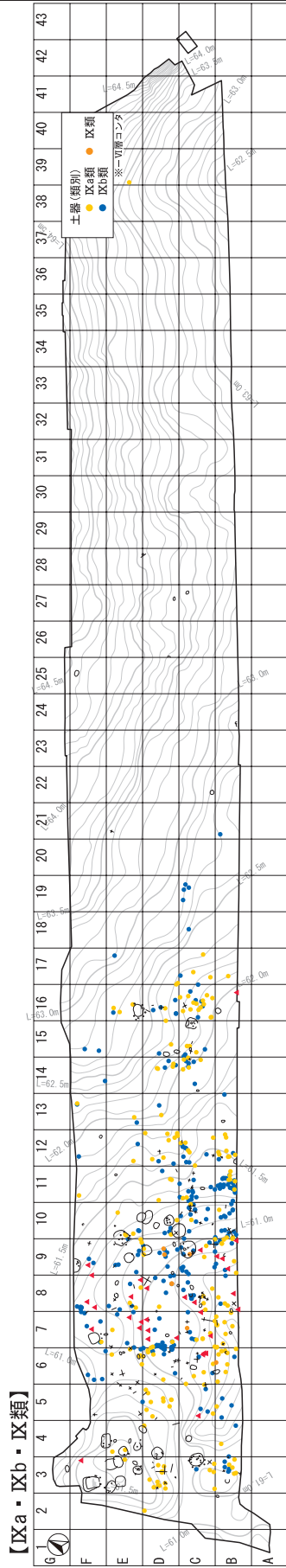
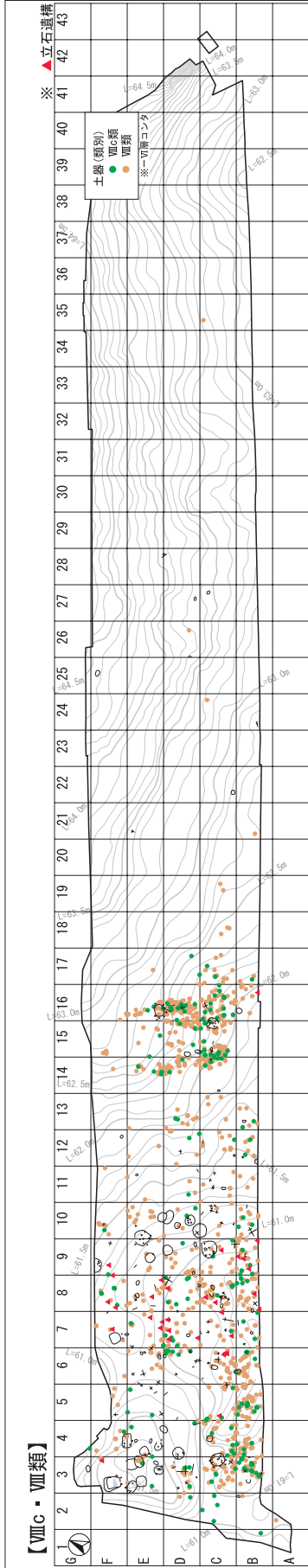
第2-1 図 縄文時代後期前半遺構配置図および土器出土状況



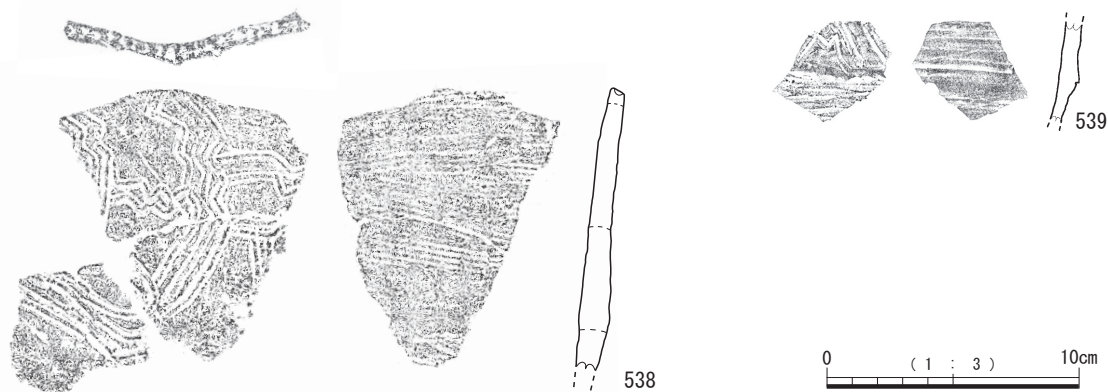
第2-2図 縄文時代後期前半分類別土器分布図(1)



第2-3図 縄文時代後期前半分類別土器分布図(2)



第2-4図 縄文時代後期前半分類別土器分布図(3)



第2-5図 IV類土器

Vc類 (第2-8図 549)

549は扁平で太幅の突帯に区画された凹線文を施す。凹線の幅はVa, Vb類と比較してやや細く、時期の差がある可能性も考えられるが、三角形状や四角形状のモチーフを一筆描き風に描く特徴からV類に分類した。文様は底部近くに及ぶと推測される。口唇部には円形刺突文を連続して施す。内外面ともにナデ調整である。混和材は粒子が細かく砂状に入る。搬入された可能性もある。外面に付着した煤を年代測定した結果(報告No.4)¹⁴C年代が $3900 \pm 30\text{yrBP}$ 1 σ , 2 σ 暦年代範囲が2466-2297 calBC (95.4%)である。

VI類

胴部上位に凹線により文様帯が形成される。文様帯は口縁部～頸部に集約され横位に展開する。凹線の幅はV類土器よりもやや細くなる傾向がみられ、幅4～5mm程度のものが主流である。線がさらに細いものもみられ、VIII類との分類が難しかったが、そのうち単沈線によるひと筆書き様のモチーフを横位に繰り返して展開させるものをVI類に分類した。円形・三角形・四角形状の渦巻文、鉤型文、多重の沈線文、大波文など文様のバリエーションも非常に豊かで、角に丸みのある幾何学文が描かれるものが多く出土した。V類よりも凹線同士の間隔が狭まり、文様の密度がさらに高い印象となる。口唇部や口縁部直下に棒状工具や貝殻腹縁による刺突文を巡らせるものも多い。口縁部の形態は、直口するものと外反するものがあり、平坦口縁と波状口縁のものが出土する。器面の調整は、特に外面に条痕を残すものの比率が高い。

VI類は、従来、岩崎下層式・上層式と呼称されていた一群、そして、それらを包括して捉えられる宮之迫式系統(金丸2006・2011, 真邊2010など)に該当すると考えられる。口縁部の形態・文様の特徴によりVIa類, VIb類, VIc類に細分した。

VIa類 (第2-9～11図 550～571)

口縁部の文様帯が2帯構成である。口縁部上位に爪や工具による縦位の連続刺突文を巡らせ、その下に凹線による文様帯を形成する。口縁部はやや外傾しながら直線的に立ち上がるもの、ごく緩く外反するもの、わずかに内湾するものなど様々な形態がみられる。口縁部をあまり肥厚させないが、幅広あるいは断面三角形の小さな突帯を貼り付け、突帯上に連続刺突を施すものも出土した。河口貞徳氏が提唱した岩崎下層式を含むと考えられる(河口1953)。

550～554は口縁部外面の最上位に小さな突帯を貼り付け、斜位に連続刻目を施す。その下には多重の凹線を水平に描く。552は文様のパターンは同様であると推測されるが、口縁部外面をわずかに肥厚させて口唇部よりやや下がる位置に連続刺突文を施す。550はわずかに右上がりの凹線文を描き文様の一部に曲線や入組状の部位が確認できる。553も同様に文様の一部に曲線が確認できる。551の口唇部と外面には赤色顔料が付着し、分析の結果、鉄が多く含まれ、ベンガラを塗布した可能性がある。556は波状口縁で、口縁部を肥厚させ、縦位の連続刺突文を施す。口唇部には円形の深い刺突文を連続して施す。沈線の一部を円形に変形させたモチーフを横位に展開させ、残存部の状況から4～5か所にモチーフを施している可能性が考えられる。モチーフ中央の崩れた円形の部分は波頂部の真下ではない。555とは文様の雰囲気類似する。557は口縁部外面に幅広の薄い突帯を貼り付けた痕が残る。558～561は口縁部を肥厚させずに縦位の連続刺突文を巡らせる。559は爪による、560は棒状の工具による刺突と推測される。558～568は縦位の連続刺突の直下に一重・平行・多重の凹線を横位に巡らせ、その下に幾何学文や曲線文を描く。558は外傾しながら直線的に立ち上がり、丸い山形の突起を有することから波状口縁となると推測される。561も残存部は少ないが波状口



第2-6図 Va類土器

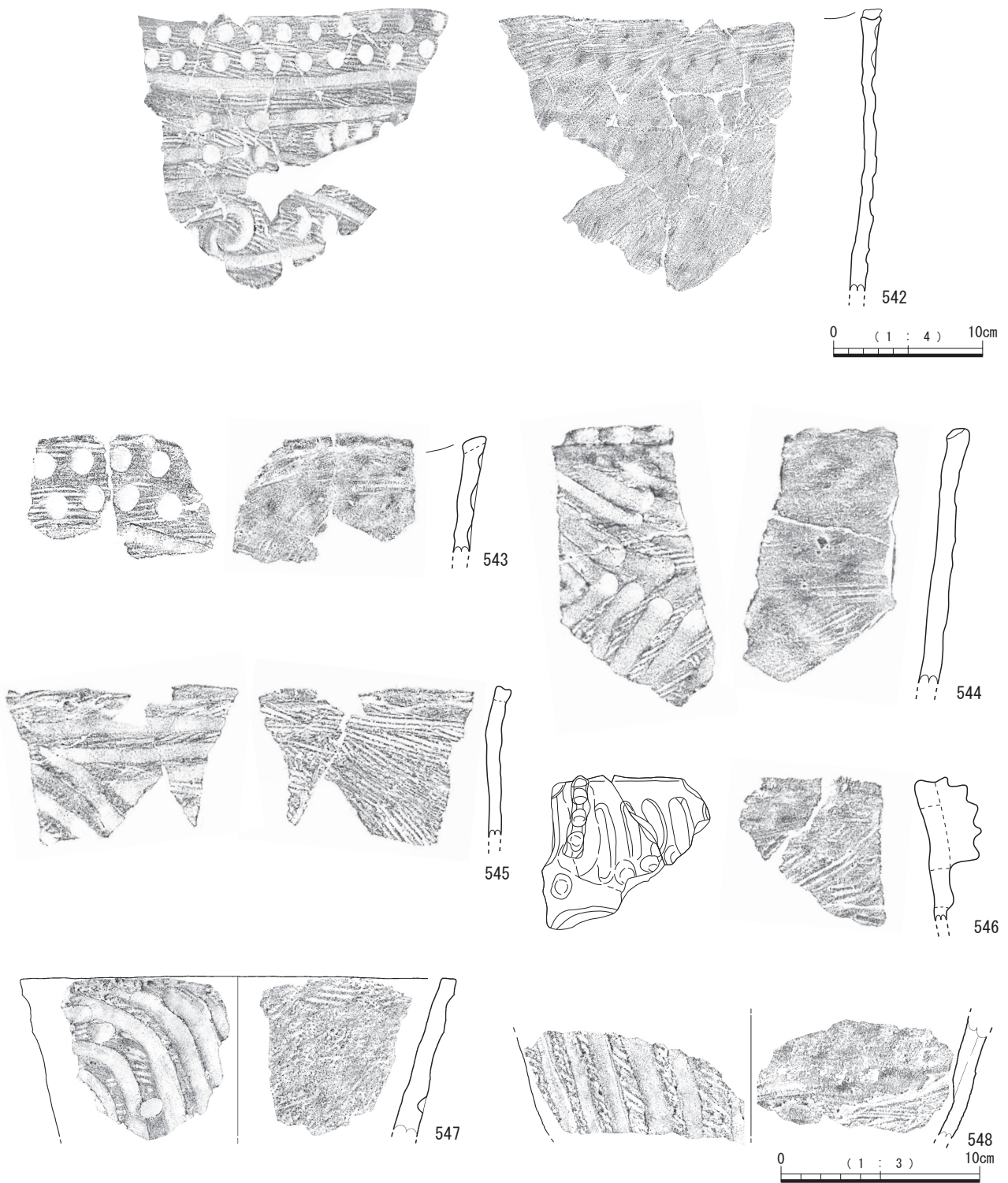
縁である。563は細幅の突帯を口縁部最上位に貼り付け、平坦口縁で、部分的に突起を有する。口唇部には平坦面を形成する。円形のモチーフを囲むように、大型の貝殻の腹縁による刺突文を放射状に施す。円形のモチーフはさらに下位にも展開させると推測される。口縁部よりわずかに下がる位置に粘土紐を粗く貼り付けて巡らせ、突帯上をハの字状に連続して刻む。566と568は同一個体と判断したもので、波状口縁を呈し波頂部に突起を有する。568の口唇部の沈線様の拓影は、粘土の貼り付けの痕跡である。胴部には四角の渦巻き状のモチーフを横位に連続させて施すと推測される。564, 565, 567は器形・文様・胎土の特徴が類似するため同一個体と判断した。平坦口縁に低い突起を有し、突起直下の口縁部は他の箇所にくらべて厚みをもたせて口唇部に平坦面を形成する。突起直下に同心円文を描く。569・570はここに分類したが、569は上→下、570は下→上の方向で線を描いたもので、施文の技法には違いが見られる。ともに口縁部直下に横位の凹線を施しその下に縦位の凹線を描き、線の終点と始点を強く押圧する特徴は本遺跡から出土したⅧ類にもみられることから、時期が若干下る可能性もある。570は口縁部がすぼまり胴部が張り出す丸みを帯びた形態であり、口唇部をやや肥厚させて平坦面を形成する。胴部上位の縦位の凹線文は2重に構成される。胎土は550・552・554・561・562・566・570には白色の粒子が目立つ。556・552・553・560・570には金色の雲母を含む。558・569は角閃石を多く含み粒子の細かな混和材が砂状に入る。571は口縁部外面を幅広く肥厚させ、W字状の凹線文を連続させる。南福寺式土器に該当すると考えられる

が、ここでは形態、文様の特徴からⅥa類と併行する時期の遺物と考えられるため、ここに含めた。

Ⅵb類 (第2-12~14図 572~599)

口縁部外面の文様帯が1帯構成のものが多く、胴部上位に集約される。口縁端部を平たく成形し刻目や円形刺突文を巡らせるもの、口縁部に突起や粘土紐による装飾を施すものが多く出土した。器形は口縁部が外反しながら開くタイプが増加する。Ⅵ類のなかでも文様のバリエーションが特に豊かな一群である。河口貞徳氏が提唱した岩崎上層式を含むと考えられる(河口1953)。

572~577は口縁部~胴部の器壁が均一で、口唇部を丸くおさめるかやや角張らせて形成し、凹線により曲線を描く。572・573には大波文を、575・577には曲線文を横位に連続して施す。573・576は口縁部直下に横位の凹線を巡らせる。576には補修孔が施される。578~587は口縁部を肥厚させず、口縁端部の外面や口唇部に連続刺突を施すものである。582~585のように、口縁端部に連続する刺突が大きく深いものは、口唇のラインが小さく波打つような見た目であり、Ⅵb類との類似性もみられる。582・583の文様はやや細めの沈線により描かれ、部分的に入組状となる。588・589は平坦口縁を呈する。588は外面に篋状工具による連続刺突を等間隔に施す。589は小片により全体的な施文の状況は不明だが、内外面の調整や、文様の凹線の特徴によりここに分類した。器壁が非常に薄い。590~599は波状口縁を呈し、凹線が細めである傾向がみられる。590は欠損のため形態不明だが、口唇部に透かしのような装飾を有すると推測される。外



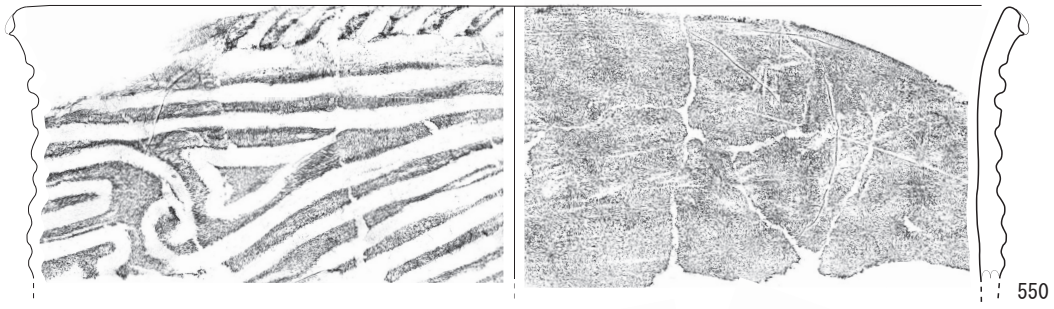
第2-7図 Vb類土器

面に付着した煤を年代測定した結果(報告No.4)¹⁴C年代が $3760 \pm 20\text{yrBP}$ 1 σ , 2 σ 暦年代範囲が2208-2131calBC(74.02%)である。591・594は波頂部に粘土紐を貼り付ける。592は波頂部と、波頂部口唇部と波頂部同士の間あたり2~3条のごく細い沈線による刻目を施す。VIIIb類(指宿式系)に類似する特徴である。596, 597も、

VIII類(指宿式系)に近い印象の平行沈線文や連点文を描くが、口縁・口唇の形態はVI類の特徴を有する。593・594は貝殻腹縁を用いて連続刺突を施す。胎土は572~575・579・581・582・586・587・596には金色の雲母を含む。580・591は角閃石を多く含み粒子の細かな混和材が砂状に入る。



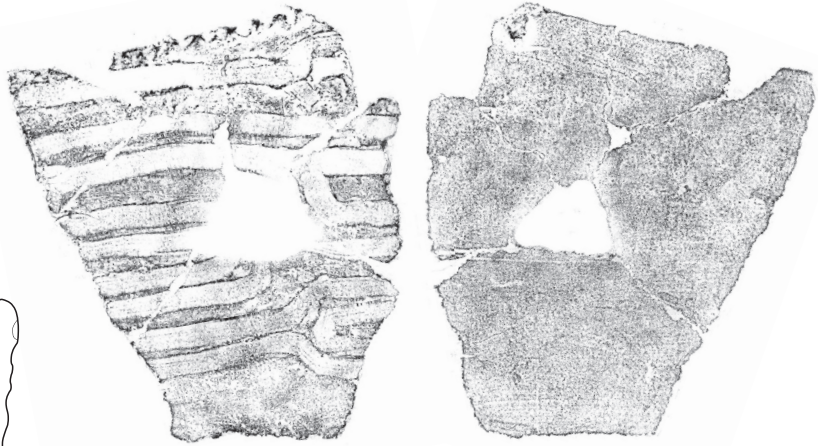
第2-8図 Vc類土器



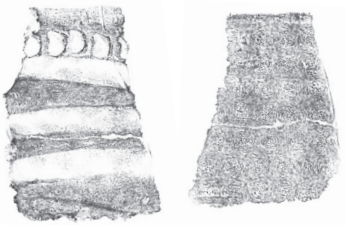
550



551



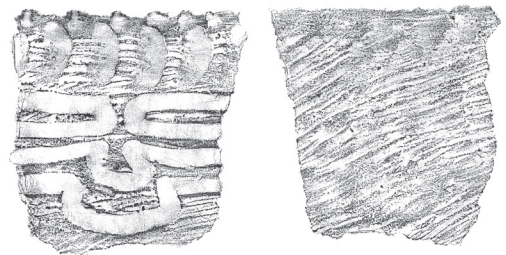
553



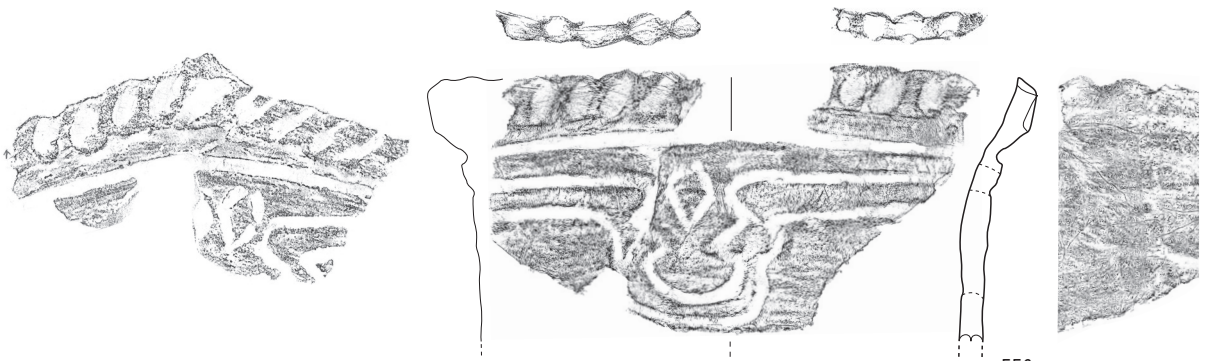
552



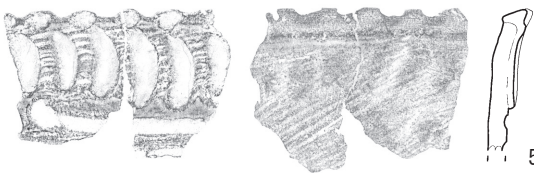
554



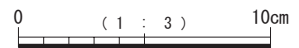
555



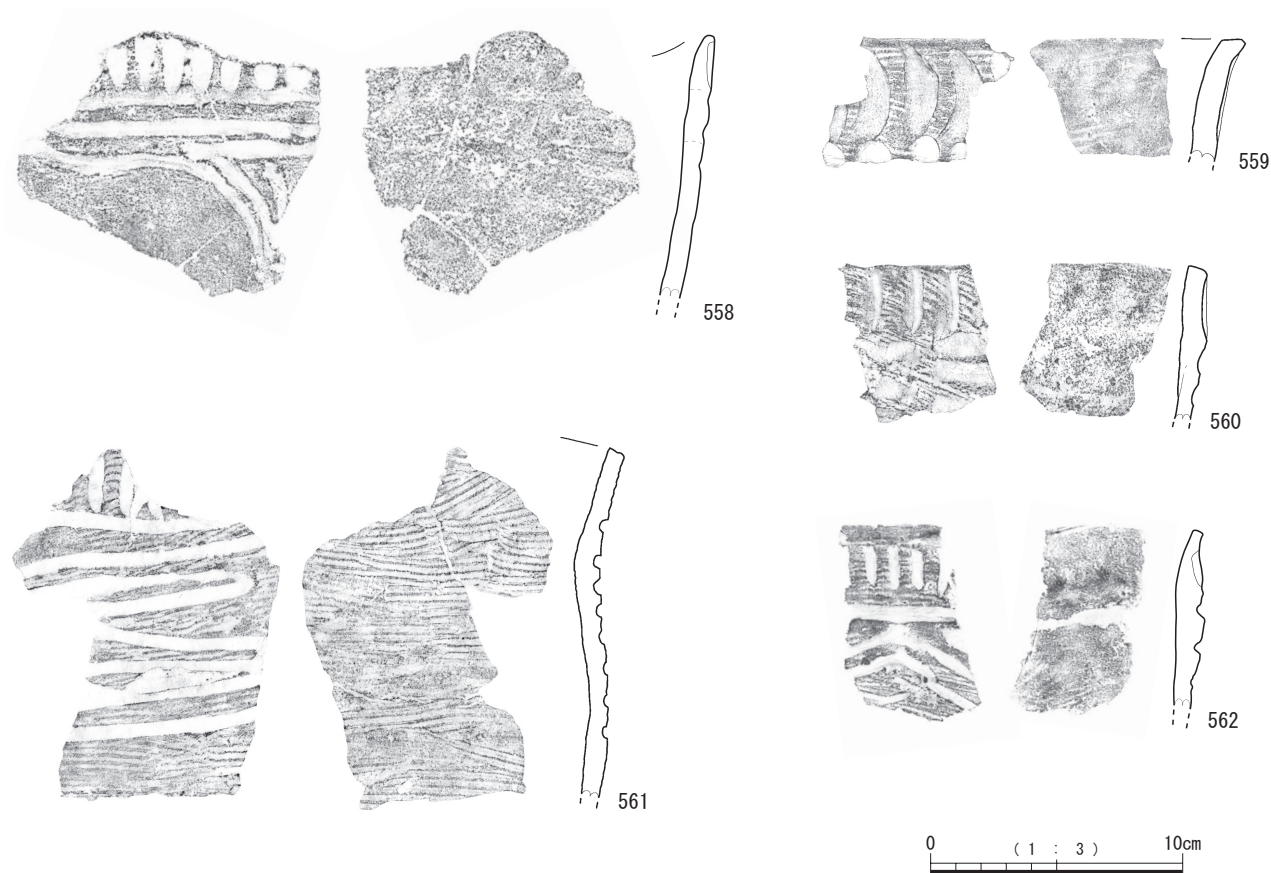
556



557



第2-9図 VIa類土器(1)



第2-10図 VIa類土器(2)

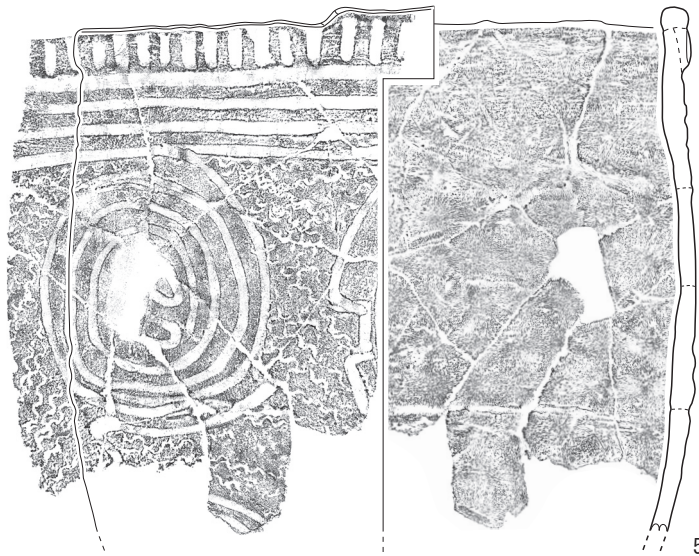
VIb類波頂部 (第2-15図 600~607)

口唇部に粘土紐を貼り付けて装飾を施すものうち、粘土紐上の刺突文や胴部の凹線の特徴がVI類に類似するもの。600~603は粘土紐を口唇部に巻き付けるように貼り付ける。600・601は口縁部が内湾する。600は2本の粘土紐をねじり、口唇部に巻き付ける。外面には口縁部直下に太めの凹線による曲線文を描く。内面には工具によるケズリを施す。601は外面にも粘土紐を曲線的に貼り付け、大きな刻目を入れる。残存部下位に貝殻腹縁刺突が数か所確認できる603は、丸い粘土紐を口唇部に波状に貼り付ける。602・604は、細い竹管状の工具を用いて下から突き上げる様に刺突を施す。602は口唇部に粘土紐を貼り付け、大きな刻目を施す。604は口唇部の突起部分である。605・606の胴部外面の上位には凹線文が描かれる。605は波頂部に大きな突起をつくり、棒状工具で深い刺突を施し、小さな孔を形成する。VIII類にも類似する形態のものが出土するが、孔の小ささや刺突文の状況からここに含めた。606は大きく開く器形で、浅い鉢状の形態である可能性がある。607は波頂部に縦位の突起を有する。3条の凹線が小さな山を描くように施される。文様帯は口縁部上位に集約され、外面には貝殻条痕が残る。600・602~604には角閃石を多く含み粒子の細

かな混和材が砂状に入る。

VIc類 (第2-16図 608~618)

口縁部の文様帯が2帯構成である。本遺跡の場合は平坦口縁のものが主流である。口縁部直下に貝殻腹縁刺突文を巡らせる。胴部の文様は多条の平行沈線文の一部に曲線的な部分が見られるものが多く、VIa類550~554とも雰囲気に近いが、やや右上がりに描かれる。宮之迫遺跡(曾於市)や山ノ中遺跡(鹿児島市)などで類例が多く報告される一群である。口縁端部を丸くおさめて器面に直接刺突するもの(608・611・614・615)と、口縁端部を角張らせてわずかに肥厚させるもの(609・612)とが見られる。612はごく緩い波状口縁を呈する。補修孔が施される。613は半円形のモチーフ上の口唇部に小さな隆起を形成する。隆起の頂点とモチーフの中央の位置はわずかにずれる。口縁部最上位に貝殻背面押圧文を巡らせた小さな突帯を有するものも少数出土(616~618)し、胴部の文様の類似からここに含めた。617と618は胎土や施文具が一致し、同一個体と考えられる。色調が他と比較して白っぽく明るい。胎土は610には金色の雲母を含む。609・613には角閃石を多く含み粒子の細かな混和材が砂状に入る。



563



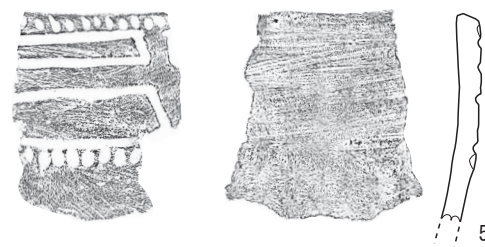
564



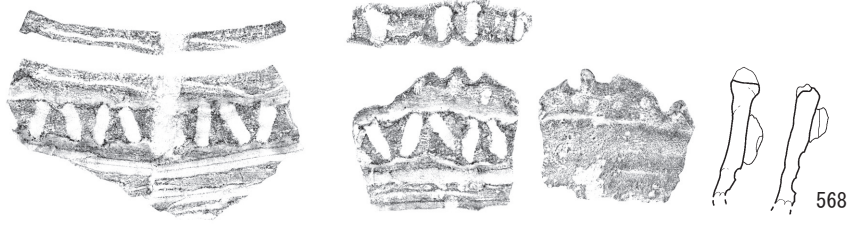
565



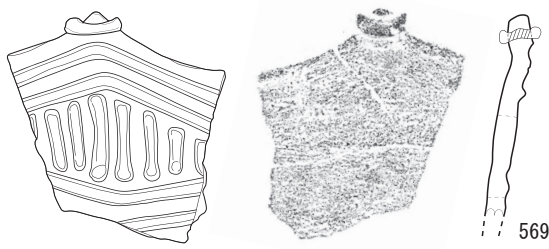
566



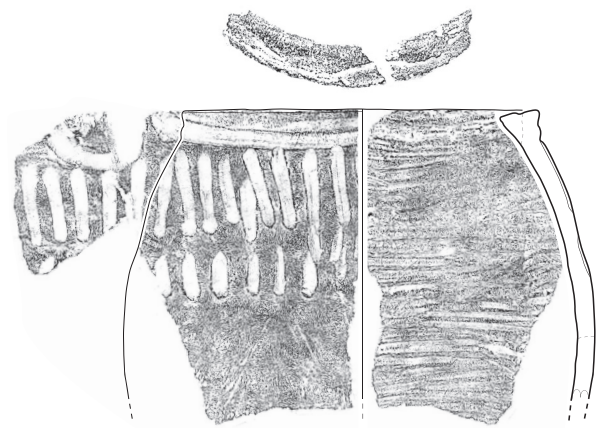
567



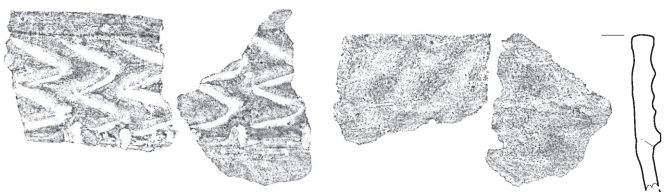
568



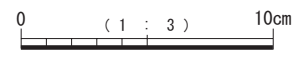
569



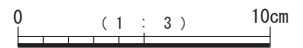
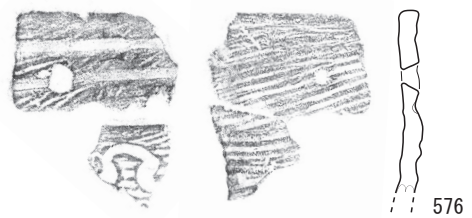
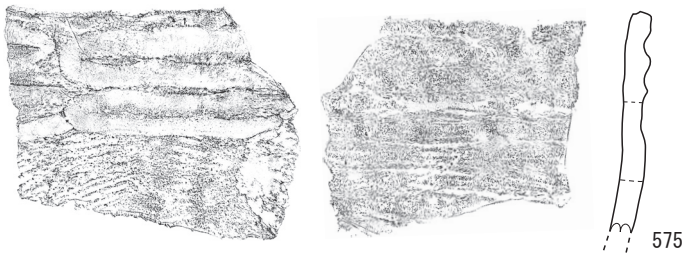
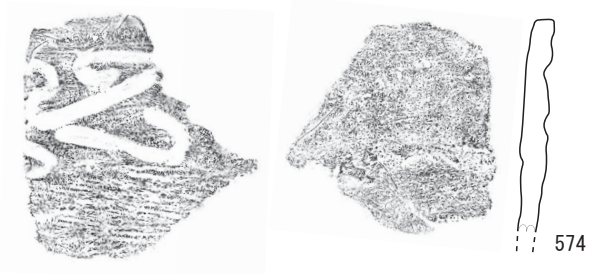
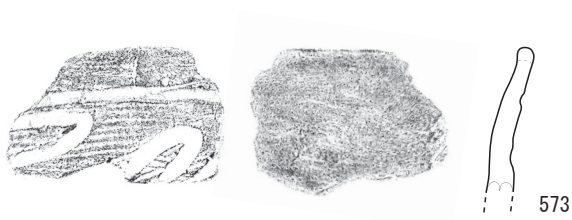
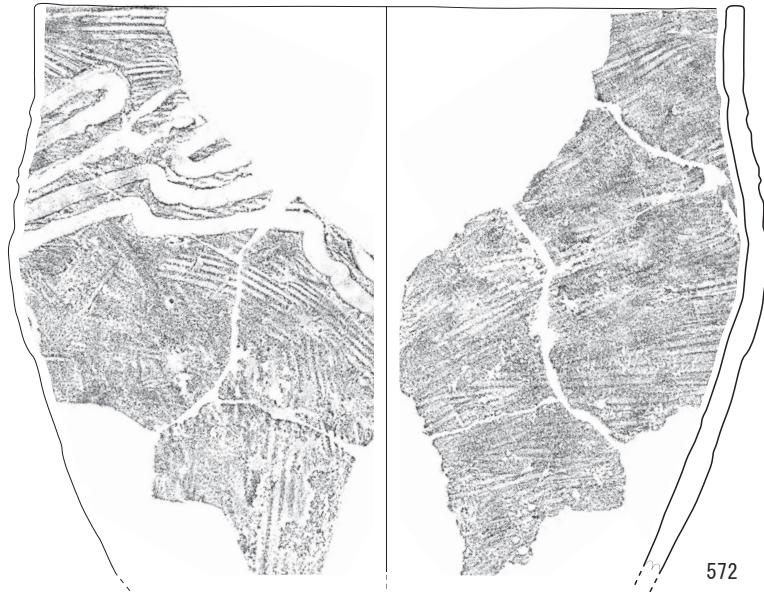
570



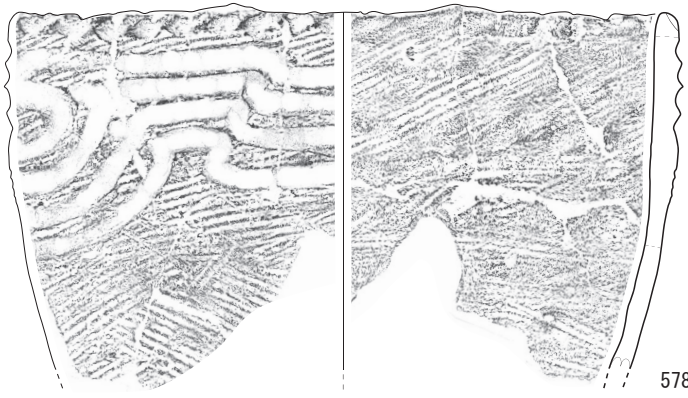
571



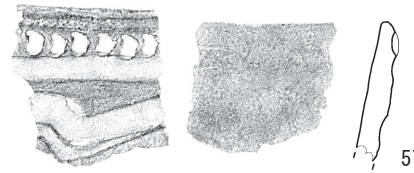
第2-11図 VIa類土器(3)



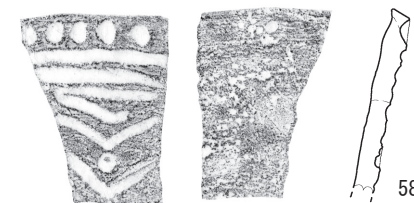
第2-12図 VIb類土器(1)



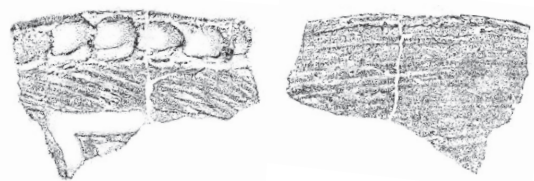
578



579



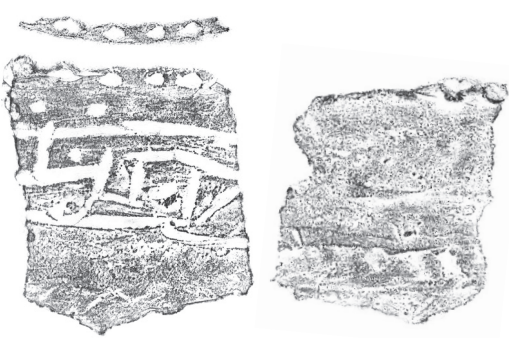
580



581



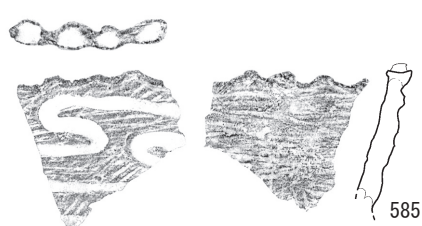
582



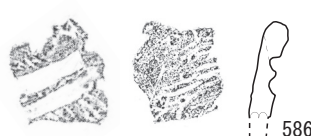
583



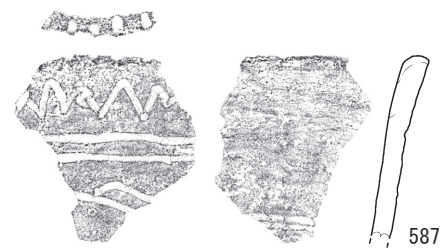
584



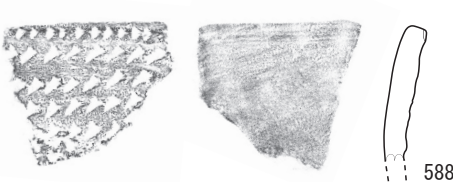
585



586



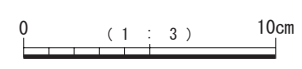
587



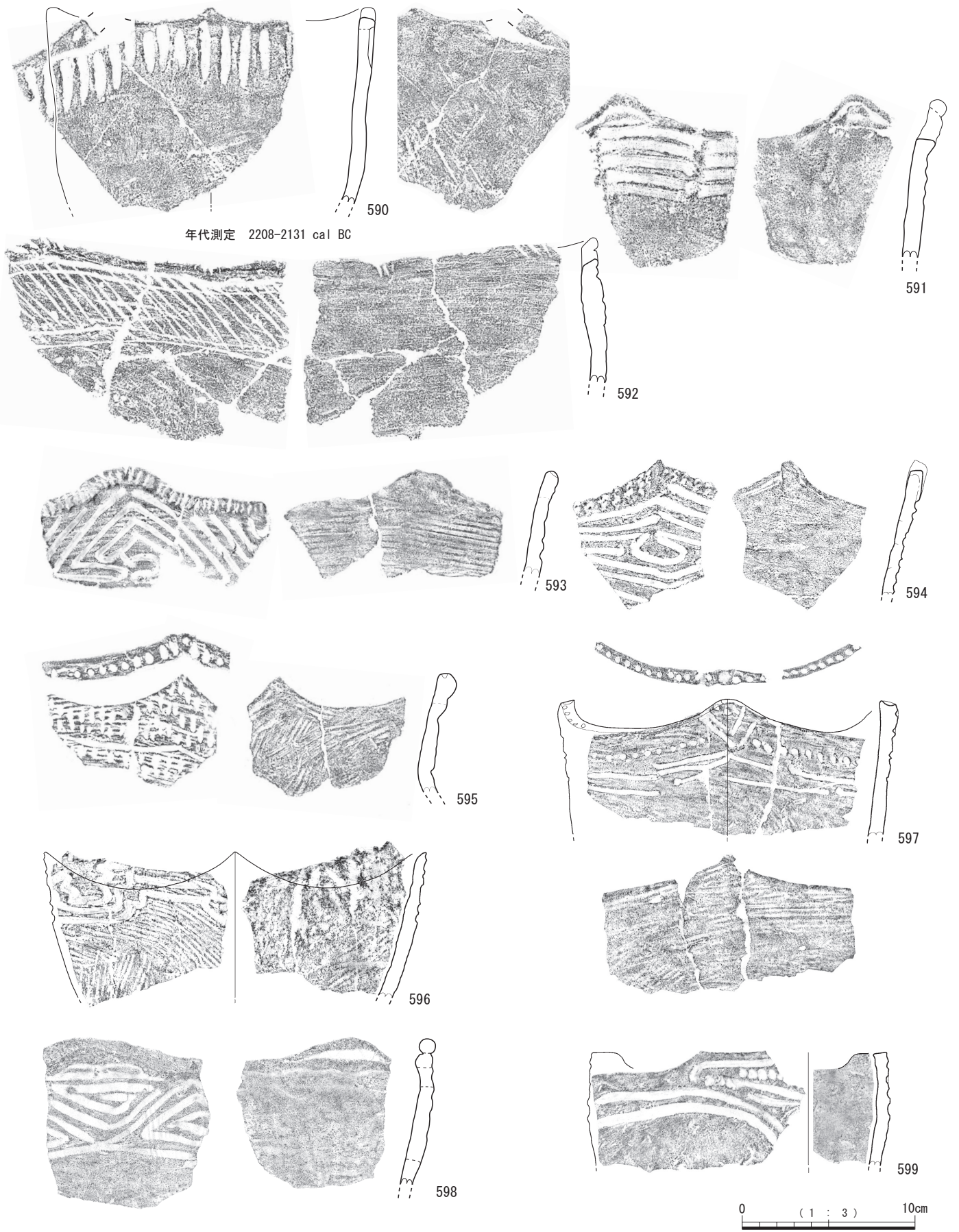
588



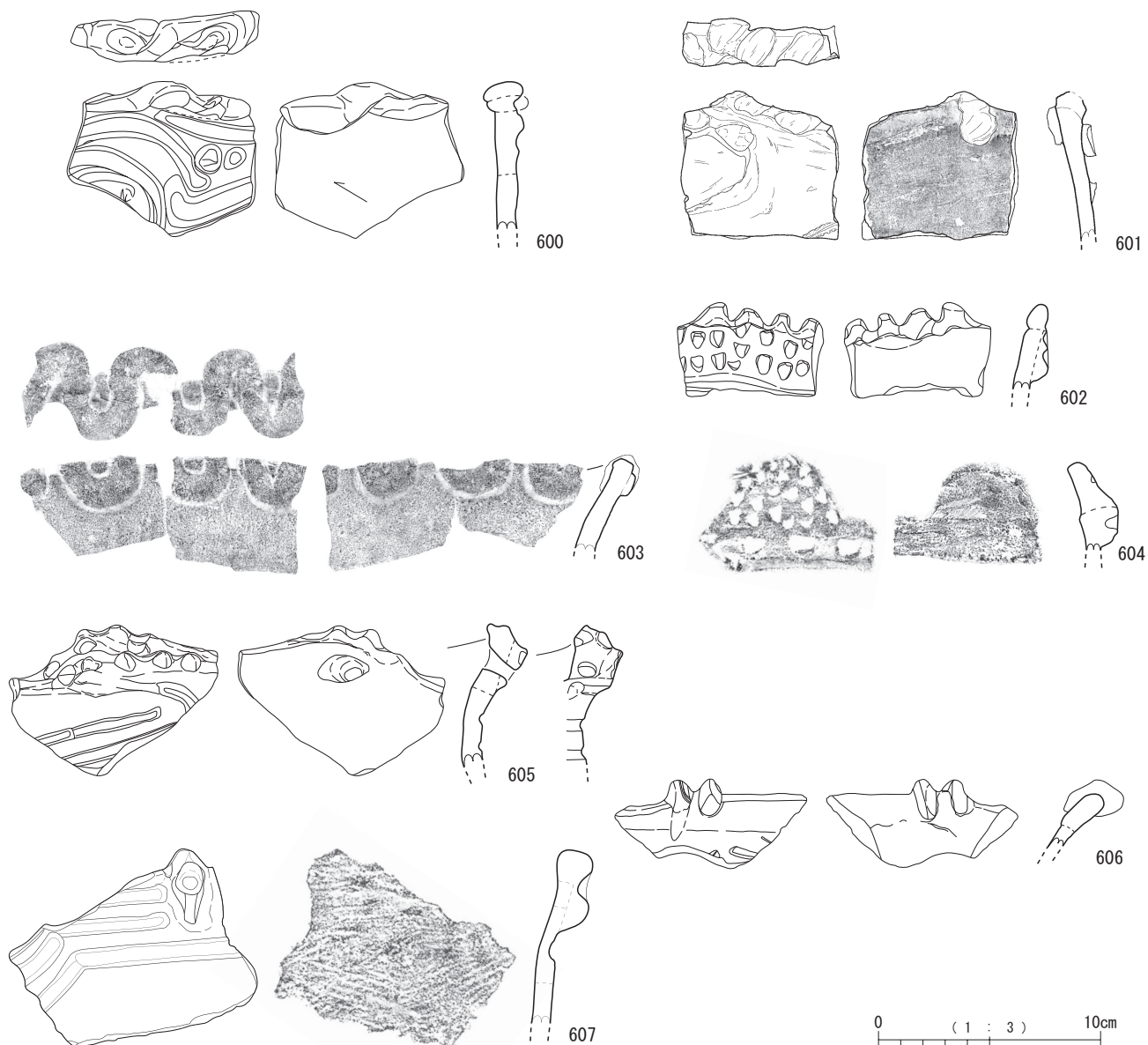
589



第2-13图 VIb類土器(2)



第2-14図 VIb類土器 (3)



第2-15図 VIb類土器（波頂部）

VI類胴部（第2-17図 619～623）

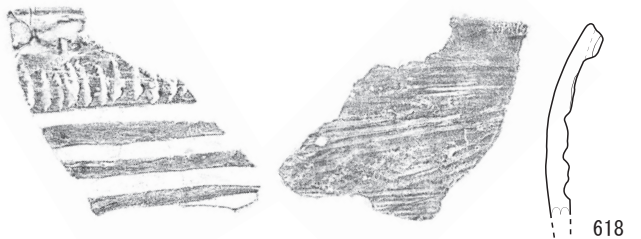
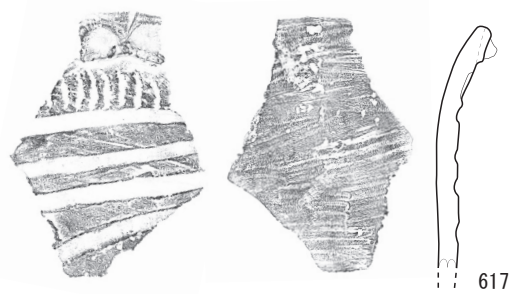
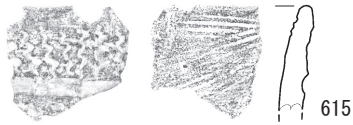
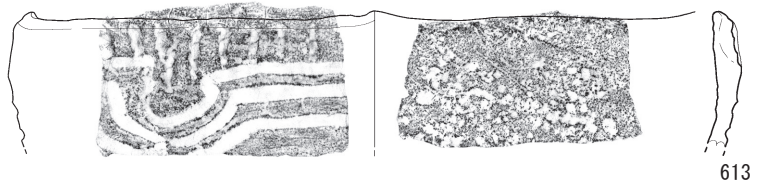
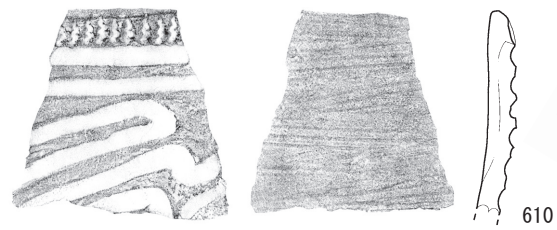
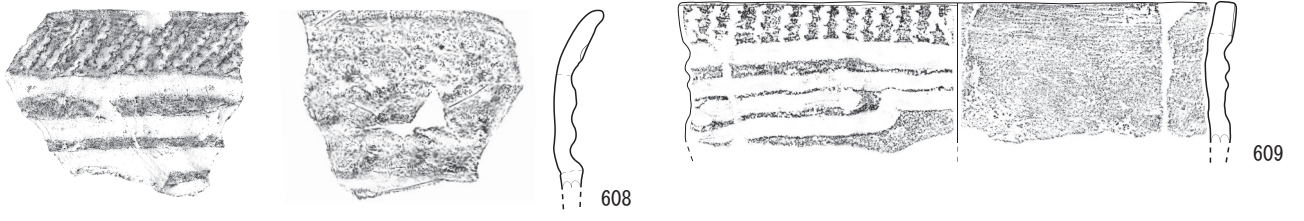
619～623は胴部片である。619・620・622には平行線と曲線の組み合わせによる文様を、621には細い沈線により三角形の渦巻文を描く。文様の一部が鉤手状となる。619は凹線間に貝殻腹縁刺突を施し、VIIb類（擬似縄文系）の範疇に入る可能性もある。623は、施文具は不明だが、サークル状の部分は押引文である。外面に赤色顔料が付着し、蛍光X線分析の結果、鉄を多く含有しベンガラの可能性もある。なお620の外面に付着した煤を年代測定した結果（報告No.4）¹⁴C年代が 4120 ± 30 yrBP 1σ , 2σ 暦年代範囲が2708-2578calBC (51.5%)である。

VI類

口縁部や頸部～胴部に縄文あるいは貝殻腹縁などによる密な刺突文を施す。巻貝の表面を回転させた可能性をもつものも少数出土した。頸部から胴部には2条単位の平行沈線文が描かれ、その間を縄文や貝殻腹縁刺突文などで充填させる。縄文が施されるものをVIIa類に、貝殻により施文したものをVIIb類に細分した。

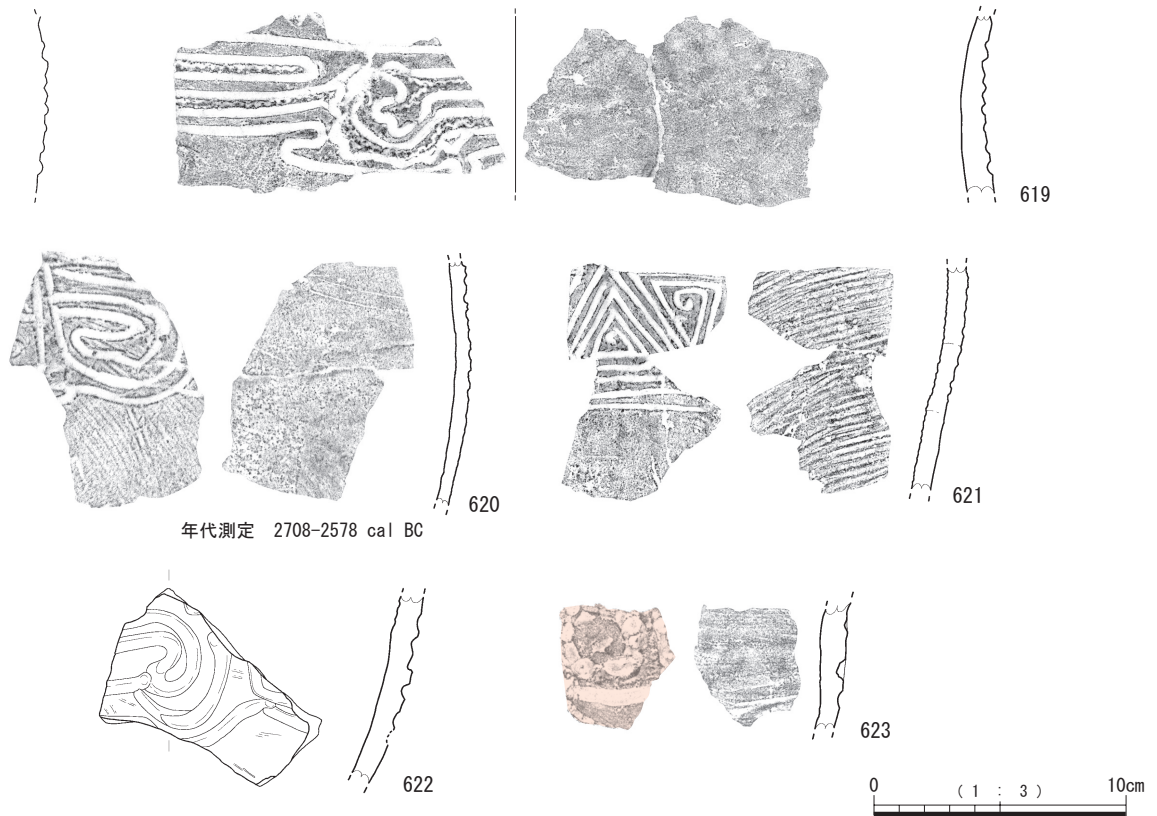
VIIa類（第2-18～22図 624～677）

文様原体として、縄文を使用したもの。
625～635は頸部で外反し開き、口唇部と外面頸部以下に縄文を施す。口縁部は短く、口縁端部の内面側がごくわずかに内湾する傾向がみられる。口唇部に深い凹線を巡らせるものが主流であり、これらは頸部外面の屈曲部



0 (1 : 3) 10cm

第2-16图 VIc類土器



第2-17図 VI類土器（胴部）

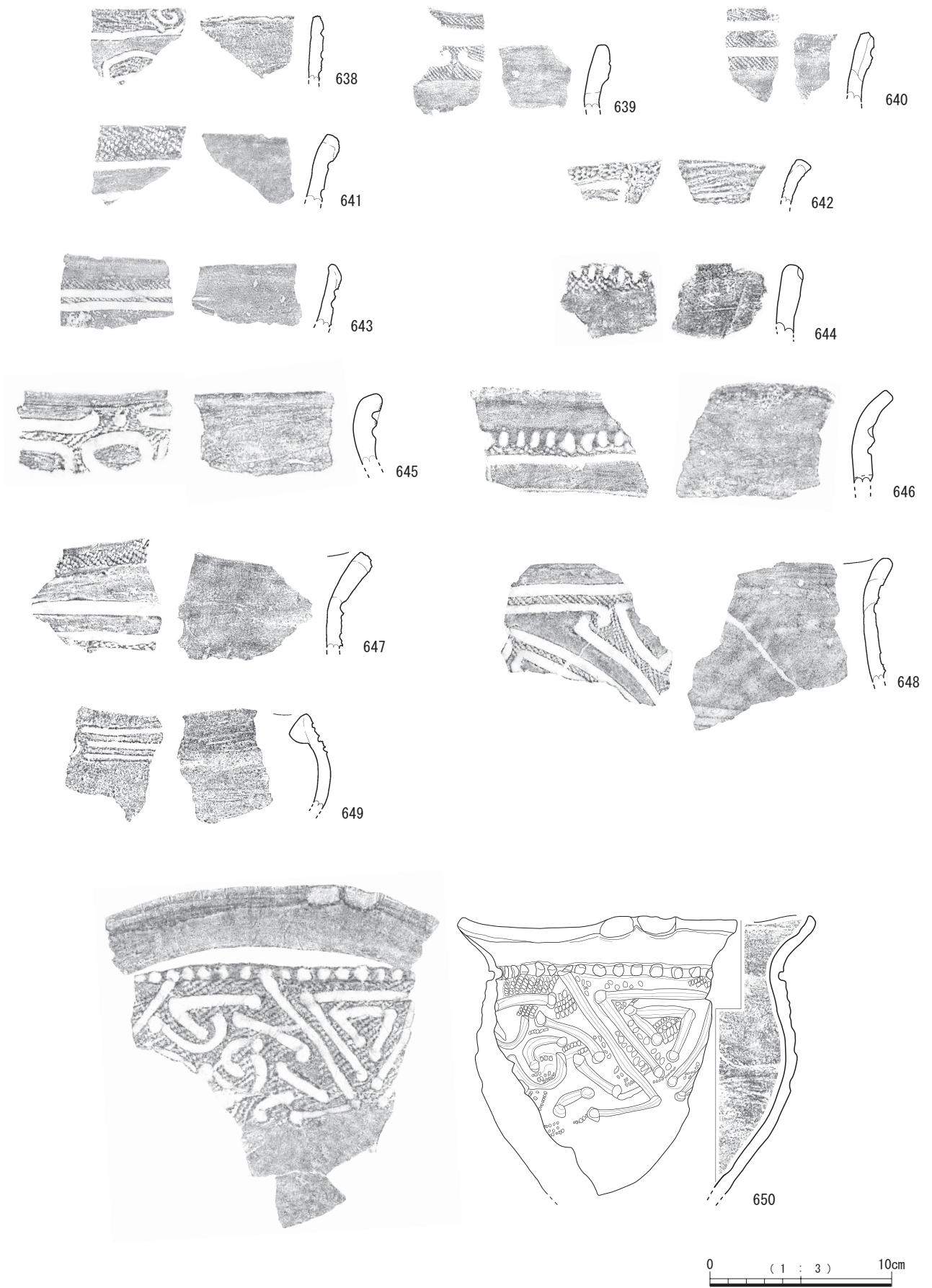
付近に沈線を巡らせて、それ以下を文様帯とする特徴がみられる。口唇部の凹線は、棒状工具などで描かれたものと、粘土を貼り付けて形づくるものがみられる。瀬戸内系の磨消縄文土器のなかでも主に福田K2式の影響を受けて製作された一群であると考えられる。625は残存率の高い資料である。緩い波状口縁を呈し、波頂部に棒状工具による刺突を施す。口縁部は外反しながら開き、胴部がわずかに張り出す器形である。胴部の縄文を窓枠状に磨り消す。624・626の口唇部には沈線ではなく曲線文が描かれ、これらは色調が黒っぽく薄手で硬質なため搬入品の可能性をもつ。629も同様の胎土であり、これらは特に内面の調整がミガキ様につややかで非常に丁寧である。627～629・631・632は頸部の沈線の中に連点文を施す。633は外面にコクゾウムシ圧痕が分析により同定されている。

638～650は口縁部に凹線を施さず口縁部外面をさほど肥厚させないものである。638～642は直線的に立ち上がる口縁部片で、口縁部付近に縄文を施すものである。642はわずかに外反しながら開く。639・640は胎土や施文の状況から同一個体であると考えられる。この4点は見た目上、縄文に非常に近く見えるが、方向性にわずかなばらつきが見て取れるため、施文具として貝を使用した可能性も考えられるが、ここに含めた。643は口縁端部がわずかに内湾する。口縁端部の縄文を磨り消す。

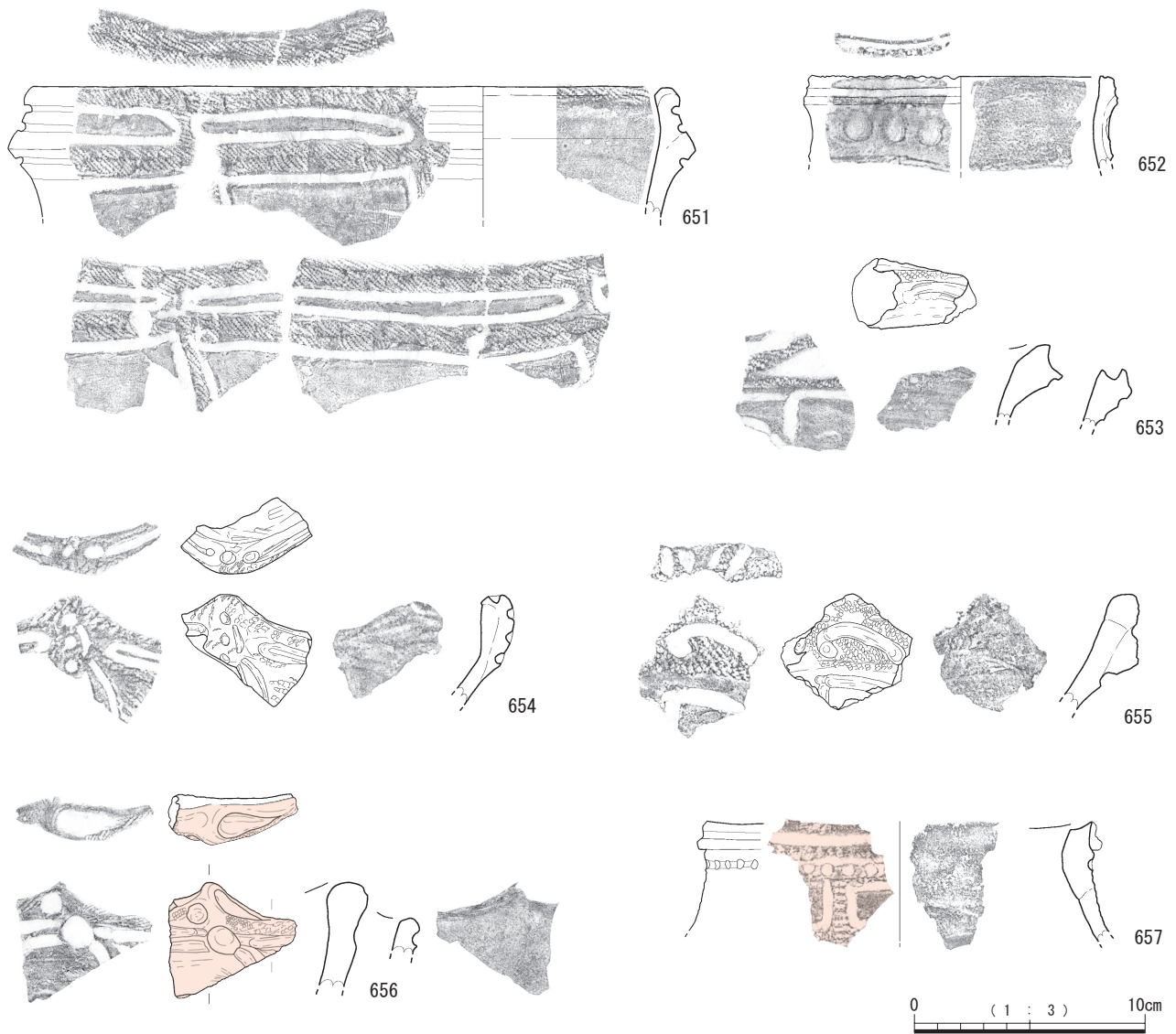
644は丸みを帯びた口縁部の外面側に縄文と縦位の短い沈線を連続させる。645～648は口縁部が外反しながら開く。647は口縁端部に縄文を施す。口縁部上位を無文とし、頸部屈曲部付近に横位の沈線を巡らせて以下に文様帯を形成する特徴はⅧb類（指宿式）と同様である。646は沈線より上位に縄文と連続刺突文による文様帯を有する。650は、波頂部を2か所円形に押し、口縁部～頸部を無文とし、胴部～底部が急な角度ですぼまる特徴はⅧ類土器に類似するが、胴部の凹線文の特徴はⅥ類にも似る。649は口縁部がごく短く外反し、3条の沈線を横位に巡らせる。円形のモチーフの一部が残存する。丸みを帯びた浅鉢形である。器面に縄文は確認できないが、小池原上層式の影響を受けた磨消縄文系の土器であると判断しここに含めた。山ノ中遺跡（鹿児島市）で類例が報告される。口縁部内面を三角形状に肥厚させる。651～657は口縁部の外面側を肥厚させ、沈線や刺突等による文様帯を形成する。651は口縁部がやや内傾する。頸部がわずかに反るため深鉢であると推測される。平行沈線は数か所胴部側にも下垂する。下垂部分は残存部の状況から必ずしも均等に割り付けられているものではないと考えられる。縄文には638～642と同じような特徴がみられ、ヘナタリなどの巻貝を回転して施文した可能性もある。福田K2式のなかでも新しい段階の影響を受けて製作された可能性も考えられる。654～656は波頂部あたりの破片



第2-18図 VIIa類土器(1)



第2-19図 VIIa類土器(2)



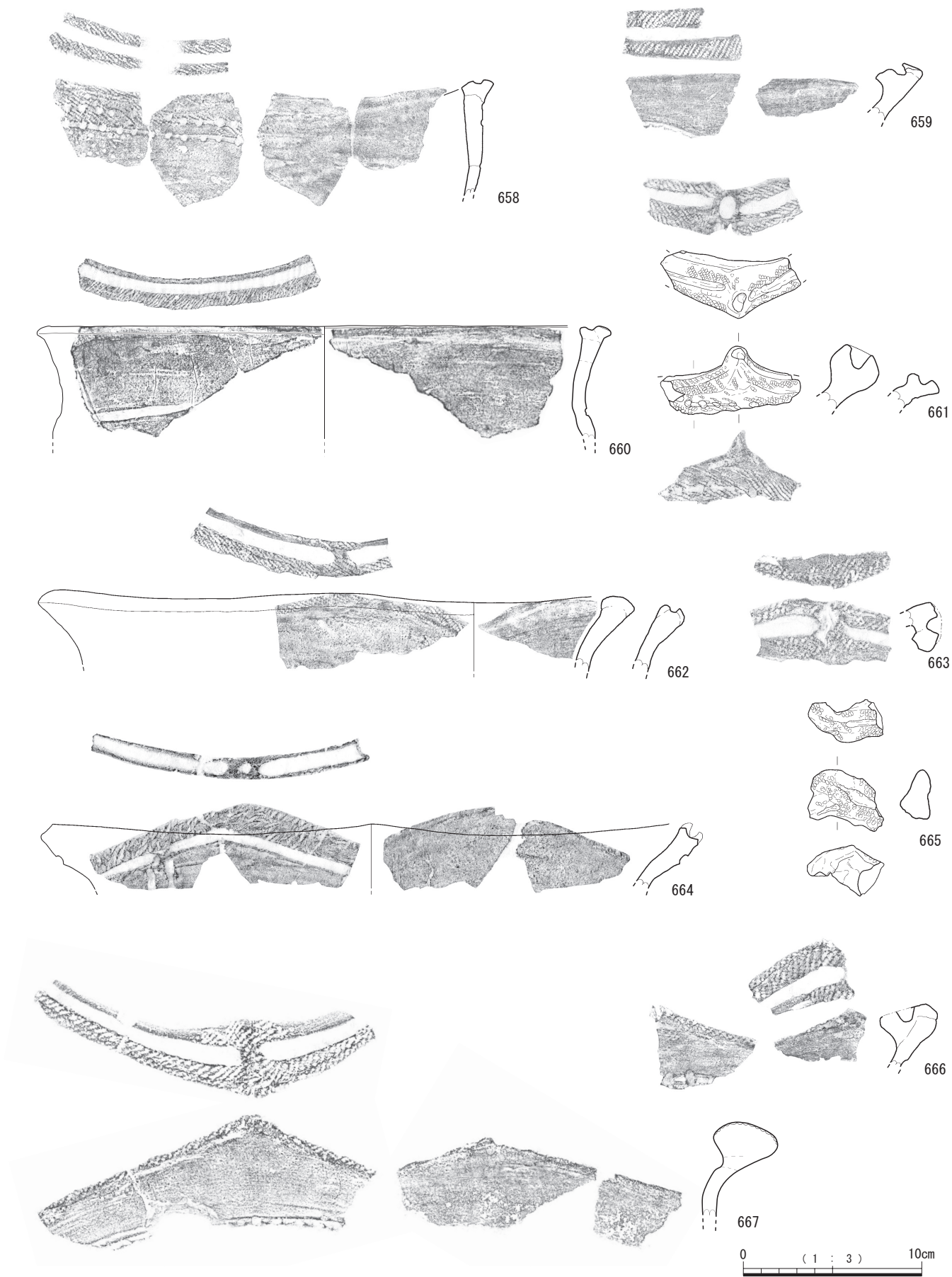
第2-20図 VIIa類土器(3)

である。文様は凹線により描かれVI類土器の特徴に類似する。654・655は口縁部外面を肥厚させ、口唇部に凹線文や刻目を施す。656は山ノ中遺跡(鹿兒島市)に報告される「ミミズク」をモチーフとしたとされる土器に文様が似る。内外面ともに丁寧なナデ仕上げである。657は口縁部がすぼまる器形で、口縁部肥厚帯の部分には貝殻腹縁刺突が施されており、頸部の縄文様の文様にも貝殻が使用された可能性がある。外面には赤色顔料が付着し、蛍光X線分析の結果、鉄を多く含有し、ベンガラの可能性はある。

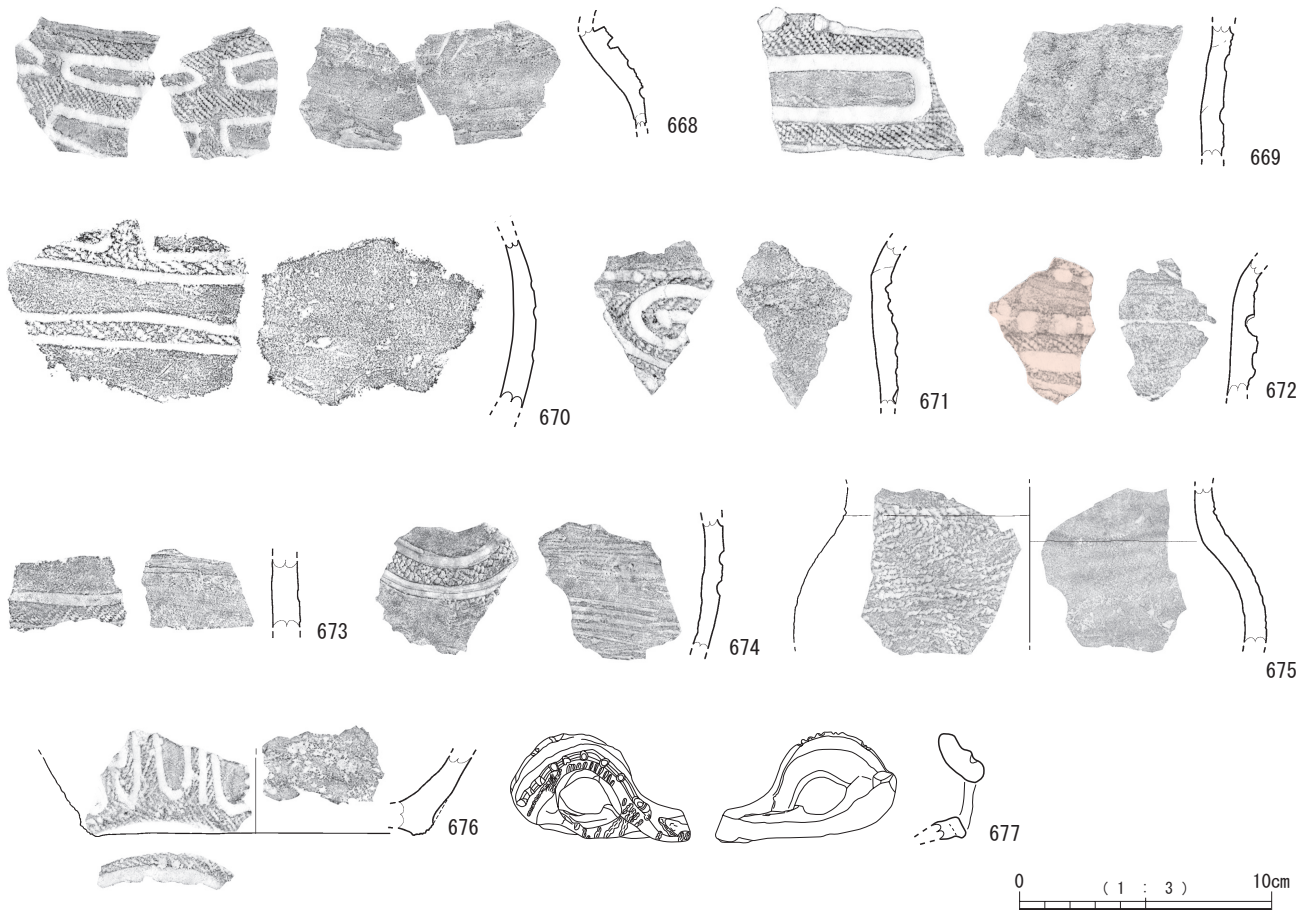
658～667は口唇部を肥厚させて、幅広の文様帯を形成するものである。これらは瀬戸内地方の初期縁帯文系の影響を受けた一群であると考えられる。緩い波状口縁を呈するものが多い。658～664は上面に文様を施す。胴部に文様を施すものもみられ、664は撚りの甘い縄文を口縁部外面上位にも施す。658・660は巻貝による施文の可

能性をもつ。659～667は口唇部文様帯の幅がより太い。659・666・667の頸部あたりには沈線や連点が巡る。口唇部の形態差はあるものの、頸部の文様にはVII類に共通した特徴がみられる。なお、657にも外面に赤色顔料が付着する。

668～675は胴部片である。668・670は胴部が大きく張り出し、口縁部がすぼまる浅鉢状の形態であると推測される。669～672は頸部片で、直線的に立ち上がる。672の外面には赤色顔料が付着し、蛍光X線分析の結果、鉄を多く含有し、ベンガラの可能性はある。675は口がすぼまる鉢状の器形で、形態としては668や670に類似する。粗い撚糸文が地模様として施されており、宮崎県を中心に分布する縄文時代早期の白ヶ野式の可能性もあるがここに含めた。内面は粗いミガキによって調整され、胎土は赤みが強い。677は口縁部分に施された装飾で、残存部分の状況から、口唇部に平坦面を形成し、凹線を巡ら



第2-21図 VIIa類土器(4)



第2-22図 VIIa類土器 (5)

せるタイプであると推測される。径約2.0cmの孔を有し、突起の外面上には沈線を施し、沈線の中に連点文を施す。676はやや上げ底の底部片である。縦位の沈線の間を目の細かな縄文により充填して、底部接地面近くまで文様帯を形成する。

VIIa類の胎土の特徴としては、625・628・632・634・641・645・646・648・650・653・654・657・658・663～667・669・670・672・673には金色の雲母を含んでいる。また、赤色粒・白色粒の粒子に透明感をもつものが多く、石英や玉髓の粒子を混和剤とした可能性も考えられる。観察表を参照していただきたい。

VIIb類 (第2-23～28図 678～733)

文様原体として、貝殻を使用したものである。口縁部上位に小さな突帯を形成し刺突を施すタイプと、口縁部上位の器面に直接刺突を施すタイプとがみられる。平行沈線文の間に貝殻腹縁刺突文を整然と施すものが主流である。一部に沈線で区画せず、低い突帯により文様を描き、その突帯上や際を刺突するものがみられる。残存率の高いものに限られ、その点数は少ないが、頸部で緩く外反しながら開き、胴部～底部に向かって急な角度ですぼまる。平行沈線間を貝殻腹縁刺突で充填する技法につ

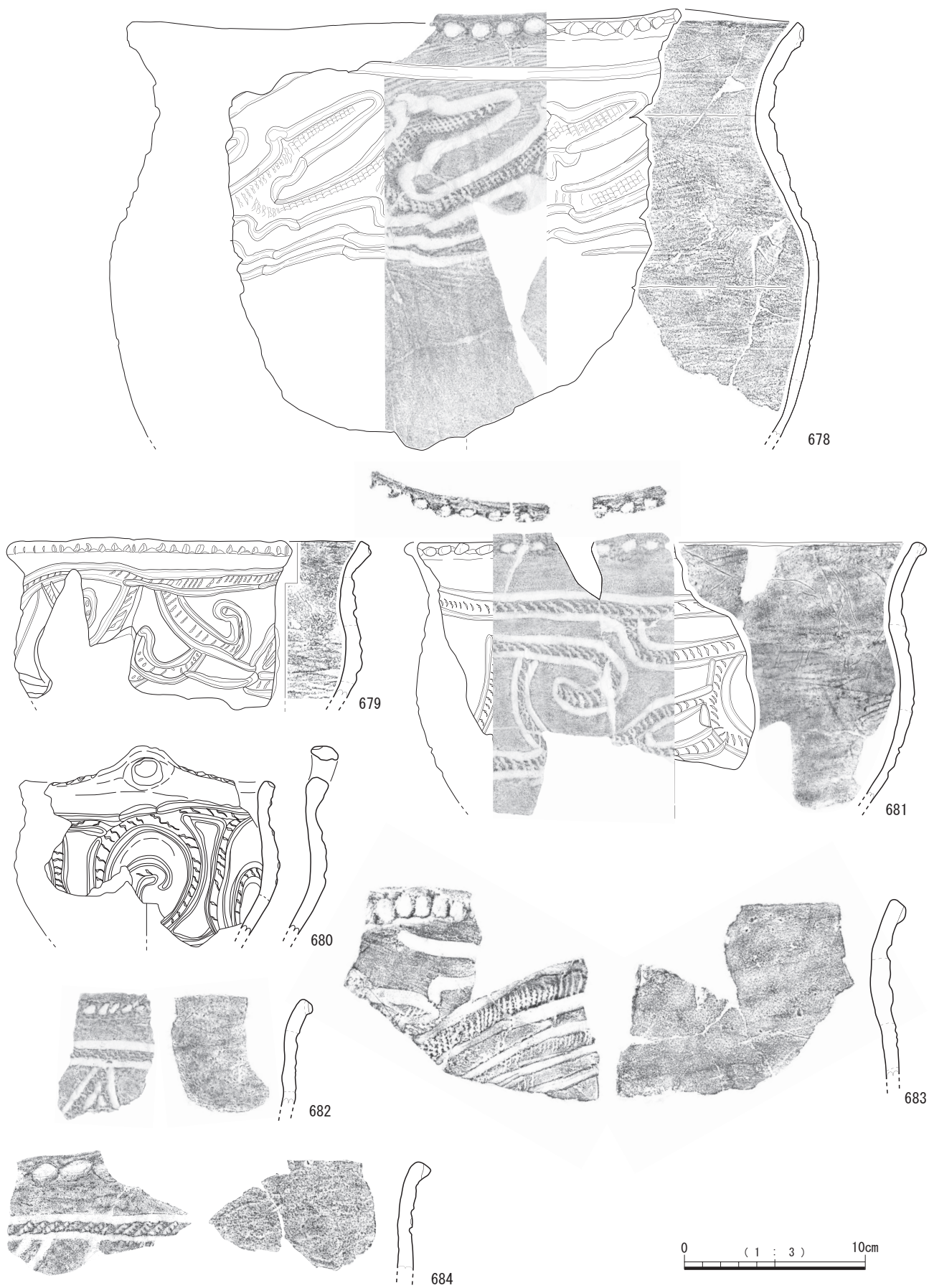
いては、宮崎県に広く分布する綾式土器との関連も考えられる。綾式土器についてはVI類と同様に宮之迫式土器に包括する考え方もある(真邊2011など)。

678～694は口縁部最上位に断面三角形の小さな突帯を巡らせて、その上に刻目を施すものである。

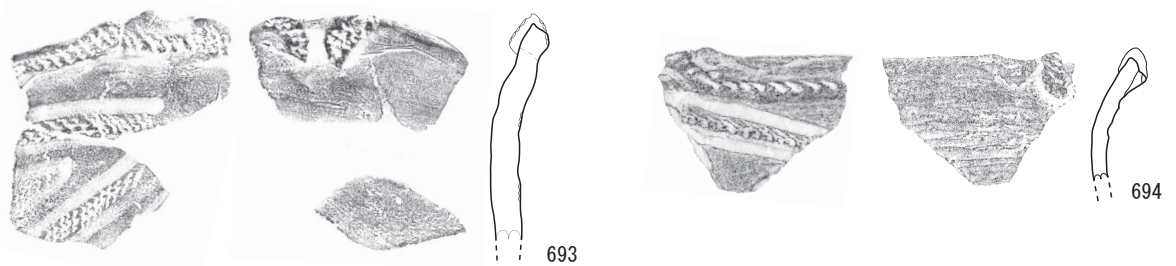
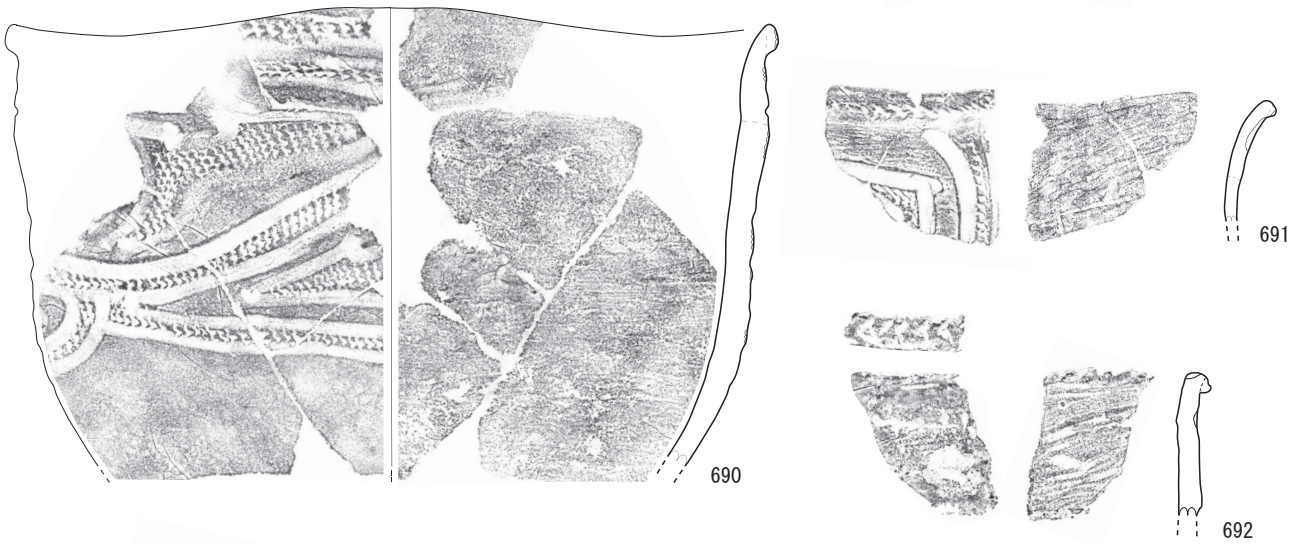
678～684は口縁部突帯上に貝殻背面(678・679・681～684)や棒状工具(680)を使用して刻目を巡らせる。679・680は頸部を横位の平行沈線により区画し、沈線間を貝殻腹縁刺突により充填させる。胴部には平行沈線による円形や鉤手状のモチーフを横位に幾何学的に展開させる。文様帯の幅が広めで、胴部下位に及ぶものもみられる。678は頸部を区画する凹線が単沈線で、胴部にはVI類土器の572に類似した大波文を描く。文様帯は胴部上位に収まる。683は頸部を沈線で区画しない。文様は678と同様に斜位に描かれると推測される。

685～694は口縁部突帯上に貝殻腹縁連続刺突を密に施す。頸部を平行沈線で区画せず、幾何学的文様を横位に描く。文様の一部が鉤手状となる。口縁部の直下から平行沈線文が描かれるものもみられる。693・694の口唇部には細い粘土紐を巻くように貼り付けて装飾を施す。

697～701は口縁部外面の器面に直接貝殻腹縁刺突を施す。695～697は口縁端部の外面側に面取りにより平坦面

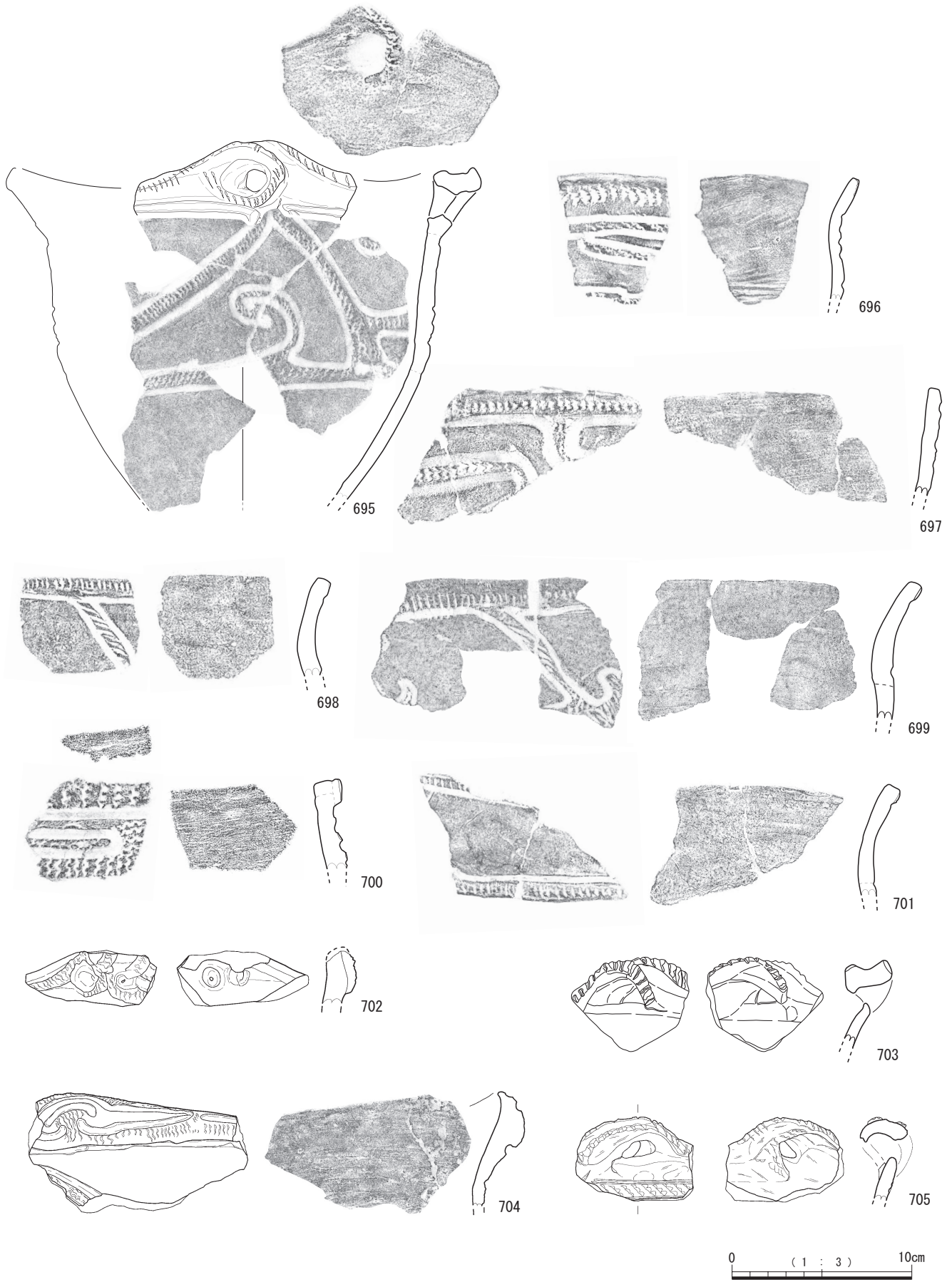


第2-23图 VIIb類土器(1)

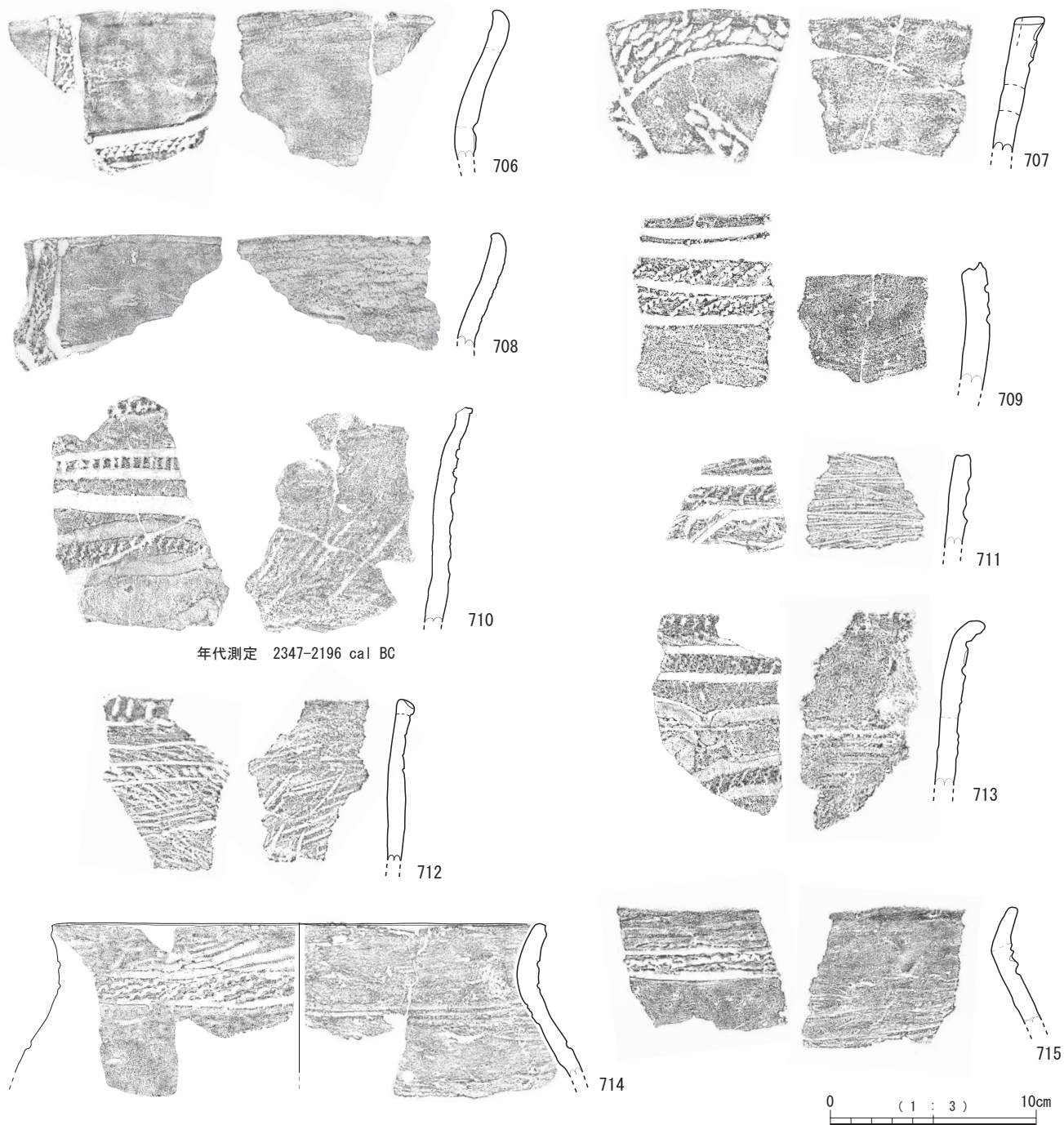


0 (1 : 3) 10cm

第2-24图 VIIb類土器(2)



第2-25図 VIIb類土器(3)



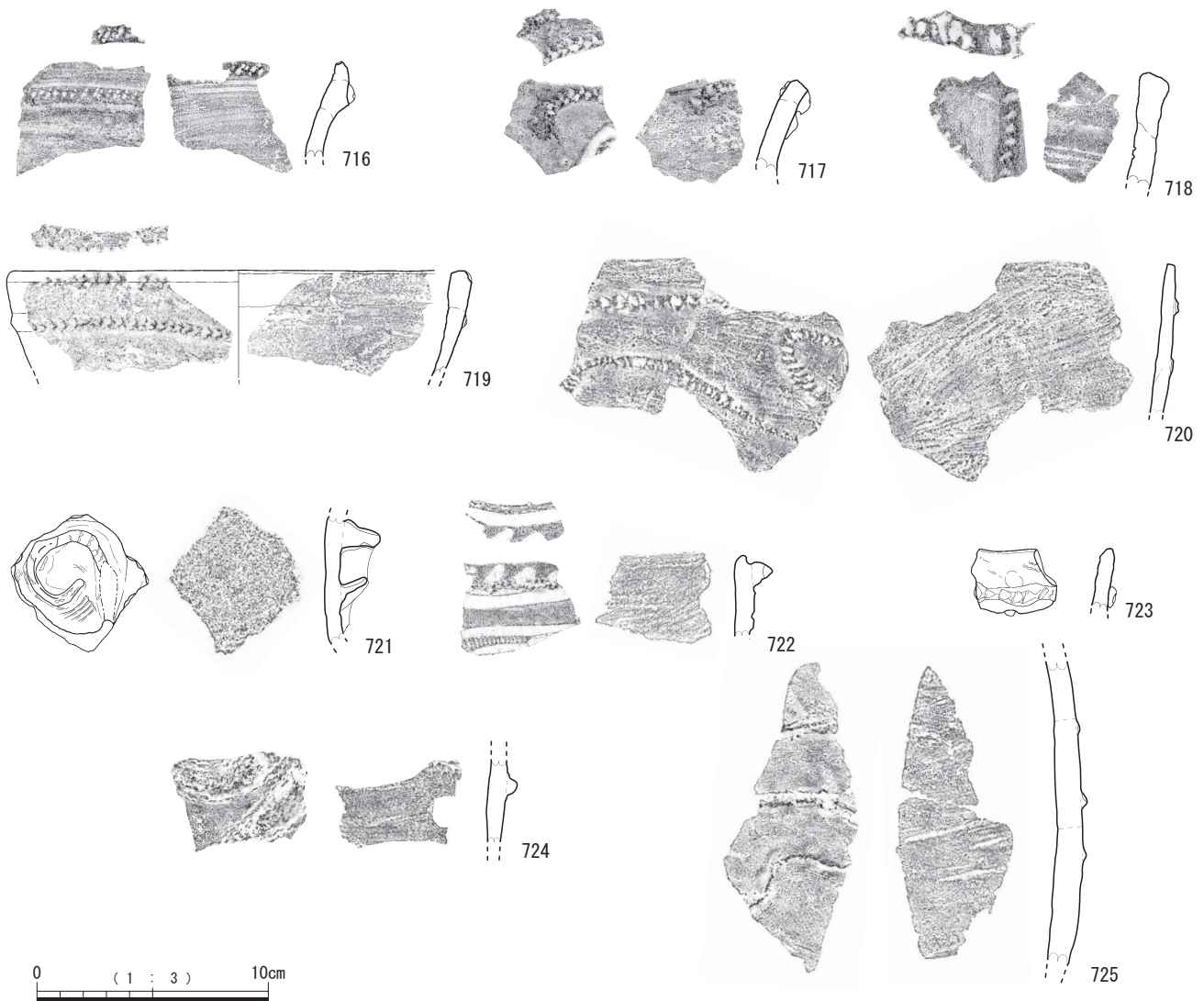
年代測定 2347-2196 cal BC

第2-26図 VIIb類土器(4)

をつくり、698~701は口縁端部を「コ」の字状に形成する。696は平行沈線により、その他は単沈線により口縁部直下を横位の沈線・凹線(697)により区画する。胴部には斜位に平行沈線を下垂させる破片が多い。695は波状口縁で、波頂部~胴部下位までを復元できた。口縁部は緩く外反しながら開く。胴部はあまり張らず、底部に向かい急な角度ですぼまる。波頂部を突起させ、径1.5cmの孔を有する。胴部下位に文様帯が及び、鉤手状のモチーフを含む平行沈線文を横位に幾何学的に展開させると推測される。699には鉤手状のモチーフが横位に連続

する。700は口縁部最上位に扁平な幅の広い突帯を貼り付け、口唇部に平坦面を形成する。突帯直下を横位の凹線により区画する。

702~705は口唇部の装飾に貝殻腹縁刺突を施すものである。702は内外面から2か所穿孔を施すものの、そのうち左側は貫通しない。外面の孔の周りや波頂部の口縁端部に細幅の粘土紐を巻き付けるように貼り付け、貝殻腹縁により密な刺突を施す。口縁部最上位にも同様の小さな突帯を貼り付ける。704は口縁部外面を大きく肥厚させて、沈線と貝殻腹縁刺突による文様帯を形成する。

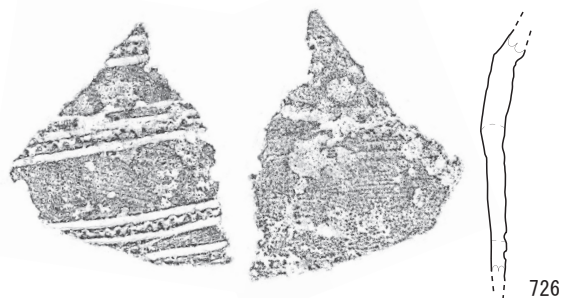


第2-27図 VIIb類土器(5)

沈線の始点と終点は入組状に施される。胴部に平行沈線文が曲線的に描かれると推測される。口縁端部は内湾する。703・705は695と同じ形態の波頂部突起である。705は突起に細幅の突帯を貼り付け、その上に貝殻腹縁刺突文を施す。外面の沈線は細い二又状の工具により描かれる。胎土は明るく白っぽい色調で、搬入品の可能性がある。第2-23~28図に掲載した土器の胎土の特徴としては、金色の雲母を含むものの割合がVIIa類と比較して高く、含まないものは696・700・704である。観察表を参照していただきたい。

706~708は口縁部外面最上位に刺突文を巡らせず、縦に文様帯を形成する。706・708は同一個体であると判断した。口唇部は外反しながら開き、口縁端部は内湾する。口縁端部の内面の際を始点か終点とする平行沈線文を数か所垂下させて描き、頸部外面に施す横位の文様帯につなげると推測される。707は外傾しながら直線的に立ち上がる口縁部片で、器壁は口縁端部側がわずかに厚

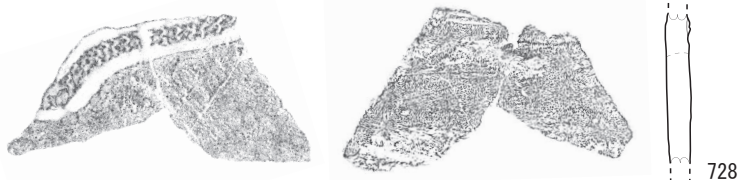
く、口縁端部には平坦面を形成する。残存部右端にかかり図化が難しいが、口唇部に施した縦の沈線が1か所確認できる。曲線的なモチーフを口縁部直下から描くと推測され、施文具は篋状の工具であるが、沈線で区画し連続刺突を充填させる技法からここに含めた。709は口縁部外面の最上位に2本の貝殻腹縁刺突文と横位の沈線を2段施す。口唇部には凹線を巡らせる。710~715は胴部上位や頸部に棒状工具により細幅の平行沈線文を水平に巡らせ、その中に貝殻腹縁刺突を等間隔に施すものである。710と713は胎土や文様の特徴から同一個体であると判断した。口唇部はわずかに外反しながら開く。口縁端部に小さな突帯を粗く貼り付け貝殻腹縁により刻む。残存部下位にはごく浅い凹線により平行線を描きその間に貝殻腹縁を等間隔に刺突する。外面に付着した煤を年代測定した結果(報告No.4)¹⁴C年代が $3820 \pm 30 \text{yrBP } 1 \sigma$, 2σ 暦年代範囲が $2347\text{--}2196 \text{calBC}$ (87.8%)である。712はつくりが粗く、内外面に貝殻条痕を施す。714・715は



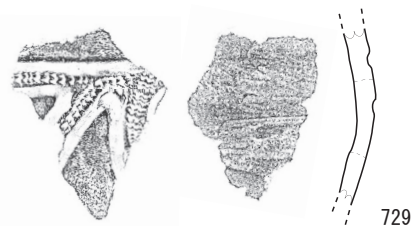
726



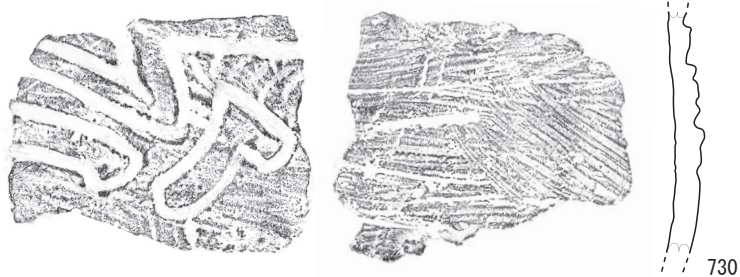
727



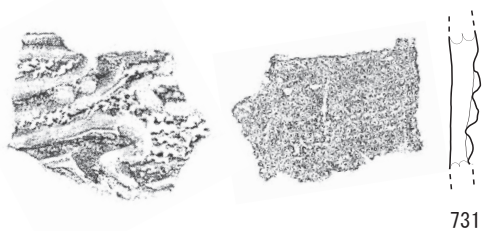
728



729



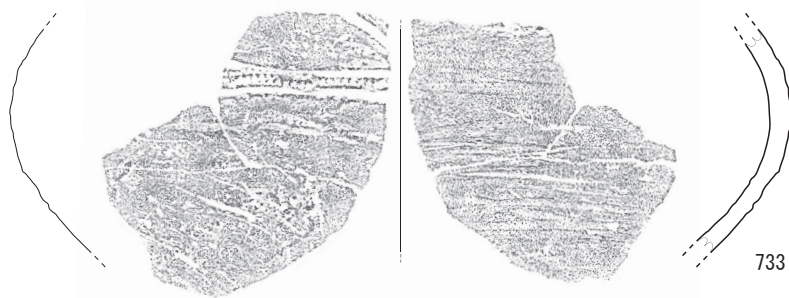
730



731



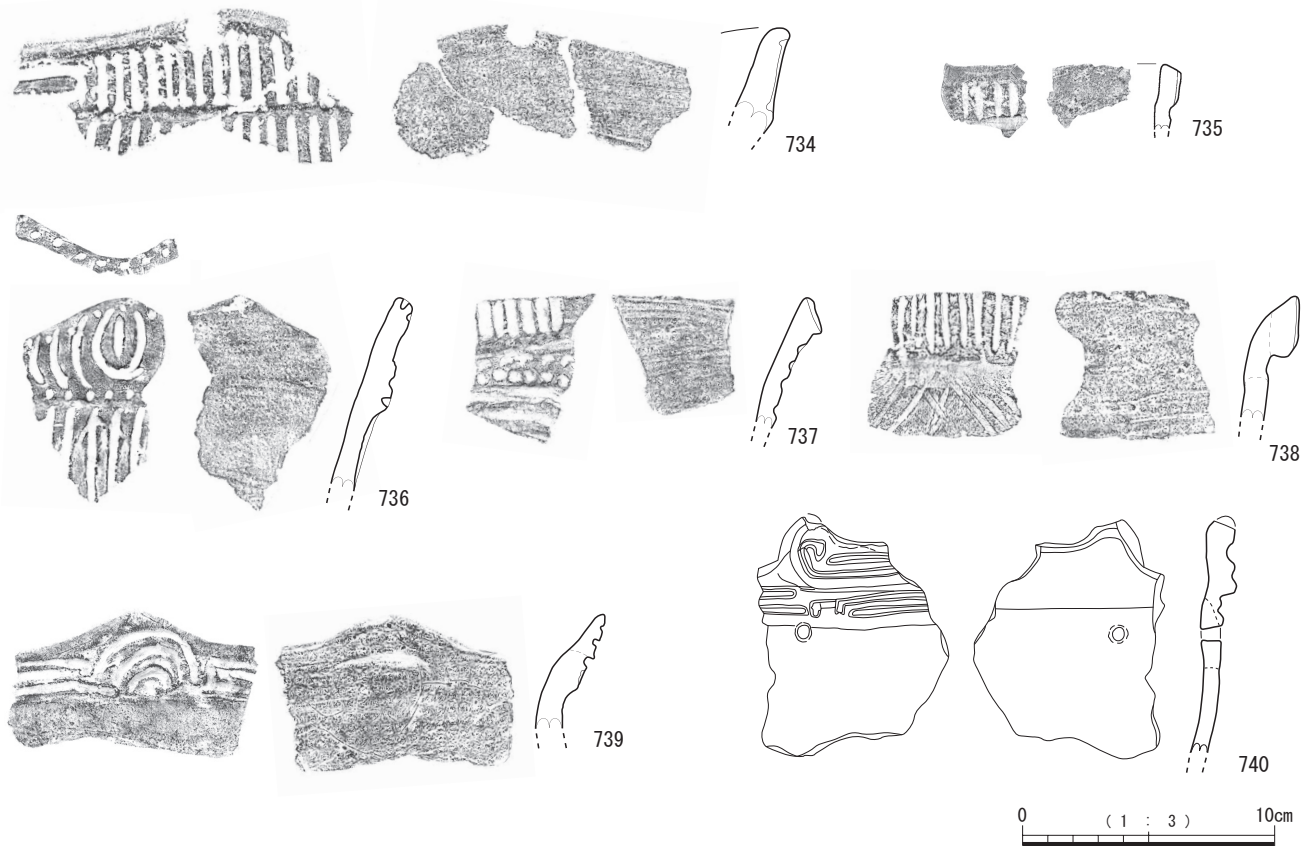
732



733

0 (1 : 3) 10cm

第2-28図 VIIb類土器(6)



第2-29図 VIIIa類土器(1)

口縁部が外反しながら開き、714と715は同一個体であると判断した。胴部が口縁部よりも外側へ張り出す丸みを帯びた器形で、残存部の状況から、口唇部に突起をもつ可能性もある。

716～725は細い突帯を貼り付けて、貝殻腹縁刺突文を施す一群である。各類への分類が難しかったものを集めたことを否めないが、施文具に貝殻を使用することに着眼しここに含めた。717は残存部下位に凹線による曲線文が描かれると推測される。718は口縁部片で小さな山形の突起をもつ。722は突帯が高く、口唇部に平坦面をつくり凹線を施す特徴は、VIIa類とも共通する。721は部位は不明だが、器面に貼り付けた渦巻き状の高い突帯である。突帯の上や側面に貝殻腹縁をまばらに刺突する。723は細い突帯を粗く貼り付ける。724と725は胴部片で、天地・傾きは不明である。ともに突帯の際に貝殻腹縁刺突を施す。

726～733はVIIb類に該当する胴部片である。730の胎土には大粒のシャモットが混じる。731は沈線を深く施すため、器面の凹凸が著しい。732は沈線間を貝殻腹縁を押しきり充填する。縄文時代早期に該当する可能性も考えられるが、内面の条痕が早期に出土するものと比べて整然と施されることからここに含めた。733のように大きく張り出す器形のものも出土している。

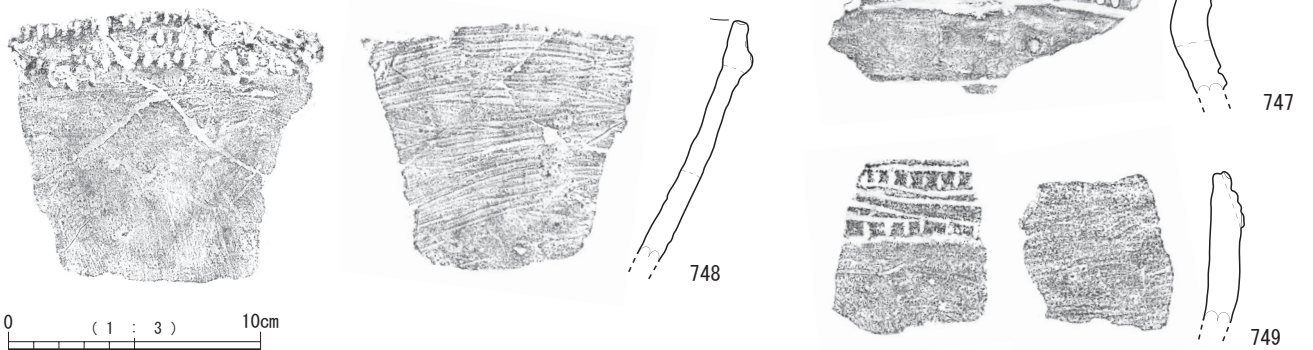
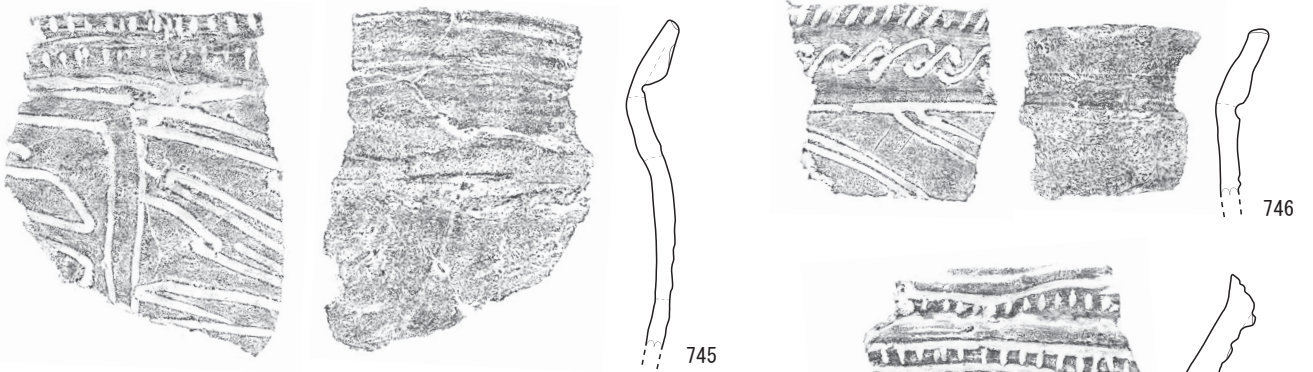
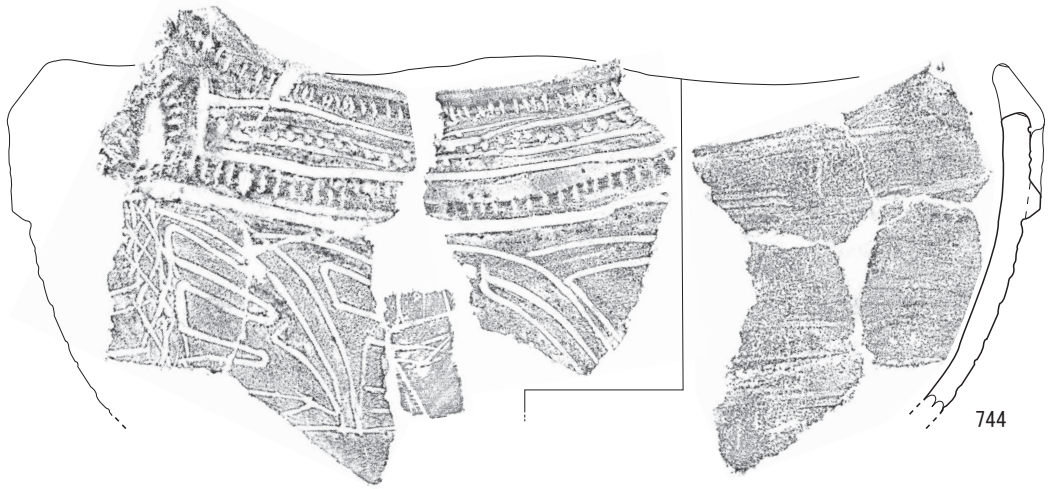
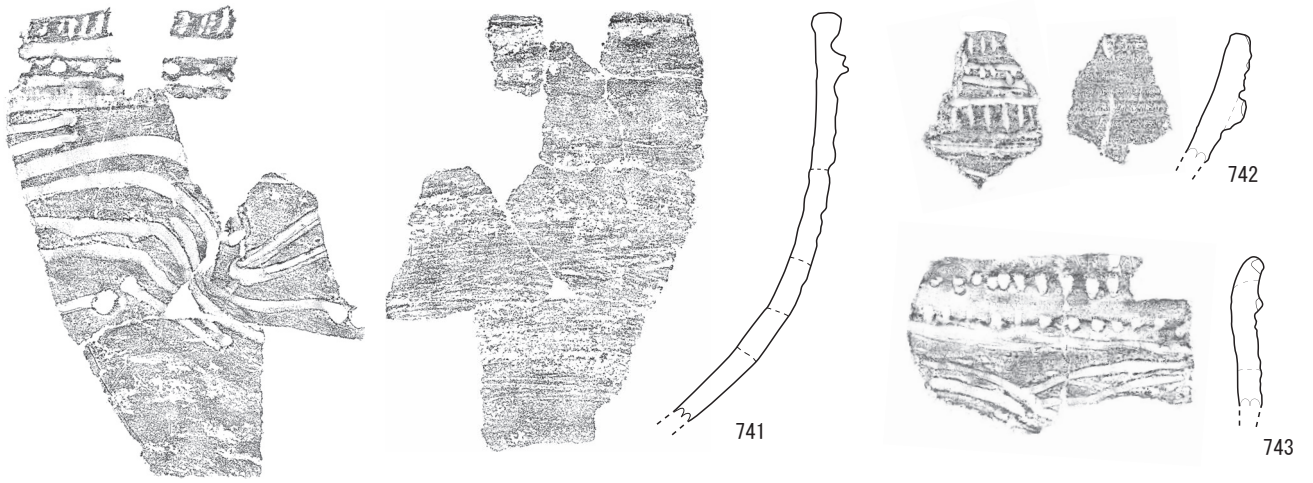
VIII類

頸部以下に、平行沈線や単沈線により文様を描くもの。線の始点・終点をやや深く刺突し、入組状に施す傾向がみられることは、VII類の一部にも共通する特徴である。文様を描く線の太さについては本遺跡の場合、VI類と同様の凹線によるものも多く出土するが、文様的な特徴が上記に該当するものをVIII類と判断し、報告する。器形は、胴部が張り出し丸みを帯びるプロポーションのものがVI類と比較して多い。平坦口縁と波状口縁のものがあり、口唇部の一部や口縁部上位に把手などの装飾を施すものも多い。口縁部の形態は直口、内湾、外反とバリエーションが非常に豊かで、頸部で絞まり外反するものの比率が高い。口縁部の厚みが均一なものと、肥厚させたものがある。また胴部とは別の口縁部文様帯を形成するものも多く出土した。胴部文様はVIII類の特徴をもち、かつ口唇部に1条の凹線を巡らせるものも一定数確認される。

VIII類は概ね指宿式に該当すると考えられる。口縁部の形態と口縁部文様帯の特徴からVIIIa類、VIIIb類、VIIIc類に細分した。ただし、VIIIc類のなかには、VI類の文様の特徵をもつものも少量ながら出土する。

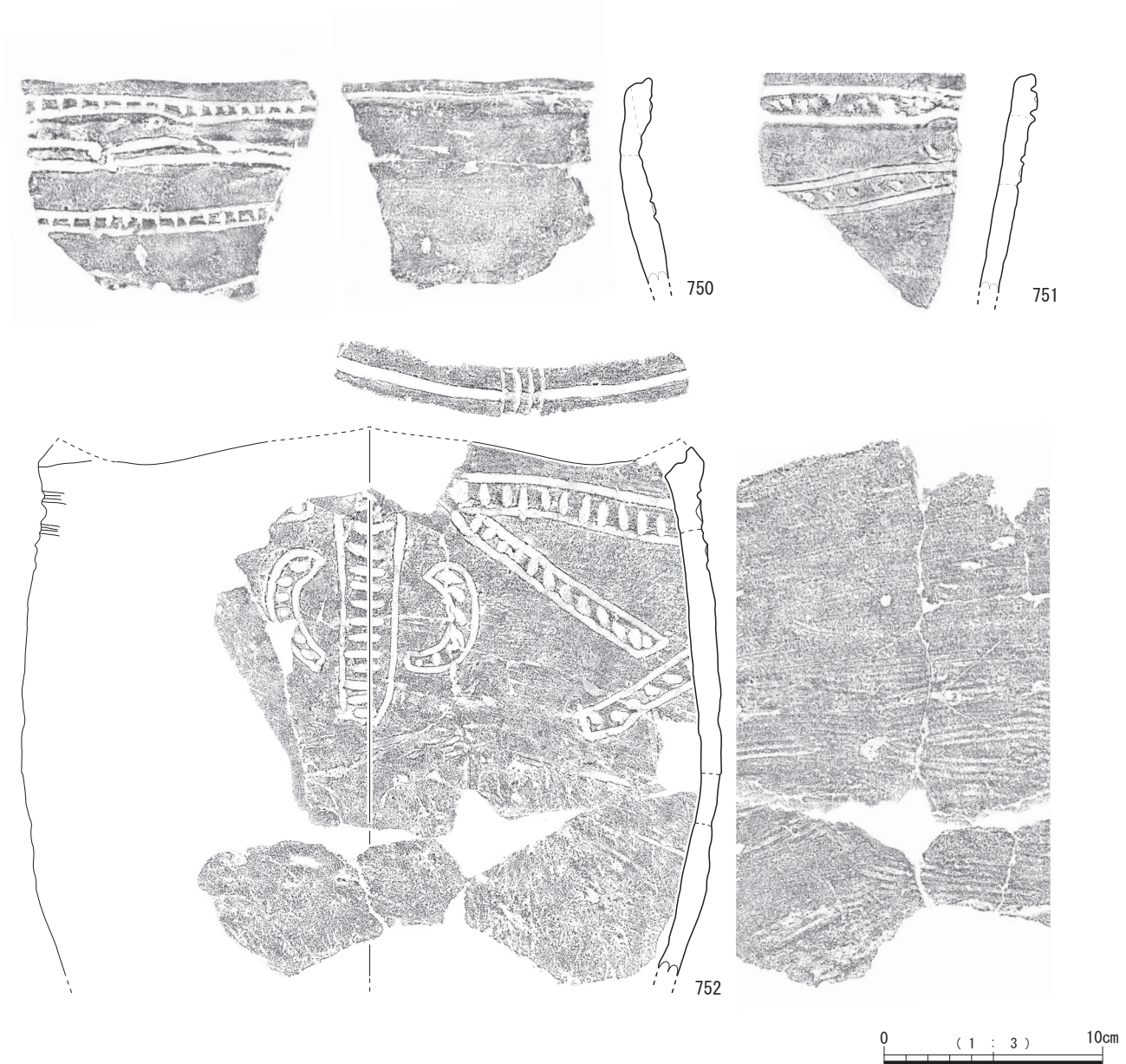
VIIIa類(第2-29～40図 734～807)

口縁部上位に、胴部とは別の文様帯を有するもの。口縁部を肥厚させたものが多い。多くは口唇部にも文様を



0 (1 : 3) 10cm

第2-30图 VIIa類土器(2)



第2-31図 VIIIa類土器(3)

施す。文様を描く沈線が細い傾向が顕著である。口縁部外面の文様は、横位の平行沈線、巻貝などによる連続刺突を巡らせるものが主である。胴部には斜位の平行沈線を基調にした大胆な幾何学文を描くものが多い。胴部文様帯の幅は広く、胴部下位に及ぶものもみられる。縁帯文系の土器の影響を受けていると考えられ、中原遺跡(志布志市)で報告されたIV-a, b類に該当する一群であると考えられる。

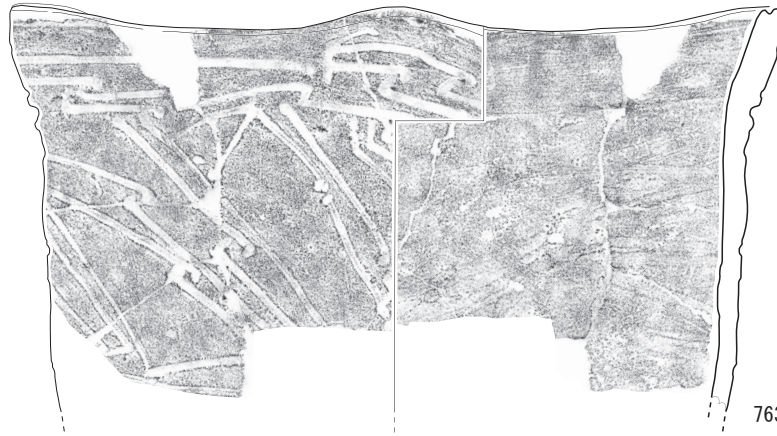
734~738は口縁部外面に縦位の沈線を連続して施し、突帯直下に文様を施す。736は平たく形成した口唇部に連点文を施し、VI類の範疇に入る可能性もあるが、波頂部直下に円形のモチーフを描き、口縁部文様帯の上下に連点文を横位に巡らせる特徴からここに含めた。739と740は波頂部直下に曲線的なモチーフを描き、数条の平行沈線を施す。740は文様帯が胴部上位に集約されており、補修孔が内外面から施される。

741~748は口縁部文様帯の上部や下部に粘土紐を貼り付けて見た目上の肥厚帯を形成し、その上に貝殻腹縁や篋先による連続刺突を施すものである。このタイプは口縁部が内湾気味の器形のものが多い。741・744はともに浅めの丸みを帯びた鉢となると推測され、胴部下位に文様帯が及ぶ。741はやや太めの平行沈線により横位に、744は細い平行沈線により斜位に文様が描かれる。743・748は口縁部の文様の特徴が類似する。743の胴部上位には平行沈線による曲線文が描かれ、748の胴部は無文である。

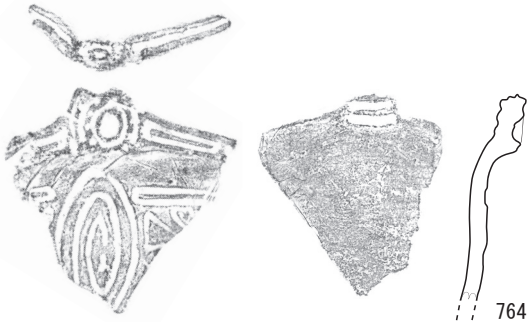
745~747は口縁部文様帯の上部・下部に篋先による粗い刺突を連続させる特徴は741~748に類似するが、口縁部外面に明瞭な肥厚帯を形成するものである。746は口縁部外面に「S」字上の文様を連続させるもので、このモチーフは本遺跡のVIII類に多くみられるものの一つである。747は口縁端部を尖らせ、強く内湾させる。口縁部



第2-32図 VIIa類土器(4)



763



764



765

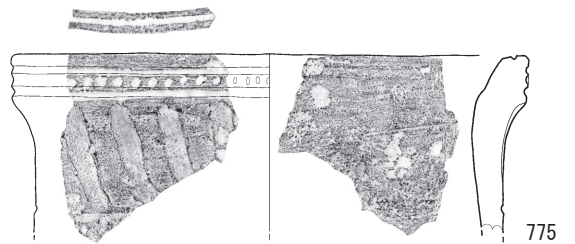
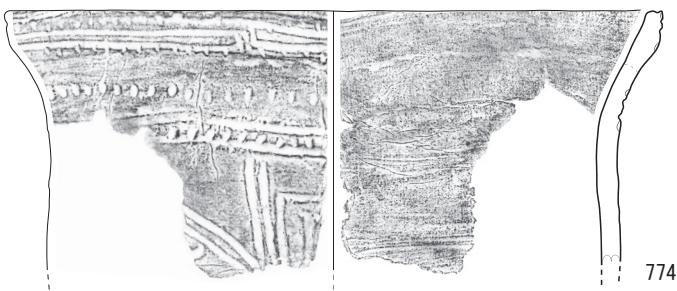
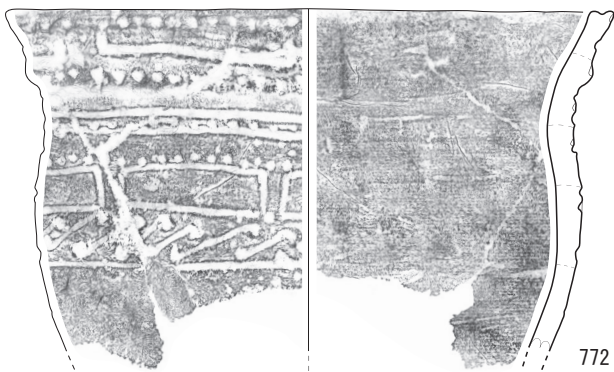
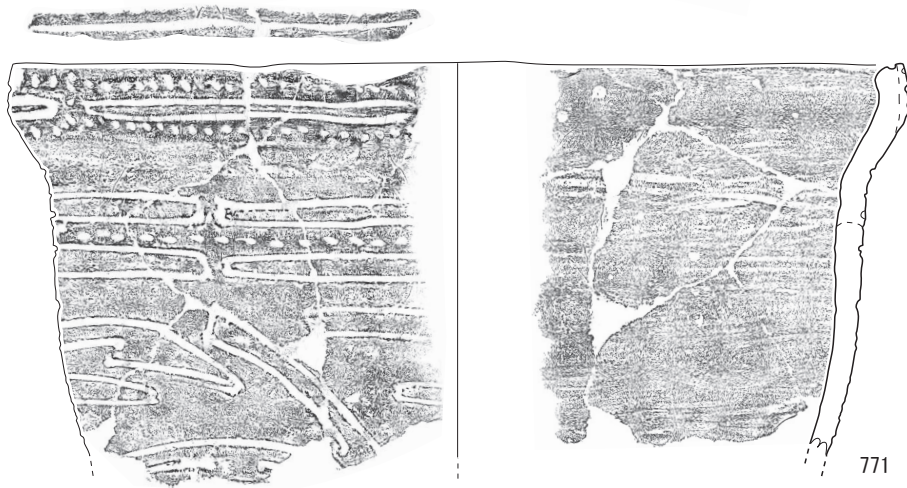
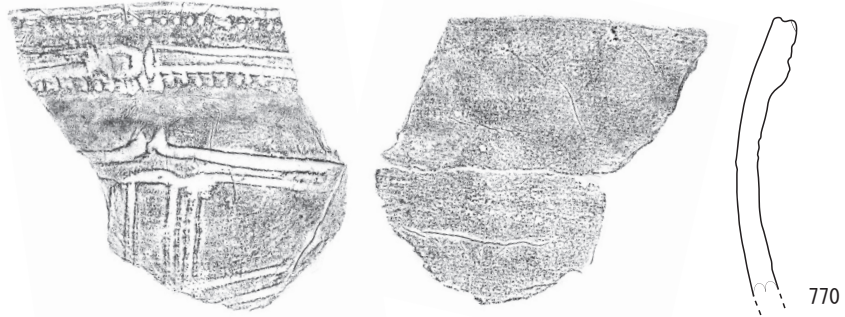
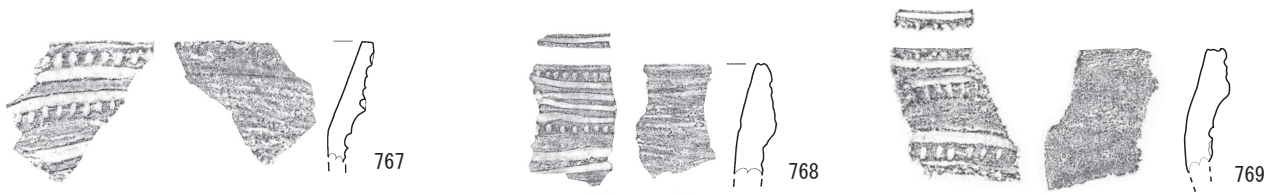
0 (1 : 3) 10cm



766

0 (1 : 4) 10cm

第2-33図 VIIa類土器 (5)



0 (1 : 3) 10cm

第2-34图 VIIa類土器(6)

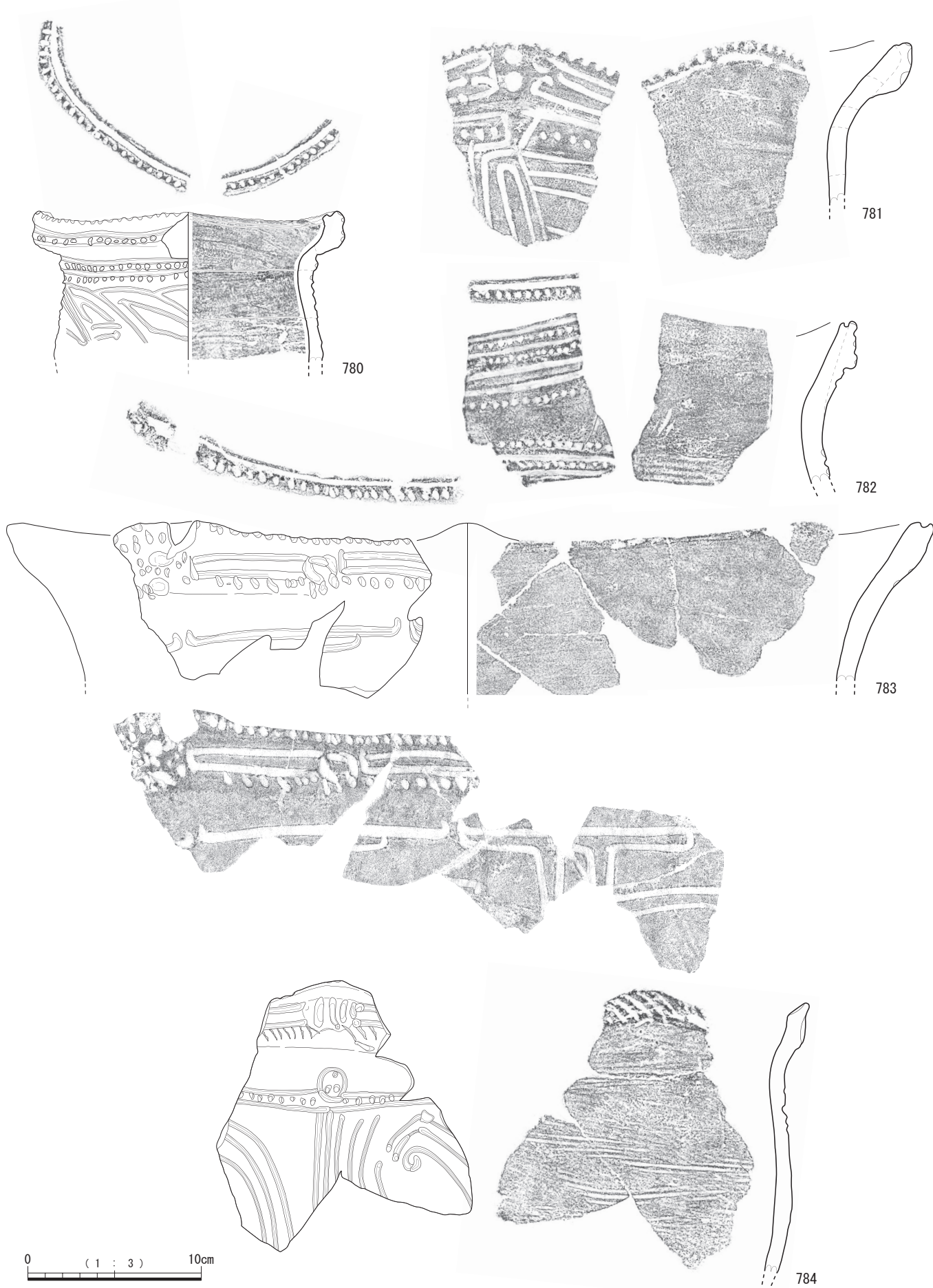


第2-35図 VIIa類土器(7)

肥厚帯は外傾する。頸部が大きくくびれ、胴部が張り出す器形となると推測される。

750～752は細い平行沈線間に篋先による刺突を等間隔に施すもので、施文具は違うがVIIb類(擬似縄文系)にも類似する文様パターンがみられる。ともに口縁部外面をわずかに肥厚させ、口唇部に平坦面をつくる。平坦面はやや内傾する。750の口唇部にはごく浅い凹線が粗く施される。751は外傾しながら開く直口のタイプである。752は波頂部を中心に左右対称の文様が描かれ、やや内傾する口唇部平坦面には、凹線を巡らせ、波頂部に縦位の沈線を4本施す。口唇部内面の胴部との境目の量は明瞭で、口縁部の形態はⅡ類(松山式)の範疇に入る可能性もあるが、胴部文様帯の特徴からここに含めた。

753・754は口縁端部の内面側の際にごく細い凹線を施すものである。753は外反しながら開く。口縁部上位に横位の沈線と刺突による文様帯をもち、その下に、棒状工具を使用したと考えられるための凹線を縦位に連続して施す。758は口唇部外面側に円形刺突文を巡らせ、やはり1段下がった位置に浅い凹線を巡らせたものである。759・760・762は丸みを帯びた口唇部に明瞭な凹線を巡らせるものである。761は凹線をもたないが無文の口縁部肥厚帯の直下に連続刺突や凹線を巡らせる文様の特徴が類似するためここに含めた。757は雑な作りであり、胴部上位に細い沈線が4条平行に描かれる。759～762は左上がりの斜位の平行沈線文を基調とする幾何学的文様が密に描かれる。762は底部まで器形の分かる資料で小

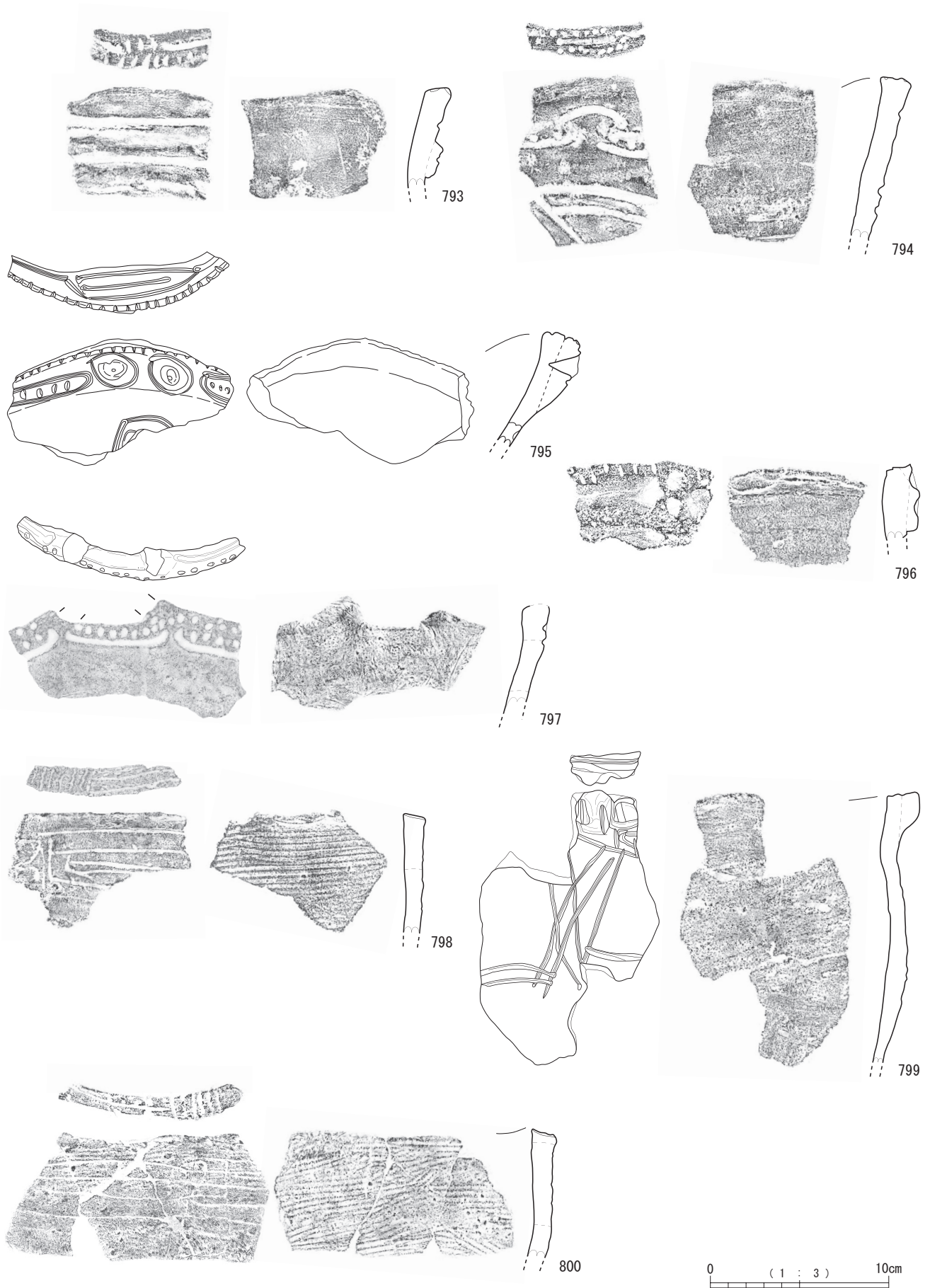


第2-36图 VIIa類土器(8)

年代測定 2502-2436 cal BC



第2-37図 VIIa類土器(9)



第2-38图 VIIa類土器 (10)



第2-39図 VIIIa類土器 (11)

形の深鉢である。胴部上位に帯状に煤が付着する。文様帯は頸部～胴部最大径あたりに及ぶ。

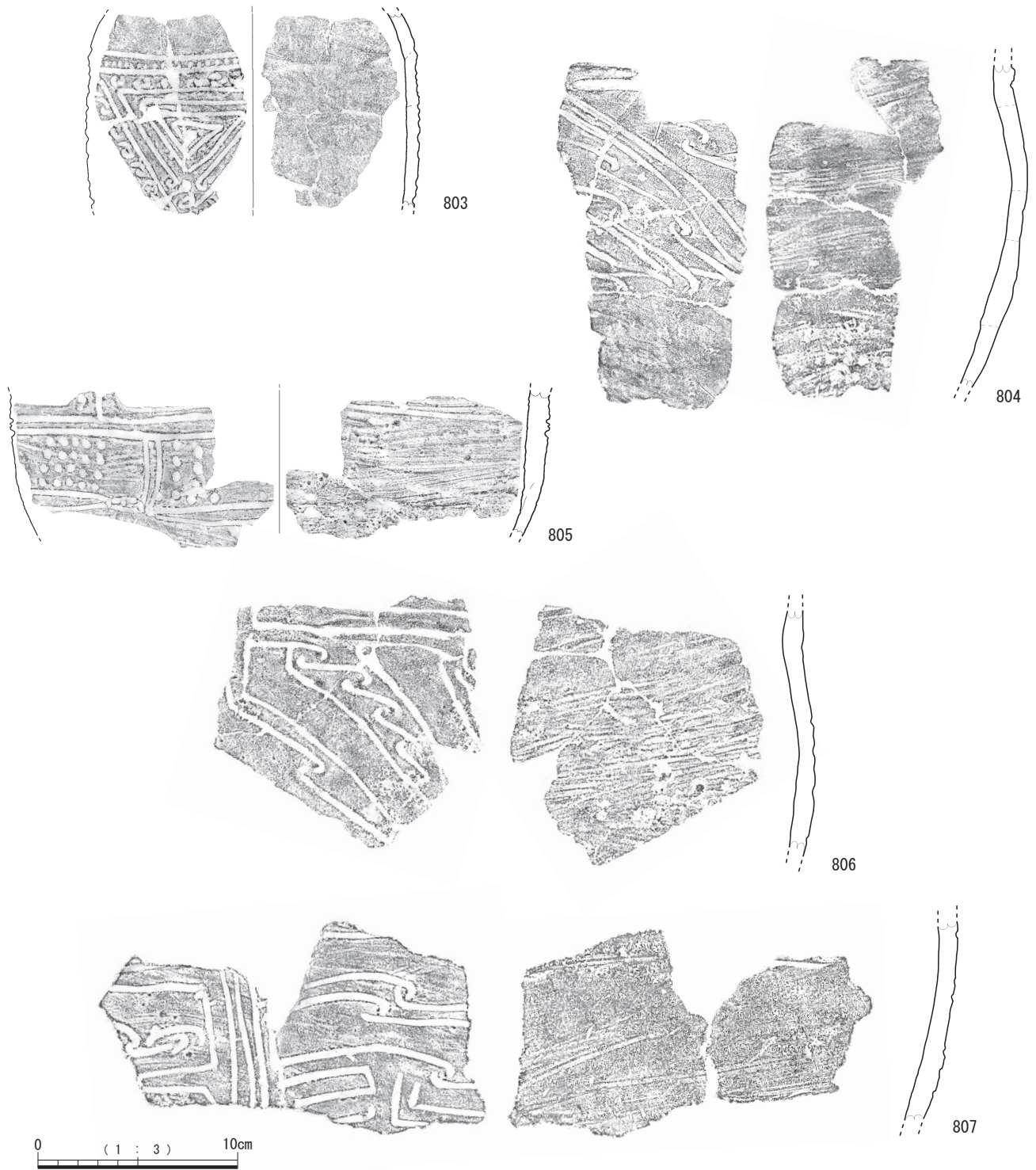
763～766は口縁部外面を肥厚させて横位の沈線文を巡らせる。胴部には平行沈線文を主体とした文様帯が下位に及んで描かれる。763は口縁部肥厚帯に平行な入組文を粗く描き、764・765は波頂部の直下に刺突と凹線による円形のモチーフを描く。764は波頂部裏側にも、2本の沈線を施す。これらは口唇部をあまり肥厚させず、凹線を巡らせる。766は口縁部外面上位に沈線を描き、口唇部の全周ではなく一部に凹線を施す。

767～779は口縁部外面肥厚帯に沈線や円形刺突文・貝殻や籠状工具による連続刺突文を組み合わせた文様帯を形成するものである。767～775は平坦口縁で776・777は口唇部凹線がごく細い沈線で、778・779は凹線をもたない。767・768・771・772・774・777・779の口縁部肥厚帯の文様構成には、上下を連続刺突文を巡らせて中位に沈線を描く特徴が共通している。胴部の文様も平行沈線や連点文を主体とするものが多い。口縁部肥厚帯のすぐ下やくびれの部分に平行沈線を巡らせるものが多い。772・776にみられるような「S」字状のモチーフは本遺跡から出土したVIII類に多くみられるものの一つである。775は指頭で描いた縦位の凹線を描き、778は渦巻文を描く。胴部の文様は3本単位の平行沈線で描かれている可能性がある。波状口縁の776～779の波頂部直下には孔・

円形刺突・渦巻き状のモチーフなどが描かれる。

780～784は口縁部・胴部の文様がVIIIb類の特徴をもつもののなかで口唇部がやや肥厚し、上面からみると凹線と連点文や貝殻腹縁刺突文を組み合わせて持つものである。外面側に連点・連続刺突を施し、内面側に凹線を巡らせる。波状口縁である。口唇部にはIX類とも類似する特徴の文様を描くが、口縁部肥厚帯・文様の特徴からVIIIb類に該当すると判断した。口縁部肥厚帯と胴部との境目のくびれた部分には平行沈線文や連点文を描き、その下に平行沈線による文様を描く。残存部が少なく、全容は不明だが、781・784の胴部の平行沈線文は3条単位である可能性がある。ともに金色の雲母を特に多く含み、外面は丁寧なナデ調整で滑らかな仕上げである。

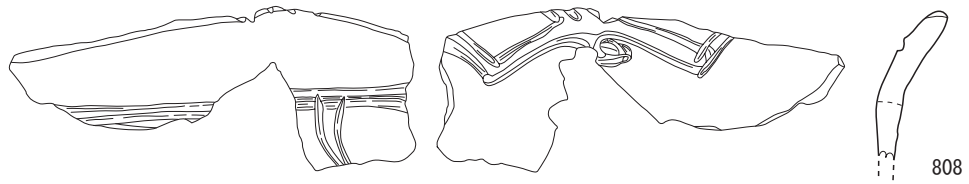
785～790は波頂部を含む破片である。785～787はやや内湾気味の口縁部で、口縁部肥厚帯と胴部との境目の段が緩い。785は、波頂部外面に孔を有し、786・788・789には大きな円形の刺突や同心円状のモチーフを描く。785の外面に付着した煤を年代測定した結果（報告No.6）¹⁴C年代が 3962 ± 25 yrBP 1 σ , 2 σ 暦年代範囲が 2502 – 2436 calBC (48.2%)である。786と788は文様が似るが、胎土の混和材の量や種類、色調に違いが見られ、別個体の可能性もある。787は波頂部に小さな連点を施す。790は口縁部外面と口唇部を平坦に形成する。口縁部肥厚帯と胴部との境目の稜は明瞭である。口縁部の文様は波頂



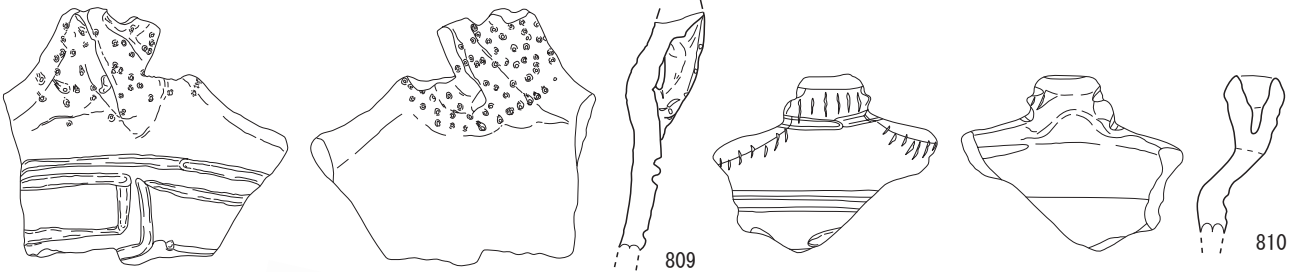
第2-40図 VIIa類土器（胴部）

部を中心に左右対称に描かれており、文様のパターンとしてはVI類の範疇である可能性もあるが、ここに含めた。791・792は口縁部内面に貝殻腹縁刺突による文様を施す。ともに口縁部肥厚帯の直下に横位の文様が描かれ、その下は無文である。形態としてはIX類にも類似するが、平行沈線を主体とする胴部の文様の特征からここに含めた。793～802は口唇部が上面を向き、平坦に形成される。

796のように口唇部が粗く面取りされるものもあるが、沈線・刺突を組み合わせた文様を施す傾向がみられる。797は波頂部に突起を有すると推測される。798と800は矩形的文様を横位に展開させ、800は文様を描いた後を強くナデて仕上げているため文様の一部判然としない。801, 802は口唇部を幅広く肥厚させる。ともにごく緩い波状口縁で、波頂部を外側に張り出させて縦位の沈線文

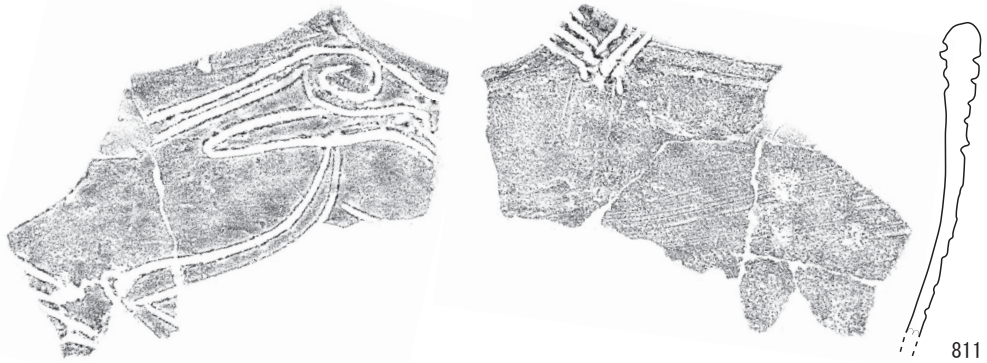


808

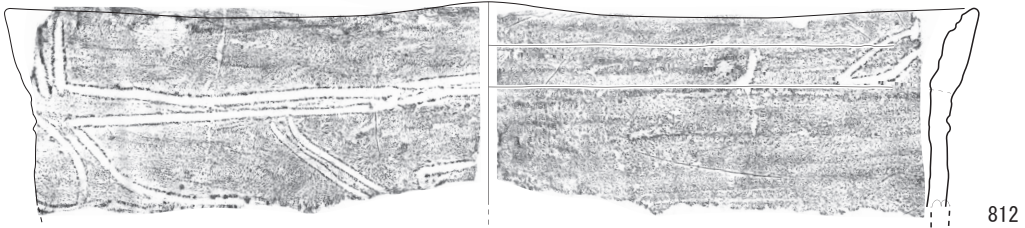


809

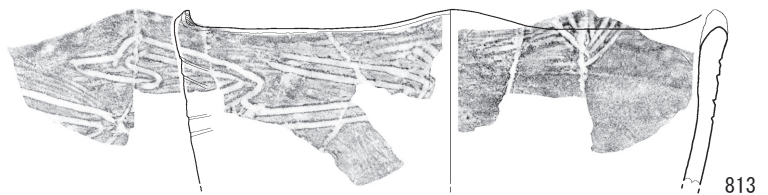
810



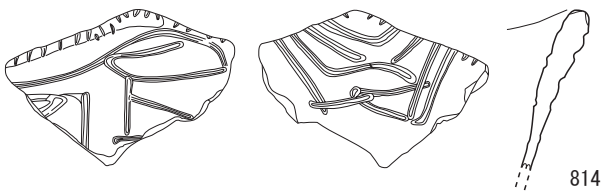
811



812



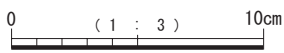
813



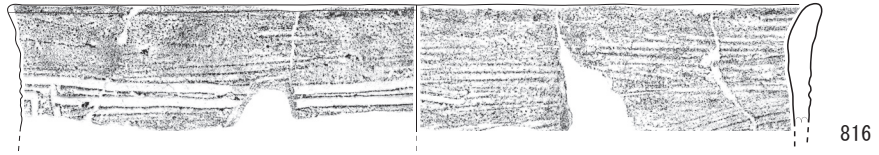
814



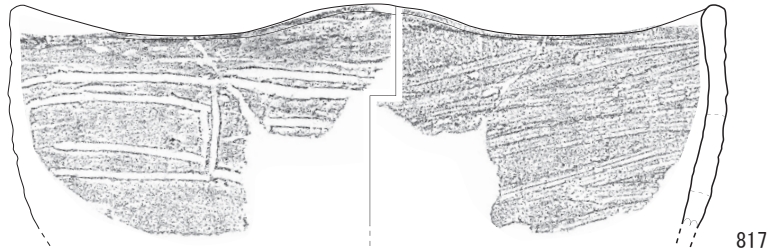
815



第2-41图 VIIIb類土器(1)



816

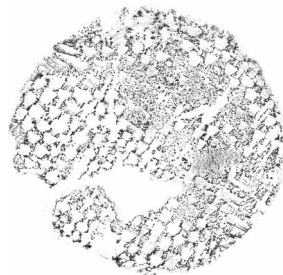


817

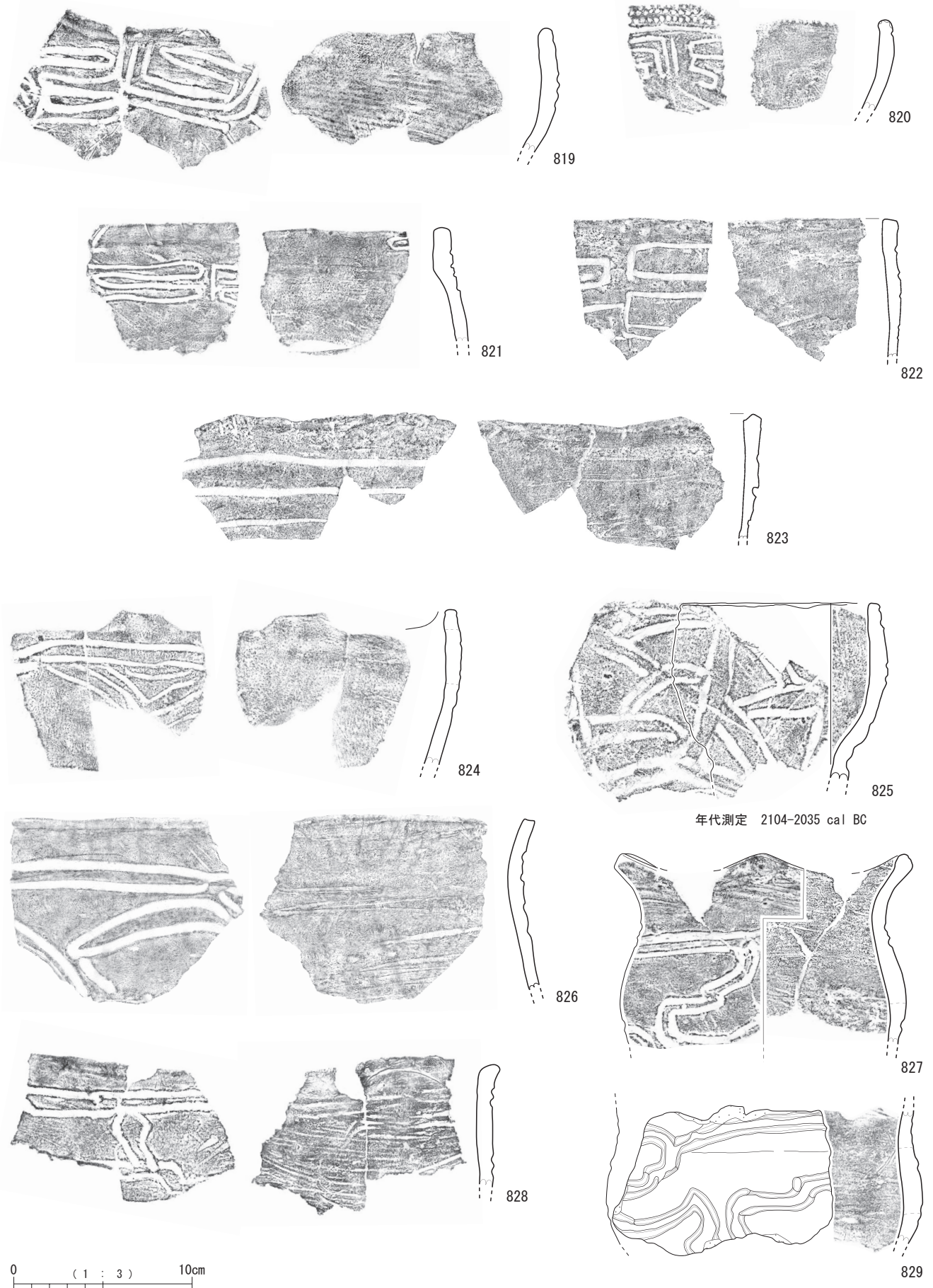


818

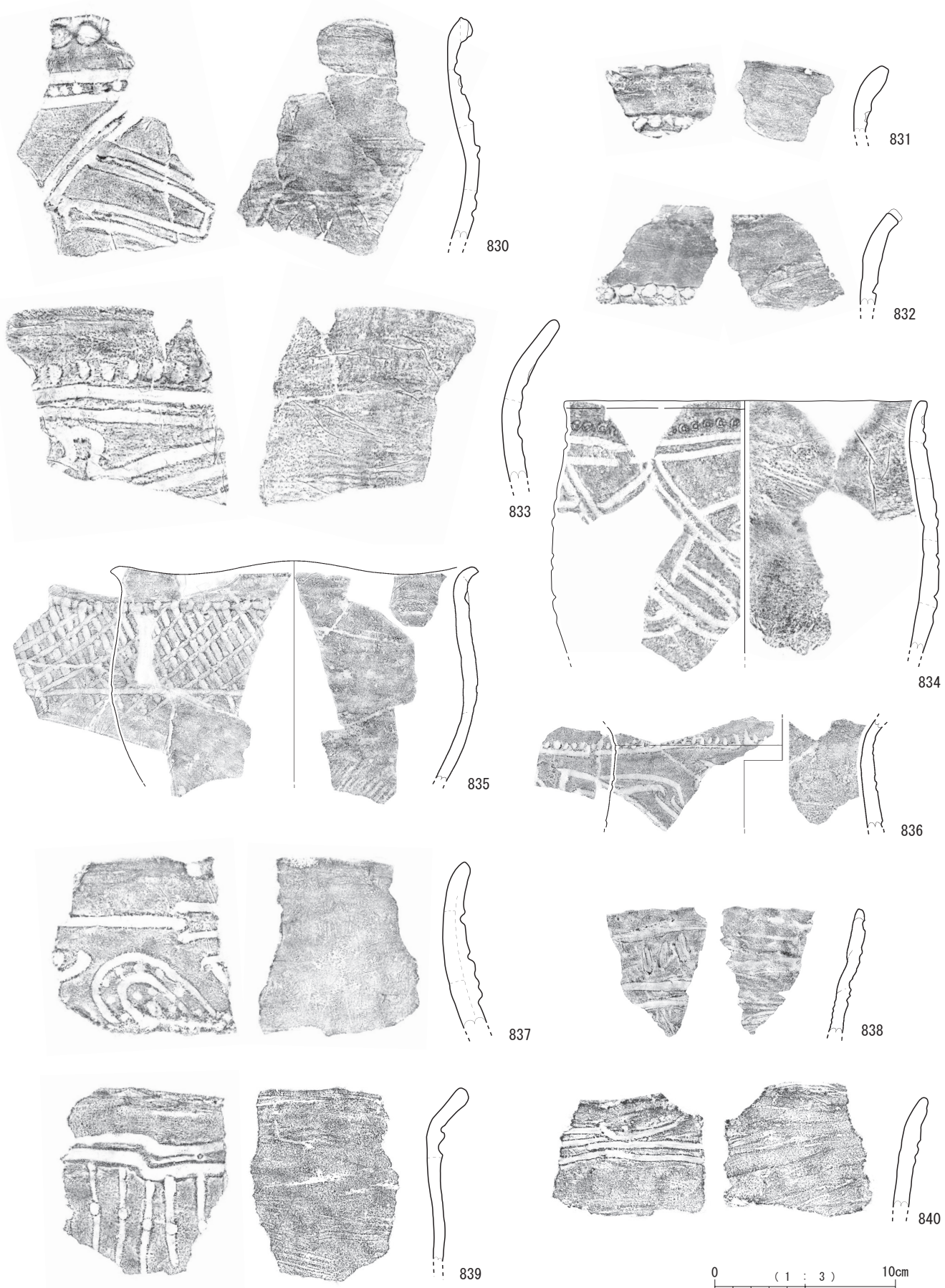
0 (1 : 3) 10cm



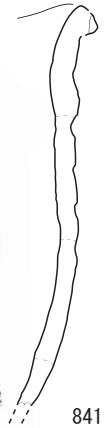
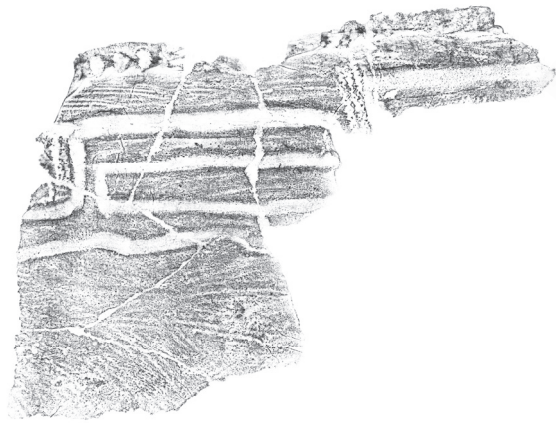
第2-42図 VIIIb類土器(2)



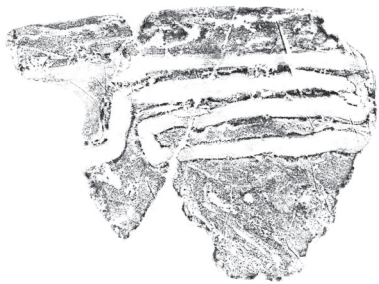
第2-43図 VIIIb類土器 (3)



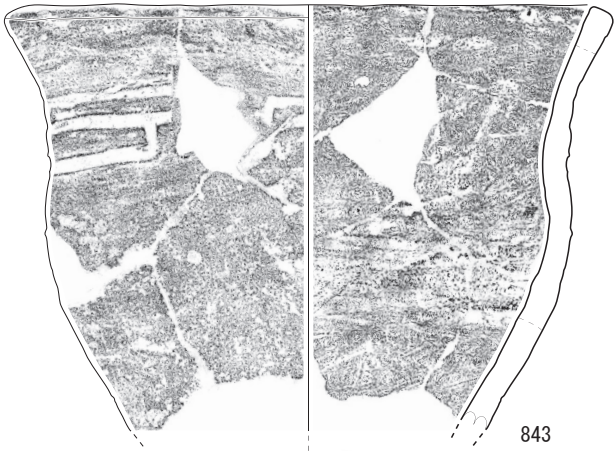
第2-44图 VIIIb類土器(4)



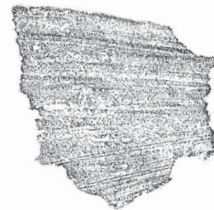
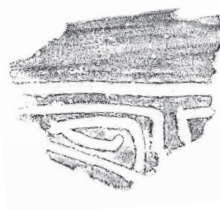
841



842



843



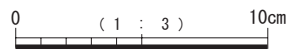
844



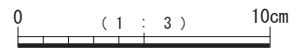
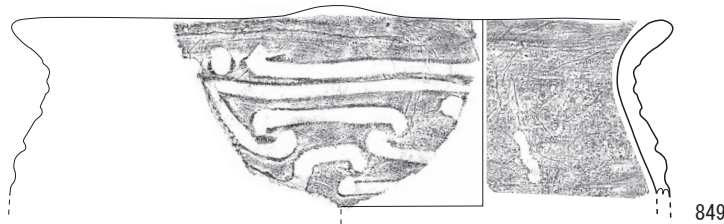
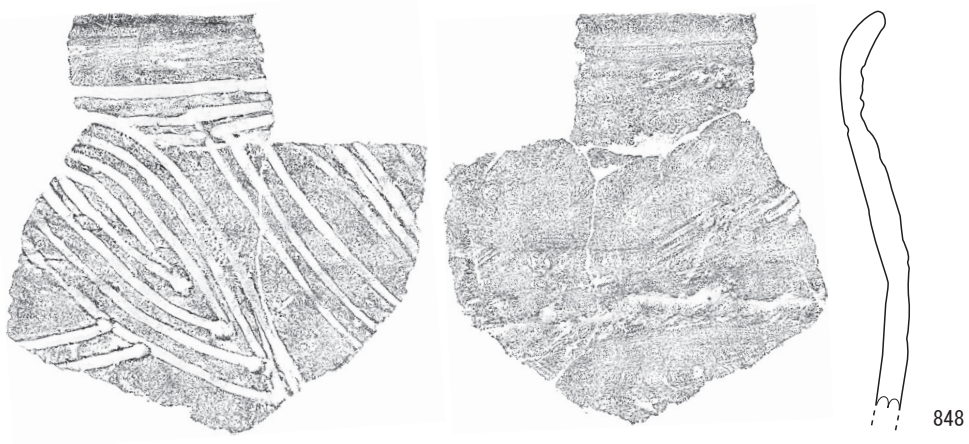
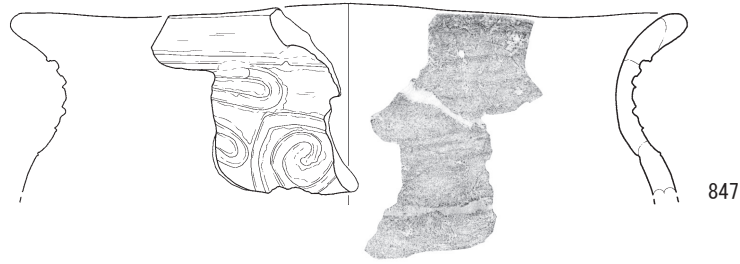
845



846



第2-45图 VIIIb類土器(5)



第2-46図 VIIIb類土器(6)

や渦巻文を施す。胴部上位に横位に曲線的な文様を描くと推測され、一部に矩形のモチーフが確認できる。

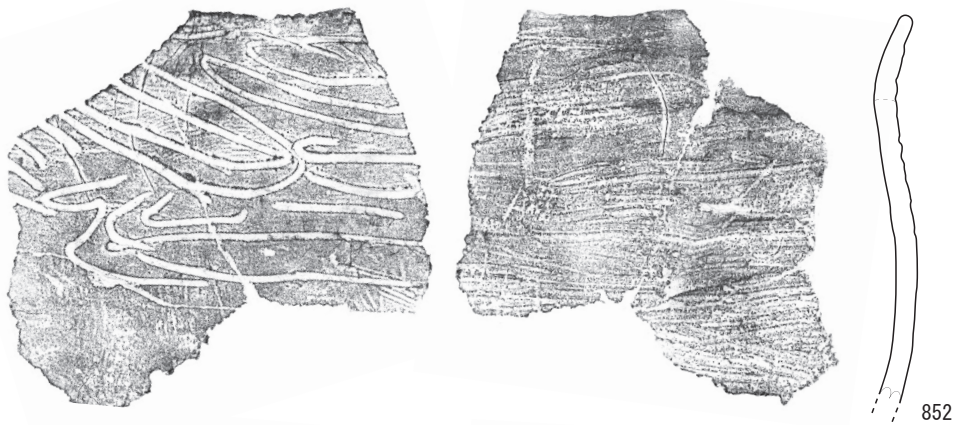
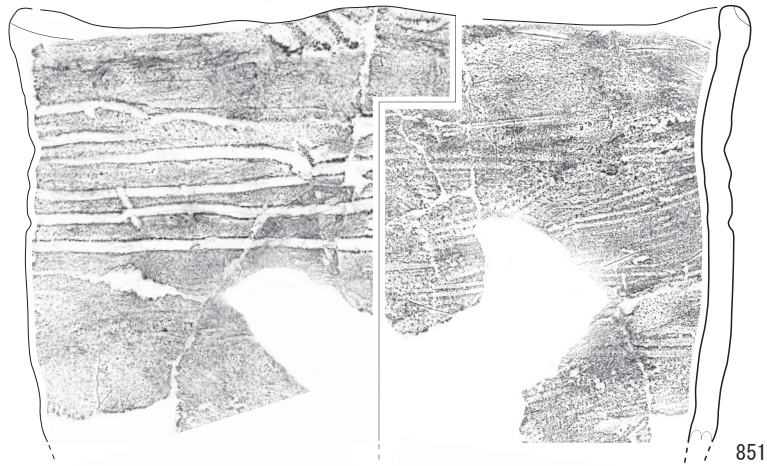
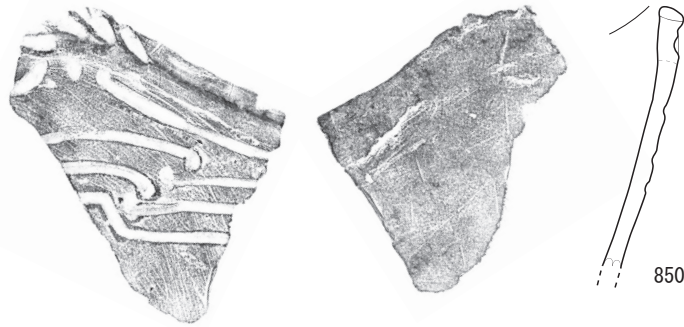
803~807は、細い沈線による文様が胴部下位に及び、密に描かれることからVIIIa類土器の文様の特徴をもつと判断した胴部片である。「S」字状の入組文や刺突文が描かれるものが多い。807は下胴部片でそのほかは上胴部片である。

VIIIb類 (第2-41~53図 808~878)

口縁部の形態は直口、内湾、外反と様々であることを先述したが、外反するものの比率が特に高い。頸部でくびれ、胴部がやや張り出し、丸みを帯びる傾向も著しい。波状口縁と平坦口縁とがある。波頂部内面に文様を描くものや、波頂部に数個の刻目を施すものが多く出土している。口縁端部を丸くおさめるものが多く、外面は、口縁部直下を無文とし、頸部あたりに1条ないし2条の横

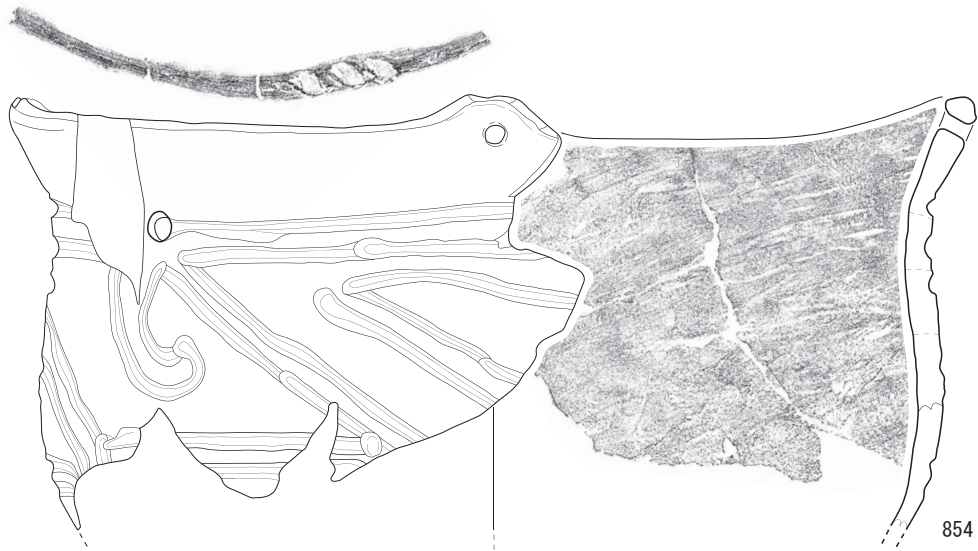
位の沈線を巡らせて区画した直下を胴部文様帯とするパターンのもので多く出土する。胴部の文様のバリエーションは多く、平行沈線文を主体とする。南薩地域の同じ時期の遺跡で出土するような、長靴文や矩形の文様パターンを横位に展開させるものも一定数出土するが、胴部に斜位の大胆な平行沈線を基調とした文様を描き、線の連結部分を鉤手状に入り組ませるもの(VIIIa類とも文様パターンが似る。ただし口縁部の形態的な特徴はVIIIb類である。先述の中原遺跡IV-c類に該当する一群)が特に多く出土する。また、平行沈線が曖昧に描かれた、規則性の弱い崩れた文様パターンのもも確認できる。

808~818は薄手で硬質な一群で、胎土の色調や混和材の特徴から指宿地方をはじめとした他の地域で製作されたものと考えられる。総じてシャープな細幅の平行沈線によって文様が描かれている。808・811~814・817の口縁は、端部にむかって器壁に厚みをもたせて丸くおさめ

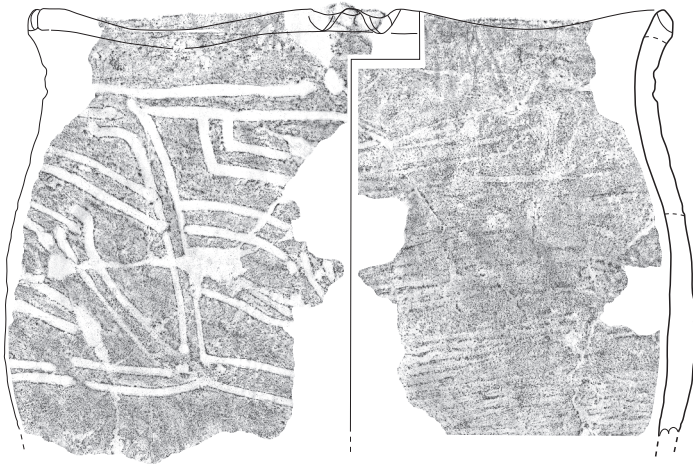


0 (1 : 3) 10cm

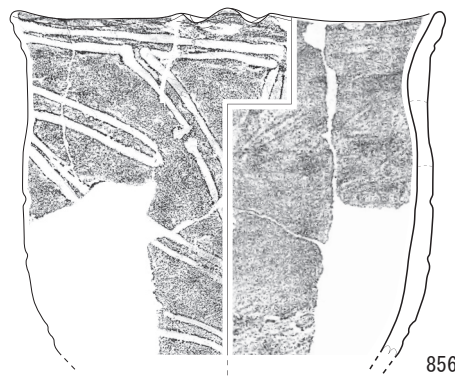
第2-47図 VIIIb類土器(7)



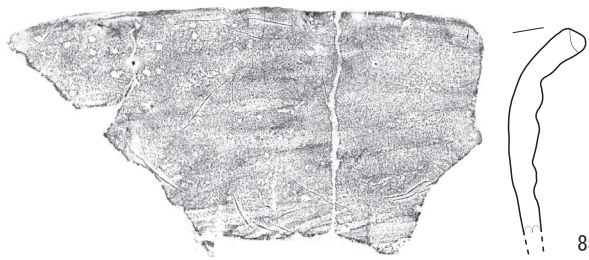
854



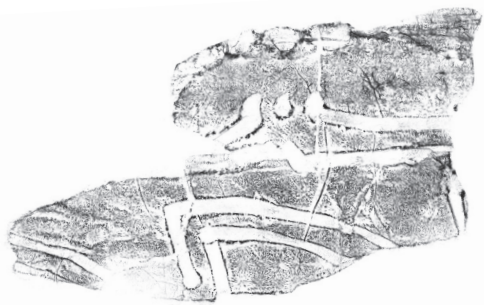
855



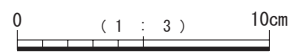
856



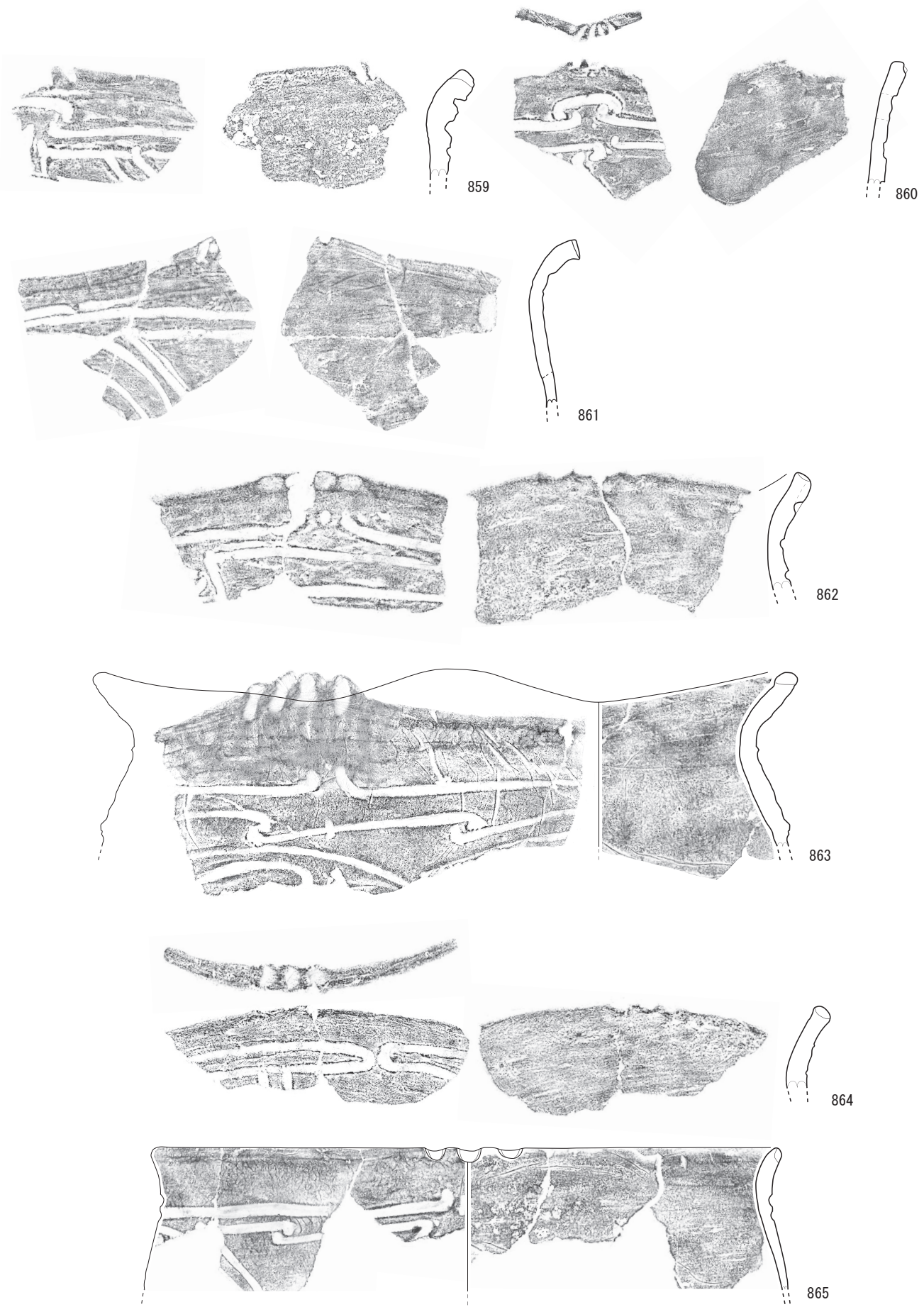
857



858

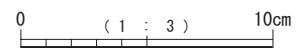
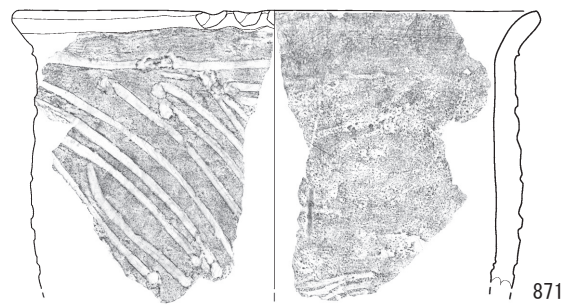
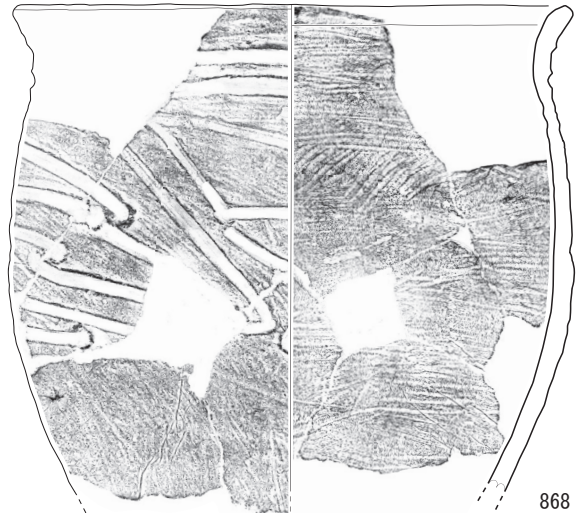
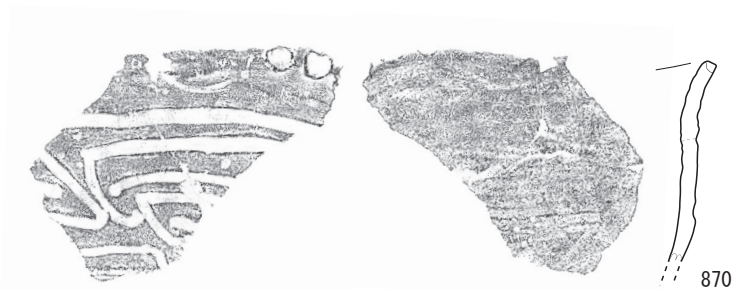
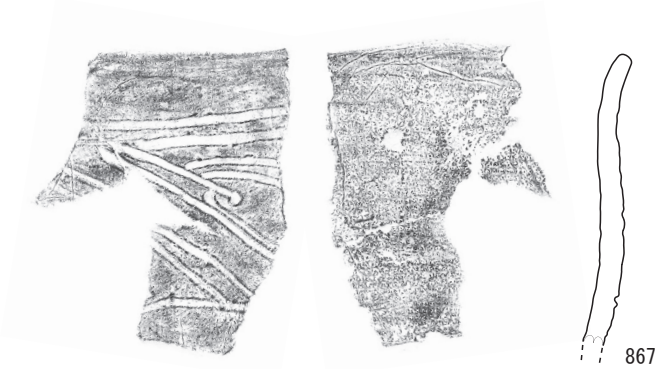
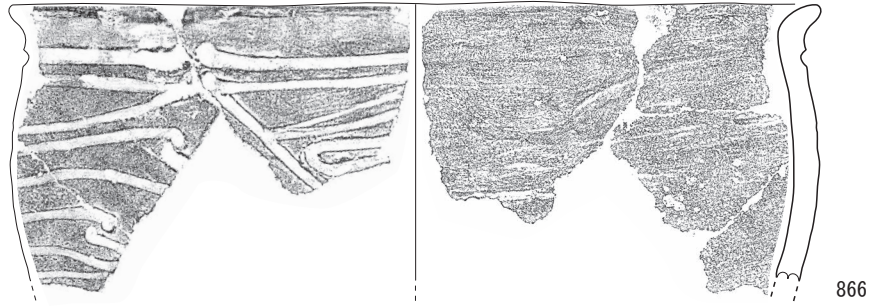


第2-48図 VIIIb類土器(8)



第2-49図 VIIIb類土器(9)

0 (1:3) 10cm

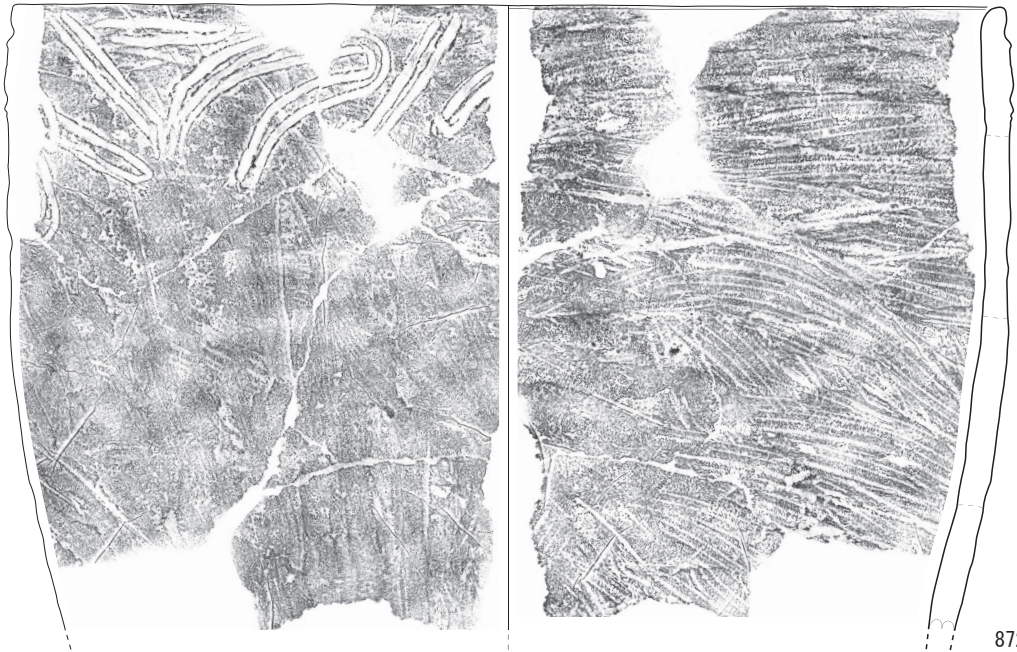


第2-50図 VIIIb類土器 (10)

る。波状口縁で、波頂部裏面にも文様を描く。809・810・815は波頂部に突起を有し孔を施す。809・812は色調が桃色で、指宿地方からの搬入の可能性もある。818は完形に復元できた。口唇部は平坦に形成される。波頂部は4か所均等につくられ、波頂部直下に渦巻き文を描く。胴部は底部にむかって急な角度ですぼまるため、丸みを帯びたプロポーションとなる。平底で網代痕が付く。渦巻文同士のほぼ中間に2本1組の文様を垂下させる。

810にのみ微量な金色の雲母が混じり、そのほかは角閃石が多く含まれる特徴的な胎土である。

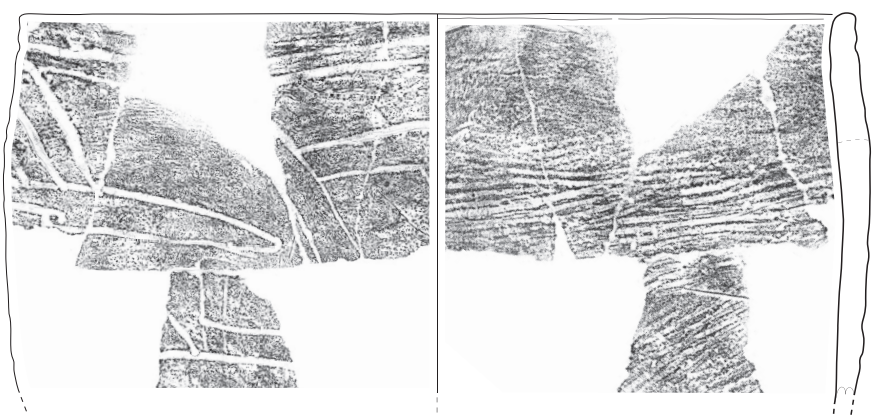
819~822は矩形の文様を横位に展開させるもので、819・820は丸みを帯びた浅い鉢状の器形となると推測される。821は口縁部がすぼまる。820は丸い口縁端部に小さな連点を密に施す。823はやや粗いつくりで、ごく緩い波状口縁を呈する。口縁端部にむかって器壁に厚みをもたせる。口唇部は粗く面取りされる。824は平坦口縁



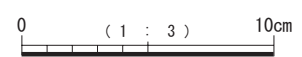
872



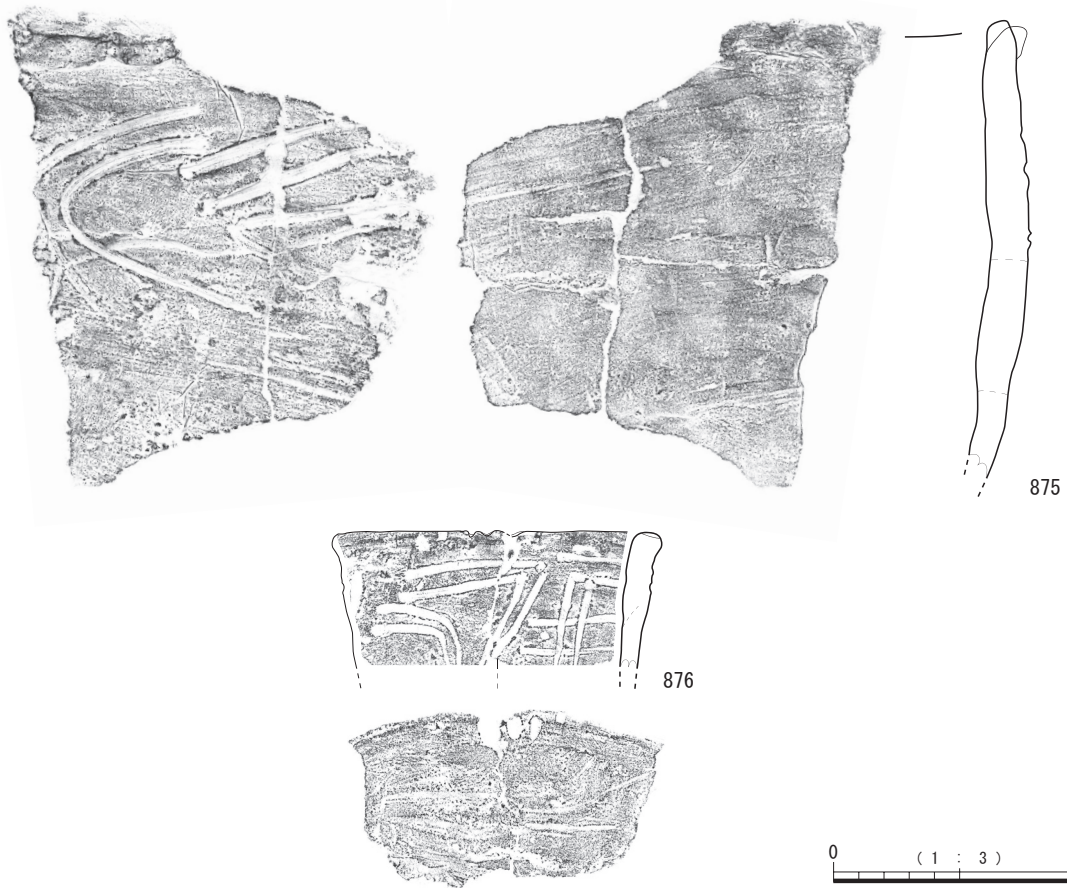
873



874



第2-51図 VIIIb類土器 (11)



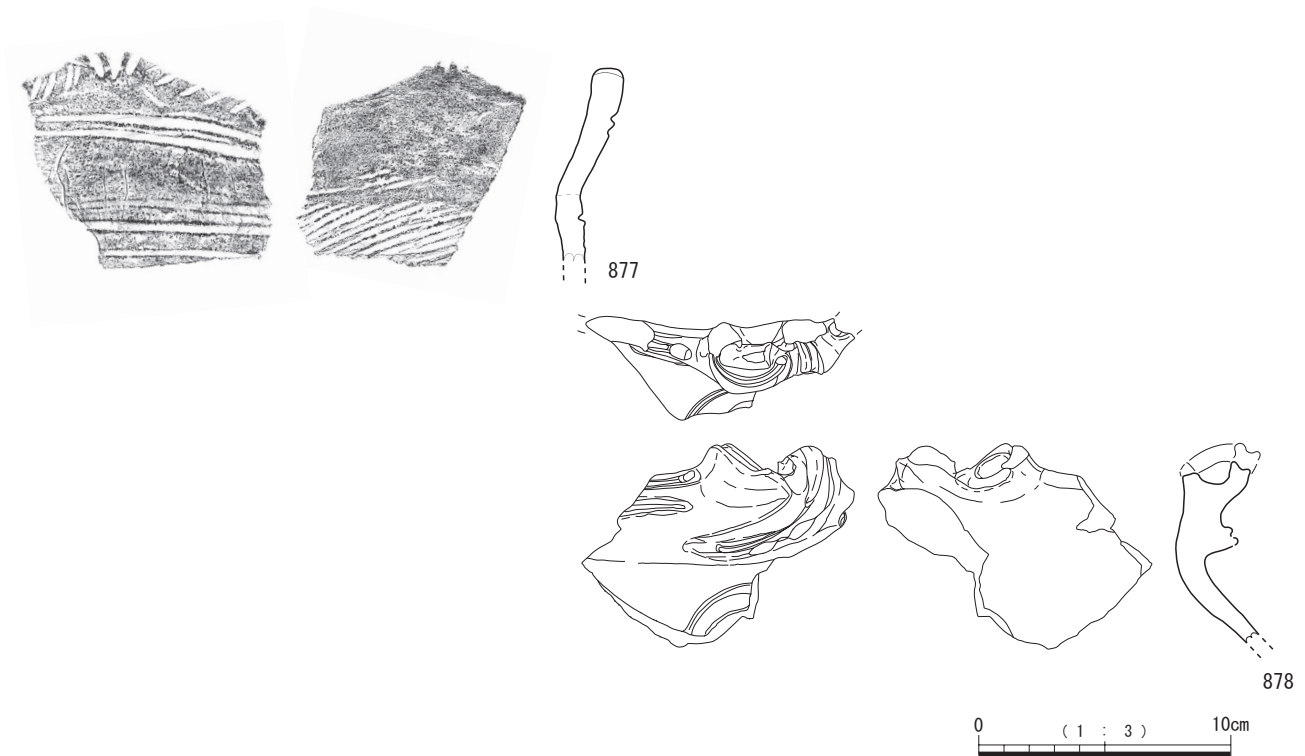
第2-52図 VIIIb類土器 (12)

の口唇部に小さな丘状の突起を有し、逆三角形のモチーフが3条の平行沈線により描かれる。826・828は口縁部を短く外反させ、頸部外面に二重の沈線を巡らせその下にやや崩れた平行沈線文を描く。825・827は小形品である。825は口がすぼまり丸みを帯びた器台状の器形で、外面には煤が多量に付着する。祭祀などの特殊な用途に使用された可能性もある。外面に付着した煤を年代測定した結果（報告No.3）¹⁴C年代が 3725 ± 20 yrBP 1 σ , 2 σ 暦年代範囲が2104-2035calBC (49.40%)である。827・829は同一個体である。波頂部外面に小さな円形の突起を有する。文様は胴部下位に及ぶ。826~829は胴部文様帯の幅は広いが密度は低い。

830~840は文様の特徴にVI類やVII類の要素を併せもつ。分類に迷うものであったが、頸部に沈線を巡らせてその下に文様帯をもつことや、胴部の文様が平行沈線文を主体とすることをVIII類の範疇であると判断し、ここに含めたものである。830~836は頸部のくびれ部分の外面に連点文・あるいは連続刺突文を巡らせるものである。830は口縁部外面の最上位に突帯を巡らせて、貝殻背面による大きな刺突を連続して施す。頸部に巡らせた平行沈線間を巻貝によって等間隔に刺突する。837の胴部にも同様の文様パターンがみられる。これらの特徴はVIIb類に

多くみられ、VIIIa類にも少数出土する。また、833・837は金色の雲母とともに白色粒子を特に多く含み、胎土の色調も明るいため搬入品の可能性も考えられる。831・832・835は頸部に凹線を巡らせ、その上に連続刺突を施す。VIIa類に多くみられる文様パターンである。835は緩い波状口縁で口縁端部が短く強く外反する。胴部上半に斜格子状の文様を帯状に描く。833・834・836は頸部に巡らせた端・平行沈線文の直上に貝殻刺突文を等間隔に施す。VI類にも多くみられた文様パターンであるが、貝殻腹縁を明瞭に刺突しVI類よりも小さな刺突である。胴部の文様は平行沈線によって描かれる。838・840は直線的に立ち上がる器形でかなり粗いつくりである。わずかに外反する頸部外面に平行沈線をもつことからここに含めた。

841~844は長靴文や、矩形の文様を横位に展開させるものである。頸部でわずかにくびれ、口縁部は外反する。841~843は文様帯が胴部上位に集約される。841は830と同様に口縁部に突帯をもつ。縦位の平行沈線間に貝殻腹縁刺突を充填させる。VIIb類の範疇である可能性もあるが胴部の文様の特徴からここに含めた。また、この文様パターンのものはやや線が太い傾向がみられるため、VI類との関連性も窺える。845には平行沈線による垂下文



第2-53図 VIIIb類土器 (13)

を描く。846・847は同心円状や渦巻き状の円形のモチーフを描く。なお、847～849は口縁部が短く外反し、頸部の屈曲度が大きく胴部が大きく張り出す丸みを帯びた器形である。849は薄手で硬質である。線の始点と終点を明瞭に刺突し、太めの沈線を深く施す。器面をしっかりとナデて調整して仕上げた丁寧な作りである。なお、内面の調整には工具が使用される。SS27から出土した、色調が黒色を呈し搬入品の可能性をもつ413と形態・文様・調整の特徴が似る。褐色の胎土で金色の雲母が混じる。

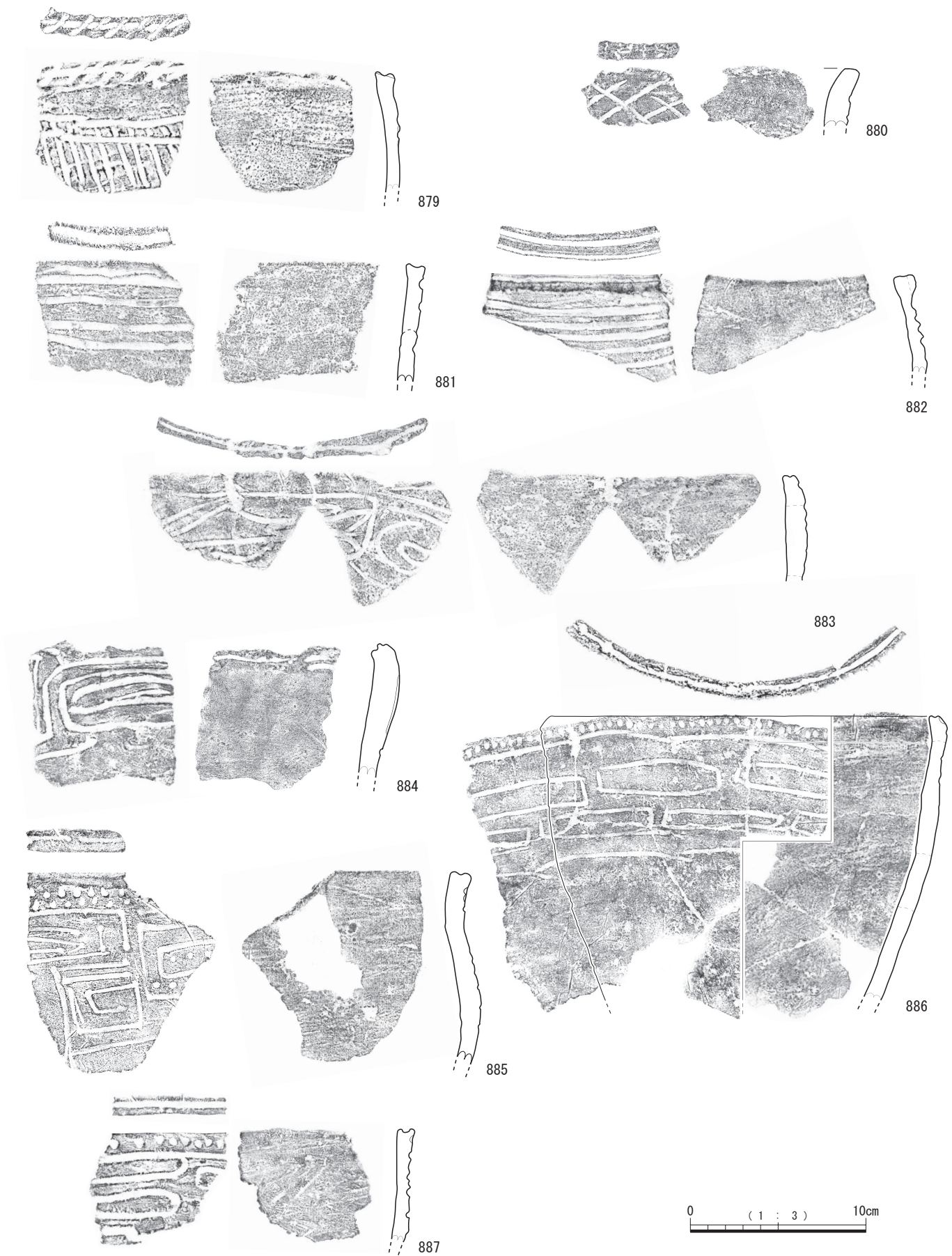
850は大きく外傾しながら直線的に開く器形で、鉢状の形態となる可能性もある。文様・胎土の混和材・調整の特徴は413と似るが色調は褐色である。内面には窺痕が多く残る。

851は口縁部上位を無文とし、頸部のくびれ部分に明瞭な単・平行沈線を巡らせ、それより下位に文様を描くものである。なかでも残存部分の多いものに着目すると、胴部が丸く張り出し、底部にむかって急な角度ですぼまる傾向がみられる。また、文様帯の幅も広く胴部下位に及ぶものが多い。平坦口縁と波状口縁とがあり、波頂部や口唇部に2～4条単位の刻目を等間隔に有するものが多い。残存率の高い資料から推測すると、口縁部の4か所程度に等間隔に施すものと推測される。851は多重の平行沈線を横位に描くもので、文様帯は胴部上位に集約される。沈線の所々を弧状に継ぐ。852は薄手で硬質である。内外面の調整には条痕を残す。やや崩れた平行沈

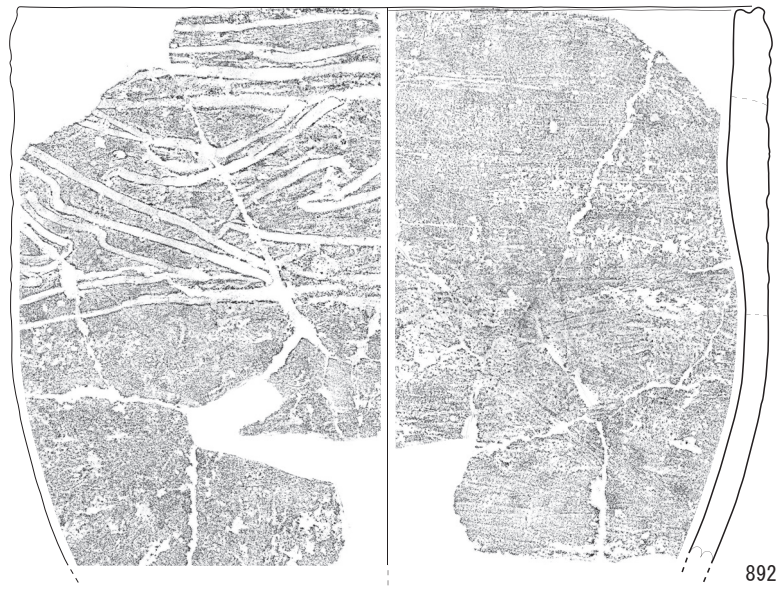
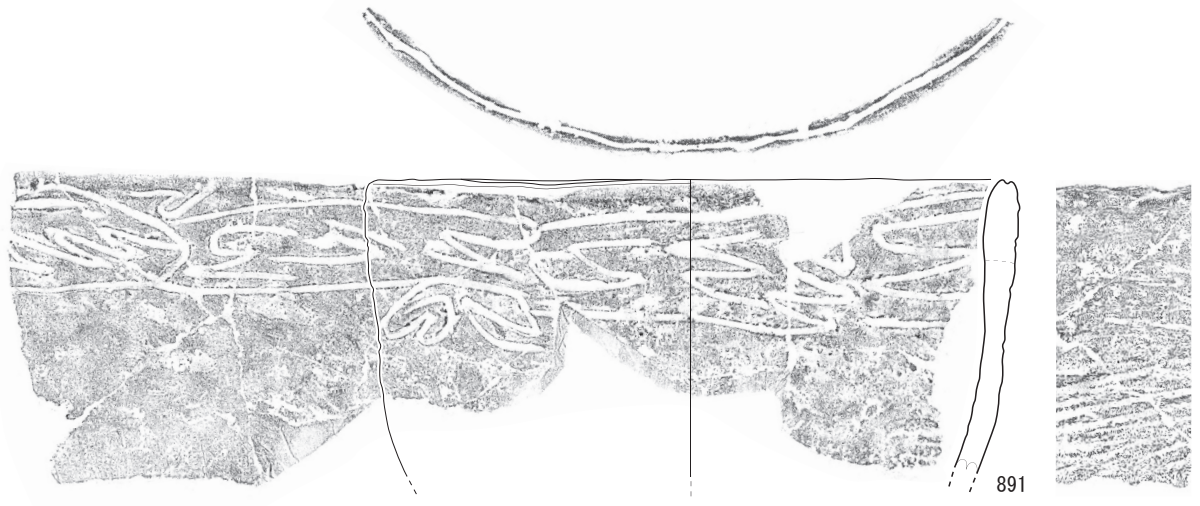
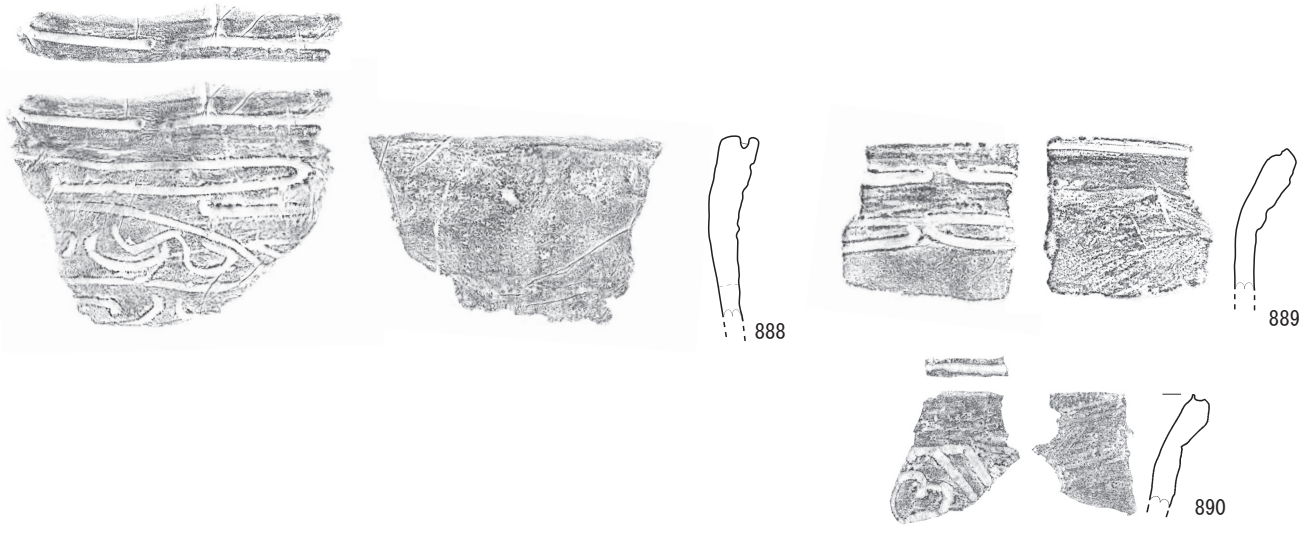
線文である。所々を弧状に継ぐ特徴は851と似る。853～856は胴部に斜位の大胆な平行沈線文を描くタイプで、本遺跡からの出土点数が最も多い一群である。細かい沈線で幾何学文が描かれるものも多く出土し、VIIIa類にも共通する特徴である。大きさは様々な規格がある。854には2か所の孔が確認できる。波頂部の孔は内外両側から、胴部の孔は外面側から施される。863は橙色の胎土で、白色粒と金雲母を特に多く含み、外面が滑らかな手触りである。搬入品の可能性も考えられる。

872～876は口縁部と胴部文様帯を区画する横位の沈線がやや不明瞭で、胴部上位に粗い平行沈線文を描く。872～874は器壁は急な角度で立ち上がり、口縁部の形態は内湾気味である。口縁部直下～胴部上位に文様帯をもつ。器面の調整が粗い。873は口唇部の内側に粘土を貼り付け肥厚させる。875・876は口縁部が外反するがその度合いは小さい。876は平坦口縁の一部をわずかに隆起させ、刻目を施す。876は小型である。875は、口唇部の一部がVIIIa類のように突帯状に形成されるが、突帯を器面になじませて一体化させており、全周に巡らせるものではない。DKS16から出土した514とは胎土、文様が類似し同一個体の可能性もある。

877、878は、ともに波状口縁で、頸部が大きく外反し、口縁部は明瞭に内湾する。877は波頂部に刻みを入れる特徴からここに含めた。口唇部に浅い刻目を巡らせることや、頸部のみではなく口縁部直下にも平行沈線文を巡らせることから、搬入品や時期差の可能性も否定できな

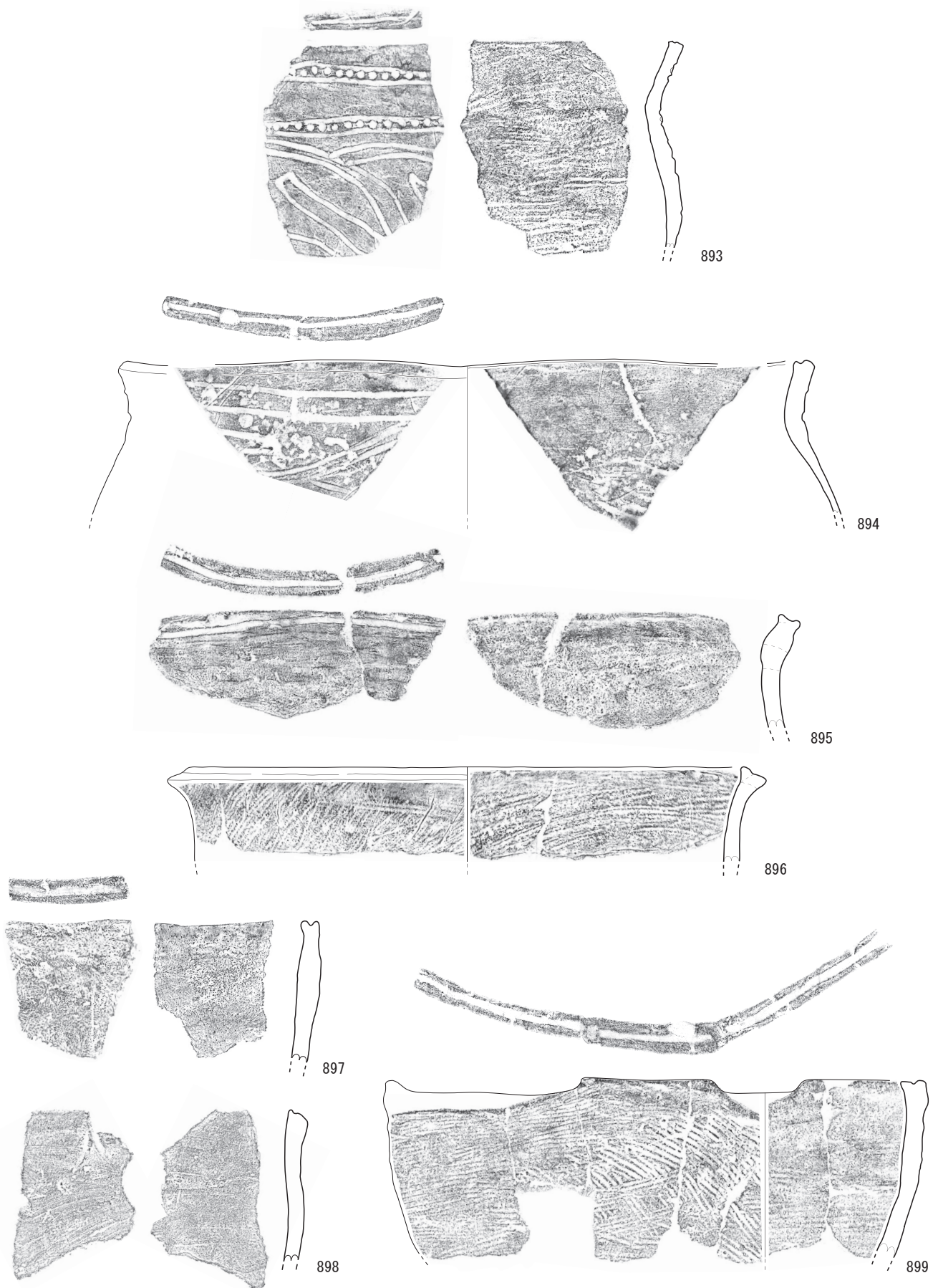


第2-54图 VIIIc類土器(1)



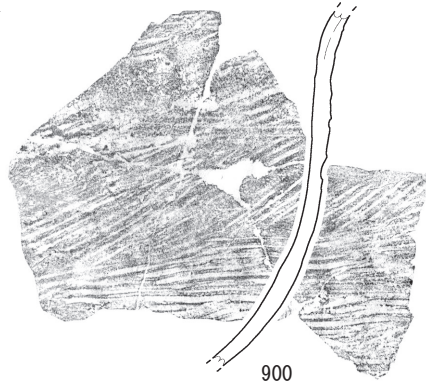
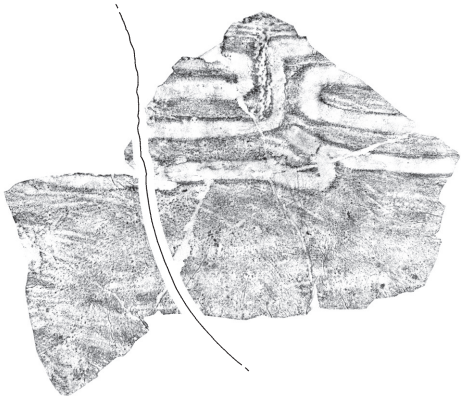
0 (1 : 3) 10cm

第2-55図 VIIIc類土器(2)



第2-56図 VIIIc類土器(3)

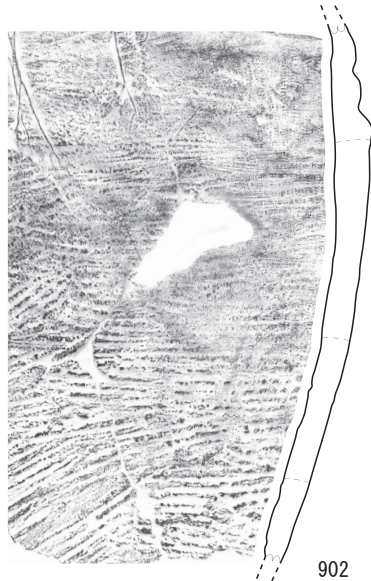
0 (1 : 3) 10cm



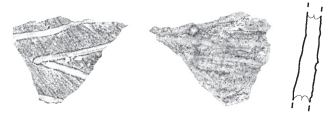
900



901

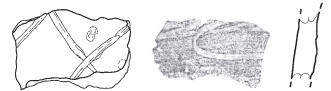


902



903

年代測定 2697-2567 cal BC



904

年代測定 2498-2398 cal BC



905

年代測定 2671-2554 cal BC



906

第2-57図 VIIIb, c類土器 (胴部) (1)

0 (1 : 3) 10cm